# (5) 道上（みちうえ）遺跡

# 目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 215
Ⅱ　調査の方法と経過 …… 215
Ⅲ　調査の成果 …… 217
　1. 基本層位 …… 217
　2. 遺構 …… 217
　3. 遺物 …… 217
Ⅳ　まとめ …… 217

**調査要項**

**遺　跡　名**：道上遺跡（宮城県遺跡登載番号：06060）
**遺 跡 記 号**：ＡＱ
**所　在　地**：柴田郡大河原町小山田字館前
**調査対象面積**：600m$^2$（発掘面積189m$^2$）
**調 査 期 間**：昭和50年6月25日～7月2日
**調　査　員**：宮城県教育庁文化財保護課
　　技術主査　平沢　英二郎
　　嘱　　託　手塚均　清野俊太郎

# Ⅰ　遺跡の位置と環境

道上遺跡は、国鉄東北本線大河原駅の北西約2.7㎞の地点、柴田郡大河原町小山田字館前に所在する。

大河原町を地形的にみると、北部に高館丘陵、南部に角田丘陵があり、中央部には槻木低地が東に向ってのびている。槻木低地は、白石川によって高館丘陵が開析され、谷が埋積されて形成された盆地状低地であり、町はこの低地に立地している。高館丘陵から南に派生する丘陵（村田盆地と円田盆地の間を南にのびる丘陵）があり、その丘陵から南東方の町に向かってのびるいくつかの舌状小丘陵がある。本遺跡はこれらの舌状小丘陵のひとつに立地している。遺跡の立地している地域の標高は約40ｍで、丘頂部と水田面との比高差は約25ｍである。なお、地目は山林である。

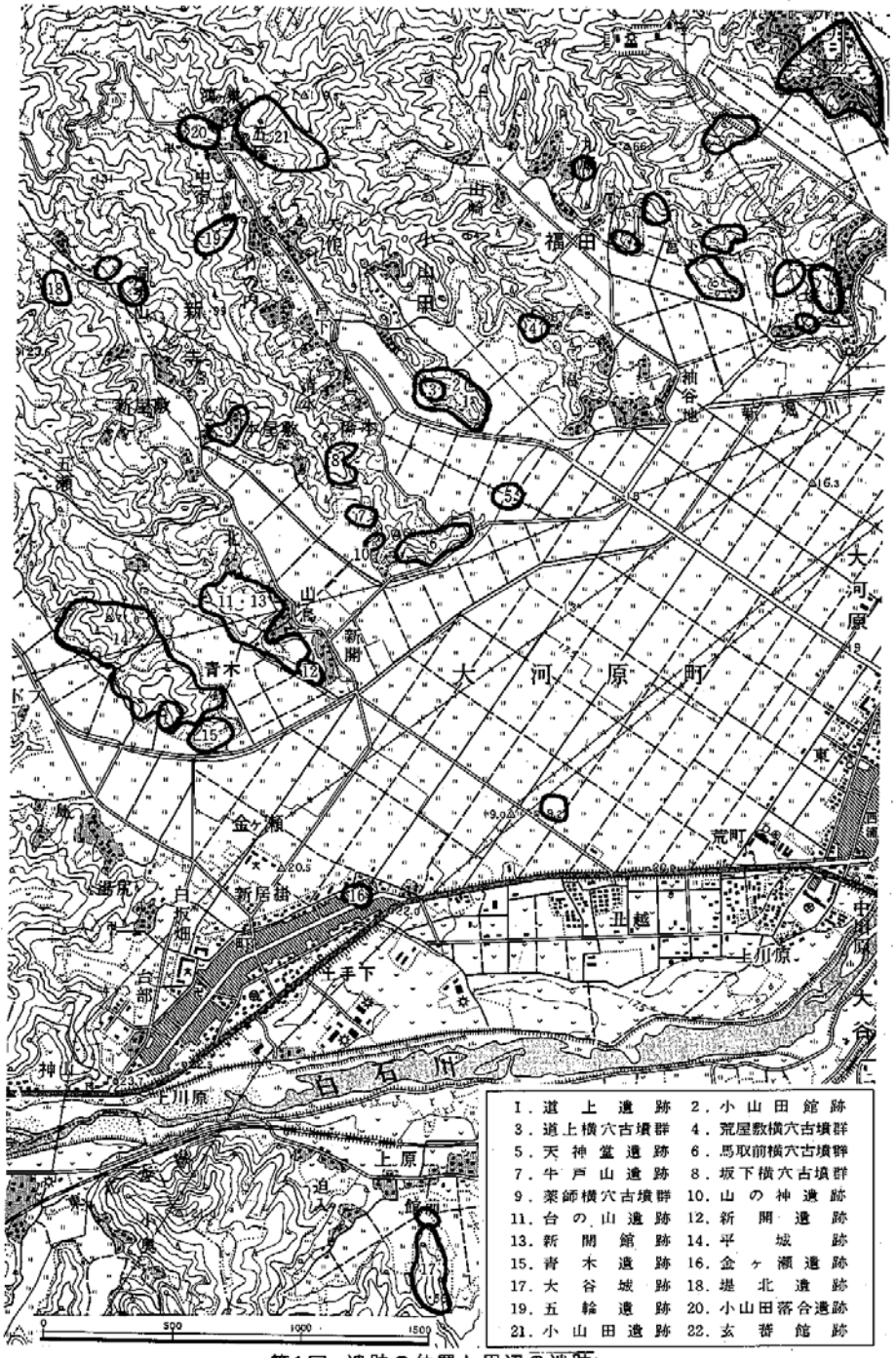
本遺跡周辺の遺跡をみると、縄文時代の遺跡としては小山田遺跡・小山田落合遺跡・堤北遺跡・台の山遺跡・青木遺跡（以上大河原町）等の遺物包含地があり、すべて丘陵に立地している。また上川名貝塚をはじめとする早期後半から前期初頭の槻木貝塚群（柴田町）が北東約10㎞の舌状丘陵の末端部に位置している。弥生時代の遺物包含地としては台の山遺跡（大河原町）があり、丘陵に立地している。古墳時代の遺跡としては遺物包含地・集落跡・横穴古墳がある。遺物包含地には、沖積平野に立地している天神堂遺跡、丘陵に立地している牛戸山遺跡・山の神遺跡・新開遺跡、自然堤防に立地している金ヶ瀬遺跡（以上大河原町）がある。集落跡には、台の山遺跡（大河原町）があり、丘陵に立地している。また横穴古墳には、道上横穴古墳群・荒屋敷横穴古墳群・薬師横穴古墳群・坂下横穴古墳群・馬取前横穴古墳群（以上大河原町）等がある。奈良・平安時代の遺跡としては遺物包含地・集落跡がある。」遺物包含地には・、沖積平野に立地している天神堂遺跡、丘陵に立地している五輪遺跡・牛戸山遺跡・山の神遺跡・新開遺跡（以上大河原町）等がある。集落跡には、台の山遺跡（大河原町）があり、丘陵に立地している。中世以降の城館跡としては小山田館跡・新開館跡・平城跡・大谷城跡（以上大河原町）・玄藩館跡（村田町）があり、すべて丘陵に立地している。なお本遺跡を含む丘陵（館）一帯は小山田館跡であると伝えられている。

# Ⅱ　調査の方法と経過

今回の調査は本遺跡にかかる東北新幹線の本線敷約600㎡を対象とし、約189㎡を発掘した。調査区は、新幹線中心杭295.200㎞を基準にして3ｍ単位のグリットを設定した。

発見されたピット群については、平板測量により100分の1の平面図を作成した。

調査は6月25日から開始した。その結果、地表下20～30㎝で地山に達した。この地山面でピ




第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

ット群を検出した。7月2日に調査のすべてを終了した。

# Ⅲ　調査の成果

## 1. 基本層位

調査区の基本層位は1層のみ確認された。この層は表土で暗褐色シルト層である。層の厚さは20～30cmで、腐葉土･凝灰岩質風化土などが堆積している。

## 2. 遺構

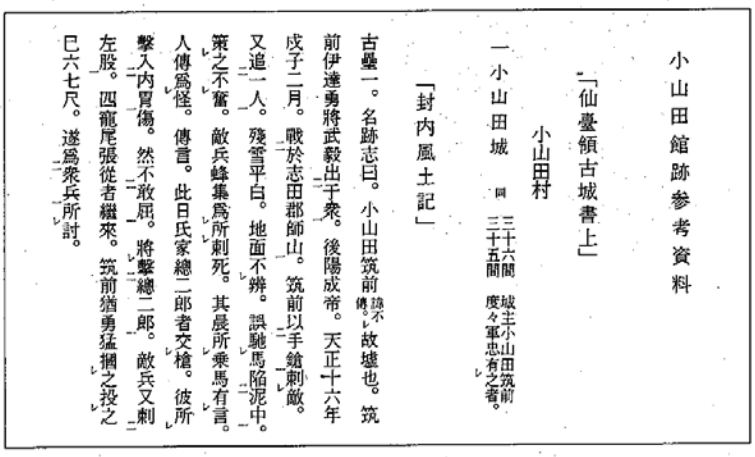
検出された遺構にはピット群がある。ピットは基準杭の南側に集中して約50個検出された。これらのピットは地山面で確認されており、径20cm前後の円形のものが多いが、なかには隅丸方形状のものもある。ピット内堆積土は凝灰岩質風化土であり、その中から遺物は発見できなかった。ピットはいずれも柱痕跡は認められず、また深さ、配置などに規則性は認められない。

## 3. 遺物

表土･ピットから、全く遺物は発見されていない。

# Ⅳ　まとめ

1. 道上遺跡は舌状小丘陵に立地しており、本遺跡を含む丘陵（館山）一帯は小山田館跡であると伝えられている。
2. 発掘調査において検出された遺構にはピット群があるが、柱痕跡は認められず、また深さ･配置などに規則性も認められないことから柱穴とは考え難い。
3. 遺物については、表土･ピットから全く発見されていない。
4. 出土遺物はなく、検出したピット群もその性格は不明であることから、小山田館跡との開係を積極的に説明できる資料を得ることができなかった。



小山田館跡参考資料

「仙臺領古城書上」

小山田村

一小山田城　同　三十六間　三十五間　城主小山田筑前度々軍忠有之者。

「封内風土記」

古壘一。名跡志曰。小山田筑前諱不傳。故墟也。筑前伊達勇將武毅出于衆。後陽成帝。天正十六年戊子二月。戰於志田郡師山。筑前以手鎗刺敵。又追一人。殘雪平白。地面不辨。誤馳馬陷泥中。策之不奮。敵兵蜂集爲所刺死。其晨所乘馬有言。人傳爲怪。傳言。此日氏家總二郎者交槍。彼所擊入内胃傷。然不敢屈。將擊總二郎。敵兵又刺左股。四寵尾張從者繼來。筑前猶勇猛摑之投之已六七尺。遂爲衆兵所討。

## 引用参考文献

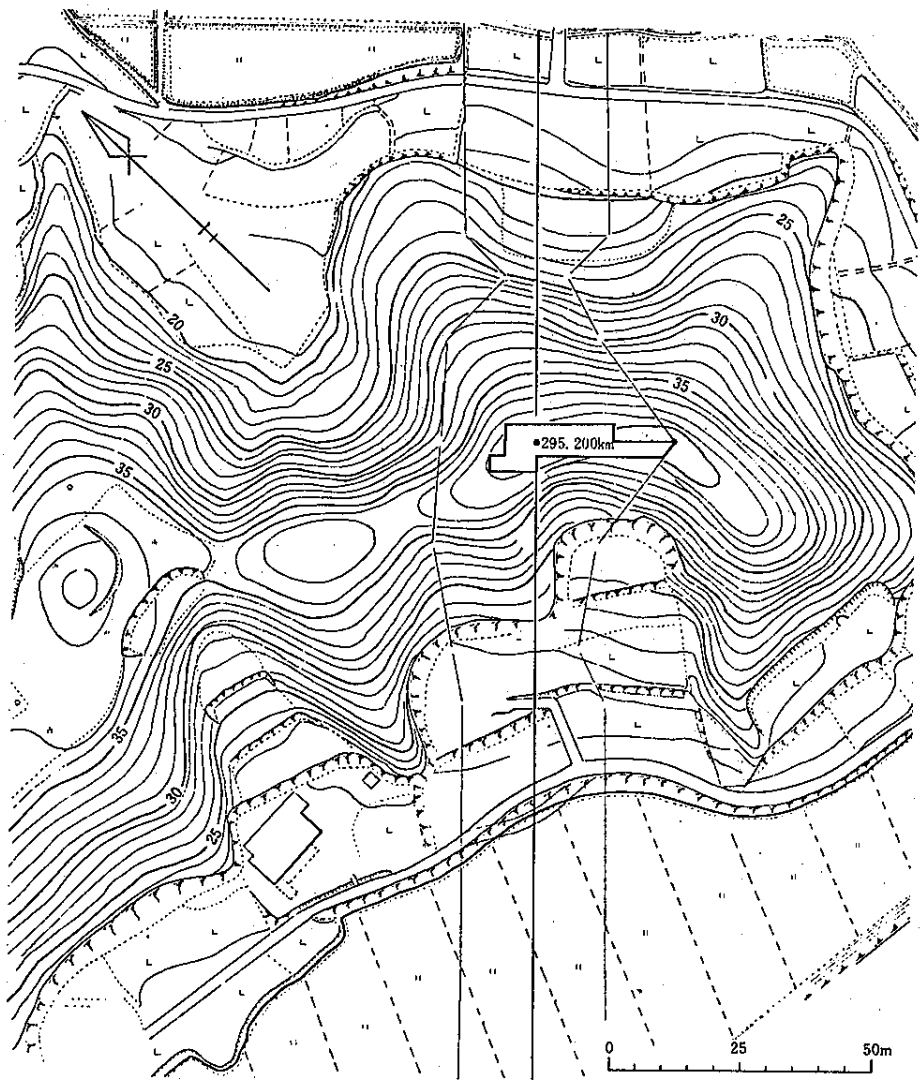

紫桃正隆　(1973)　「仙台領内古城・館第四巻」

田辺希文　(1772)　「対内風土記第一巻」『仙台叢書』

(1673)
(1680)　「仙臺領古城書上」『仙台叢書第四巻』

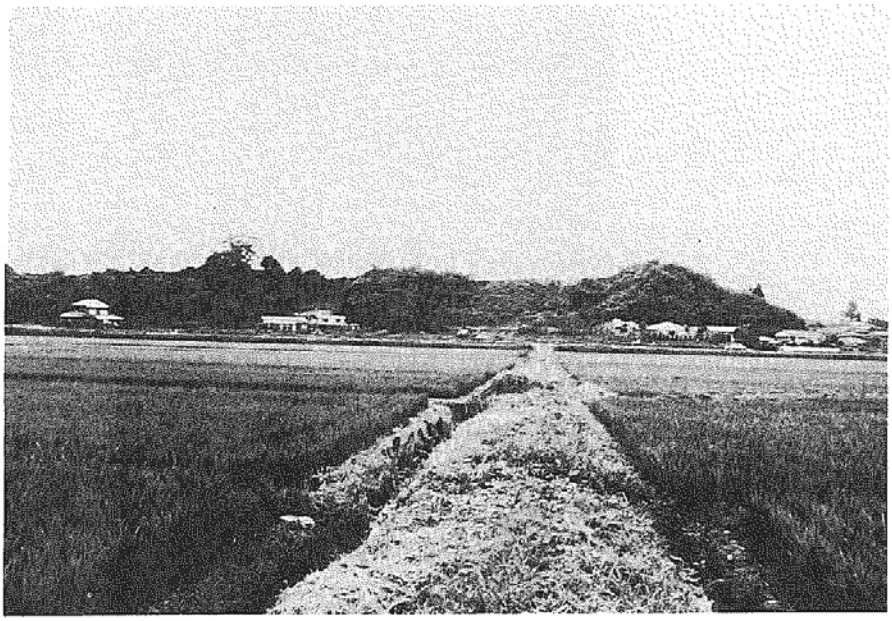
宮城県教育委員会　(1976)　「宮城県文化財発掘調査略報」
『宮城県文化財調査報告書第42集』

宮城県教育委員会　(1976)　「宮城県遺跡地名表」
『宮城県文化財調査報告書第46集』

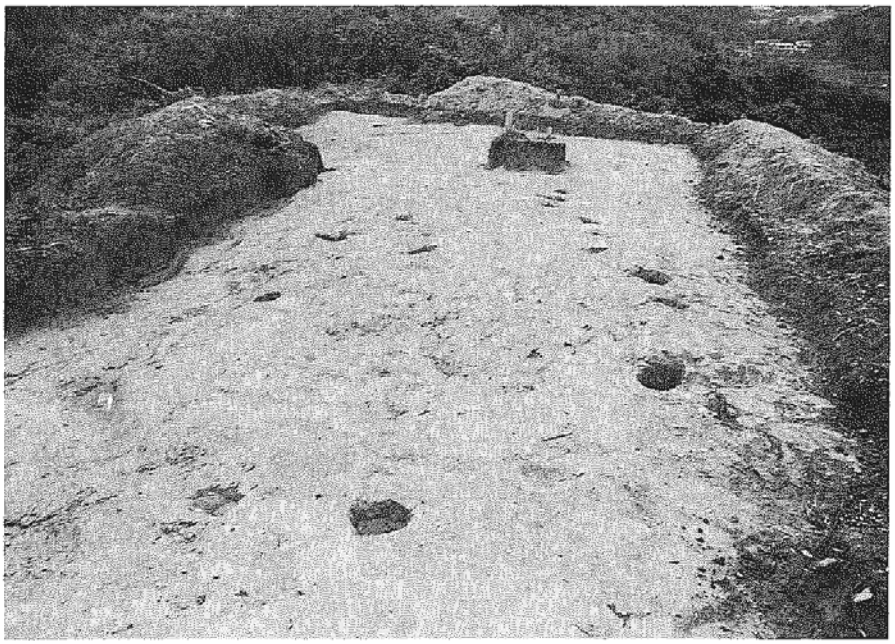




**第2図　遺　跡　地　形　図**

# 図　　版



図版１　遺跡遠景（南側から）



図版２　発掘状況１

図版 3　発掘状況 2

# (6) 八幡崎（はちまんざき）Ｂ遺跡

# 目　　次


Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 223
　1　位置と地形 …… 223
　2　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 223
Ⅱ　調査の方法と経過 …… 226
Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 228
　1　調査区の状況 …… 228
　2　竪穴住居跡とその出土遺物 …… 230
　3　掘立柱建物跡とその出土遺物 …… 234
　4　ピット群とその出土遺物 …… 236
　5　その他の遺構 …… 236
　6　遺構以外から出土した遺物 …… 238
　　1）縄文土器 …… 238
　　2）弥生土器 …… 238
　　3）土師器 …… 238
　　4）須恵器 …… 242
　　5）陶磁 …… 242
　　6）石器 …… 243
　　7）砥石 …… 244
　　8）石製模造品 …… 247
Ⅳ　考察 …… 249
　1　出土遺物の年代 …… 249
　2　堆積層の年代 …… 251
　3　遺構の年代 …… 251
Ⅴ　まとめ …… 253


## 調査要項

**遺　跡　名**：八幡崎Ｂ遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：22012）
**遺跡記号**：ＢＷ
**所　在　地**：宮城県宮城郡利府町利府字八幡崎
**調査対象面積**：約4,800m$^2$（発掘面積738m$^2$）
**調査期間**：昭和49年4月15日～5月10日（第1次）
　　8月28日～9月10日（第2次）
**調　査　員**：宮城県教育庁文化財保護課
　　技術主査　早坂春一　技術　宮崎敬典　小井川和夫　佐藤好一
　　嘱託　阿部　恵　田中則和　真山悟　阿部博志　森　貢喜　芳賀寿幸
　　清野　俊太郎

# Ⅰ　遺跡の位置と環境

## 1　位置と地形

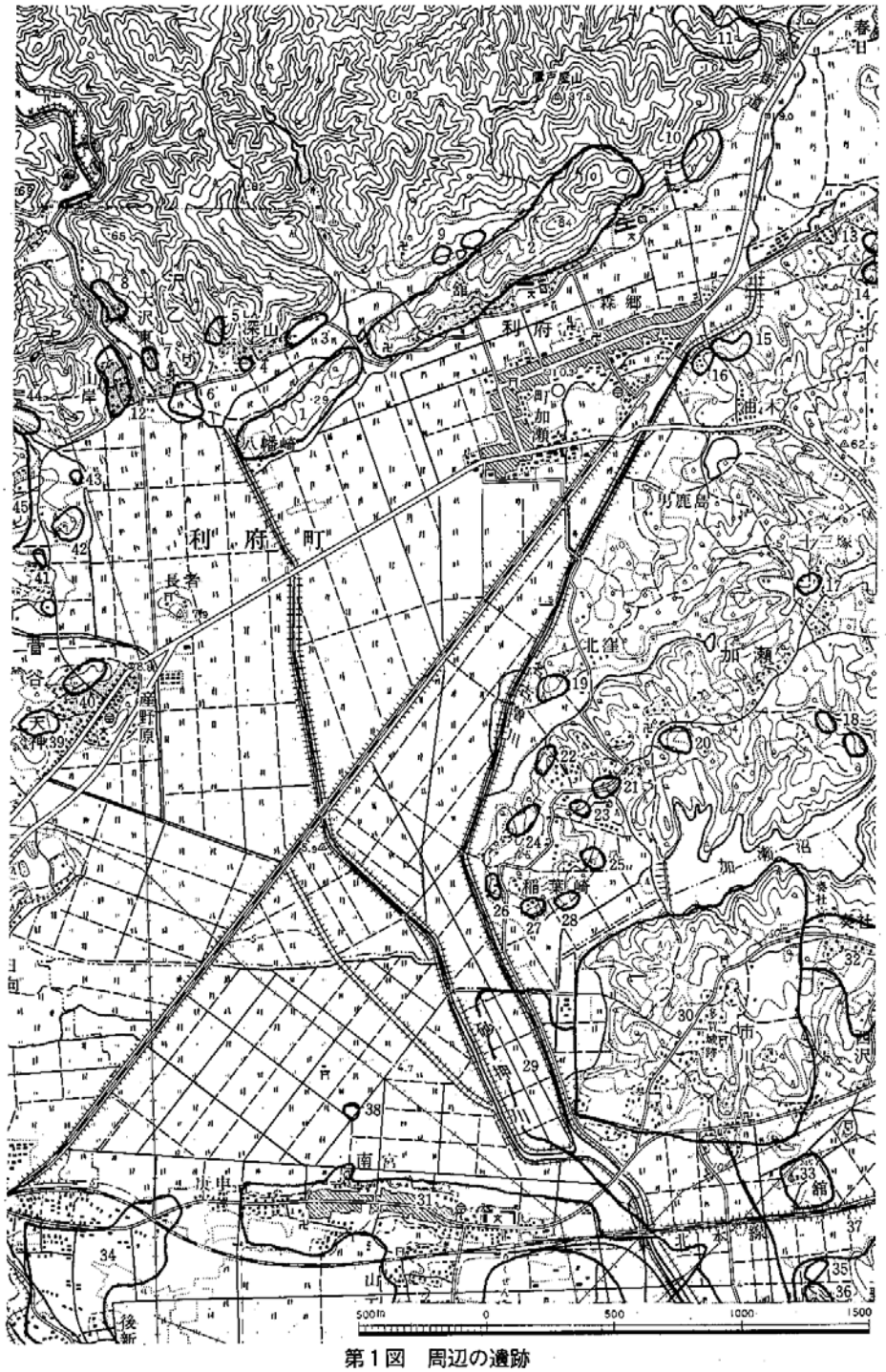
八幡崎Ｂ遺跡は、宮城県宮城郡利府町八幡崎に所在し、東北本線利府駅の北西方約1.1㎞の地点に位置している。

遺跡の所在する利府町は仙台市の北隣りにあたり、仙台市の周辺住宅地として急速にその様相を変えている地域の一つであり、宅地化や各種の開発は平地部分、丘陵地部分を問わずに進行している。

町内の地形を概観すると、町の西から北に向って町を囲むように広がる丘陵地と、その南側の沖積低地とに大きく区分することができる。前者の丘陵地は富谷丘陵（標高40～100m）とよばれ、奥羽脊梁山地帯の東翼になだらかにのびる奥羽山麓帯の一つである。後者の沖積低地は富谷丘陵の間をぬって東流する七北田川等による河成平野であり宮城野平野（狭義の仙台平野）とよばれている。そして、富谷丘陵は、沖積低地に接する部分では、しだいに低い丘陵となり、さらに各方面へ枝状に小丘陵を分岐させているが、遺跡は、町のほぼ中央部において沖積地に向って西に細長く張り出した枝状丘陵の先端部に立地している。遺跡部分における丘陵頂部の標高は約29mである。この丘陵上には、その東側に中世城館跡として、東部仙台平野では岩切城跡とともに著名な利府城（村岡城）跡が立地しているほか、城跡の西側全域において古墳時代以降各時代の遺物の散布が認められる。したがって本遺跡の範囲もまた、城跡西側の東西約700m、南北150mの丘陵部全域に及ぶものと考えられる。

## 2　周辺の遺跡と歴史的環境

遺跡付近の丘陵や沖積低地には、多くの遺跡が立地している。縄文時代の遺跡としては丘陵地帯に立地しているものが多く、川袋遺跡、台城遺跡、洞嬉遺跡などが知られている。また、後に述べる多賀城跡北部には、加瀬貝塚（鹹水性、縄文中期）もみられることから、縄文時代中期においては、海水が現在の低地にまで入りこんでいたことが想定される。縄文時代以前の遺跡は現在のところ町内では確認されていない。弥生時代については、土器等の遺物が若干採集されているものの遺跡、遺構等によるその実態は十分明らかにされていない。古墳時代の遺跡としては、法印塚古墳、川袋古墳群などのような高塚古墳や、菅谷横穴古墳群などのような横穴古墳が知られている。これらはいずれも古墳時代後期に属するものであるが、近年、多賀城跡の発掘調査によって方形周溝墓（古墳時代前期）が発見され、また、周辺地域から同時期の住居跡も認められている。古墳時代の集落跡と考えられる遺跡としては、丹波沢遺跡、蓬沼遺跡、産野原遺跡、熊野堂遺跡などがあげられる。奈良時代になると、本遺跡の南東方約3㎞




第１図　周辺の遺跡

の丘陵上に陸奥国府である多賀城跡が創建され、この地域は、距離的にも多賀城跡と密接なかかわりを有していたことが想定され、「余目」等の律令制に関すると思われる地名も残存している。多賀城跡と関連する遺跡としては、古くから春日大沢瓦窯跡の存在が知られている。そして、奈良・平安時代の集落跡と考えられる遺跡も数多く、それらからは瓦類が発見されることも多い。国府としての機能は中世まで存続し、その留守職・伊沢氏がこの地域の支配に大きく関与していたことにもより、中世の遺跡も多く知られている。城館跡としては岩切城跡（高森城跡）、利府城跡（村岡城跡）などが知られており、また、七北田川北岸東光寺の板碑群も著名である。さらに七北田川（冠川）流域には市場の存在が知られており、それに関する在家の記録も残されている（佐々木：1950）。当時の集落跡等、遺跡にもとづく具体的な様相は明らかではないが、七北田川流域や、本遺跡北方約0.4kmの丘陵麓に立地している沢乙遺跡などからも中世陶器の出土が知られており、沖積低地を含めてその周辺地域では中世においても様々の生活が活発に営なまれていたと考えられる。

遺　跡　地　名　表

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 遺跡番号 | 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 遺跡番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 八幡崎（B）遺跡 | 集落跡 | 縄文～平安 | 22012 | 24 | 稲葉崎遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22016 |
| 2 | 利府城跡 | 城館 | 鎌倉 | 22002 | 25 | 松崎B遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22046 |
| 3 | 熊野堂遺跡 | 包含地 | 古墳・平安 | 22029 | 26 | 稲葉崎B遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22043 |
| 4 | 沢乙遺跡 | 包含地 | 縄文・平安中世 | 22011 | 27 | 松崎A遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22042 |
| 5 | 深山遺跡 | 集落跡 | 縄文 | 22008 | 28 | 松崎C遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22047 |
| 6 | 前田遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22033 | 29 | 市川橋遺跡 | 包含地 | 縄文～平安 | 18008 |
| 7 | 大沢東A遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22035 | 30 | 多賀城跡 | 国府跡 | 奈良・平安 | 18006 |
| 8 | 大沢東B遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22036 | 31 | 山王遺跡 | 包含地 | 古墳・奈良平安 | 18013 |
| 9 | 館ヶ沢(A・B)遺跡 | 包含地 | 古墳～平安 | 22030 | 32 | 西沢遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 18017 |
| 10 | 同福寺遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22051 | 33 | 館前遺跡 | 城館 | 中世 | 18033 |
| 11 | 撰津森館跡 | 城館 | 中世 | 22049 | 34 | 新田遺跡 | 包含地 | 古墳・奈良平安・中世 | 18012 |
| 12 | 山岸遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22034 | 35 | 高平遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 18031 |
| 13 | 川袋遺跡 | 包含地 | 縄文 | 22023 | 36 | 高崎古墳群 | 円墳 | 古墳(中・後) | 18002 |
| 14 | 川袋古墳群 | 円墳 | 古墳 | 22057 | 37 | 高崎遺跡 | | | |
| 15 | 関根遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22050 | 38 | 内館館跡 | 城館 | 中世 | 18036 |
| 16 | 亜沼遺跡 | 包含地 | 古墳・平安 | 22022 | 39 | 西天神遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22013 |
| 17 | 洞嬉遺跡 | 包含地 | 縄文(中・後) | 22020 | 40 | 産野原遺跡 | 包含地 | 古墳・平安 | 22025 |
| 18 | 加瀬貝塚 | 貝塚 | 縄文（中） | 22031 | 41 | 馬場崎の遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22038 |
| 19 | 北窪遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22041 | 42 | 北熊野前遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22040 |
| 20 | 窪遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22014 | 43 | 法印塚古墳 | 古墳 | 古墳 | 22009 |
| 21 | 台城遺跡 | 包含地 | 縄文 | 22015 | 44 | 山苗代遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22037 |
| 22 | 台城B遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22044 | 45 | 菅谷横穴古墳群 | 横穴古墳 | 古墳（後） | 22004 |
| 23 | 台城C遺跡 | 包含地 | 奈良・平安 | 22045 | | | | | |

# Ⅱ　調査の方法と経過

東北新幹線の路線は、八幡崎地区において、東西方向に細長くのびる丘陵をわずかに西にカーブしながら横断している。したがって調査は、路線敷となる丘陵上の全域（南北両斜面および頂部平坦部）を対象とした。

調査区の設定は、中心杭335.260㎞と335.340㎞を結ぶ直線を南北軸とし、これに直交する東西軸とを基準とし、3×3mを最小単位としてグリッドを設定した。

そして、地形の変化に合わせて複数のグリッドを連結して1列毎に発掘し遺構確認作業を行なったのち、必要に応じて周辺を拡張することにした。

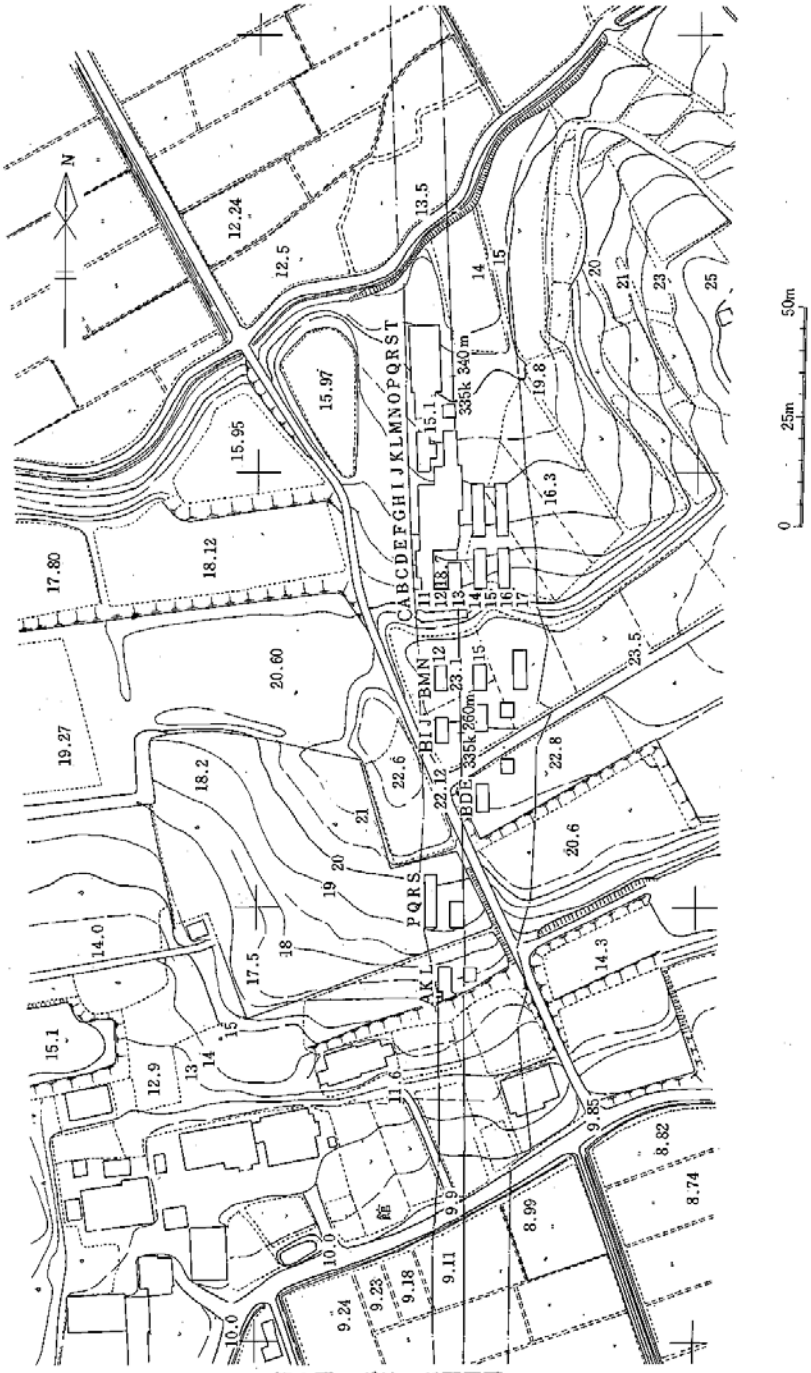
このような手順によって4月15日から調査を開始したが、その時点において頂部平坦部および南斜面は、地権者との買収交渉が中途であった。さらに路線敷は着手西側に拡幅されることになっていたが、その拡幅部分についての土地交渉も難行していた。このため、発掘調査は北斜面の旧来の路線敷を対象とした。

北斜面では、表土下に縄文～平安時代までの遺物を含む堆積層が認められ、また柱穴を含む多くのピット群が検出された。拡張して精査を行った結果、掘立柱建物跡4棟、その他の遺構が確認された。これらの諸遺構の調査が終了する時点においても、依然土地交渉は結着をみなかったため5月9日、この地区の調査終了をもって発掘調査を一時中断した。調査面積は約450$m^2$である。なお、北斜面北東部分は、調査開始前に排水路掘削等によって原状がそこなわれていたため、調査対象域から除外した。

頂部平担部・南斜面東側拡幅部分の土地問題が解決したのは8月中旬である。このため8月28日から第二次調査を開始した。

調査の結果、頂部平坦部および拡幅部分は、後世の削平が著るしく、遺構・遺物は全く発見されなかった。南斜面においても、特に東側は開田等のため原状は著しくそこなわれていたが、西側部分で遺物を含む堆積層、さらに斜面下部において竪穴住居跡1軒が検出された。

第二次調査は9月10日に終了した。発掘面積は、南斜面90$m^2$、頂部平坦部135$m^2$、北斜面拡幅部分63$m^2$の計288$m^2$であり、一次調査分との合計は738$m^2$である。




第２図　グリッド配置図

# Ⅲ　発見された遺構と遺物

すでに述べたように調査区は南斜面、頂部平坦面、北斜面の三地域にわけられる。頂部平坦面は、地山以下までかなり深く、撹乱が及んでおり（転地がえし）、遺構、遺物はほとんどみられなかったが、南斜面では斜面下位で竪穴住居跡1軒、北斜面では掘立柱建物跡を含むピット群等の遺構が確認され、また遺物も出土した。

## 1　調査区の状況

**〔南斜面〕**

南斜面部分は、調査区を南東から北西にかけてななめに道路が走っており、この道路の東側は開田工事によって大善く原状が変更している。このため、比較的旧地形を残していると思われる路線敷南西部の畑地を調査対象とした。調査の結果、地表下50㎝で地山（岩盤）に達しその間に2層の堆積層が認められた。第1層は表土（暗褐色粘土質シルト層）で、遺物（細片となった土器等）が若干出土した。第王層は暗褐色粘土質シルト層で地山上に約10㎝の厚さで堆積している。その土性は第1層に近似している。遺物は若干出土しているがいずれも細片であり、またその出土状態も不規則であることから、二次的な堆積によるものと考えられる。遺構としては、斜面下部から竪穴住居跡1軒が検出された。確認面は地山面である。

**〔頂部平坦面〕**

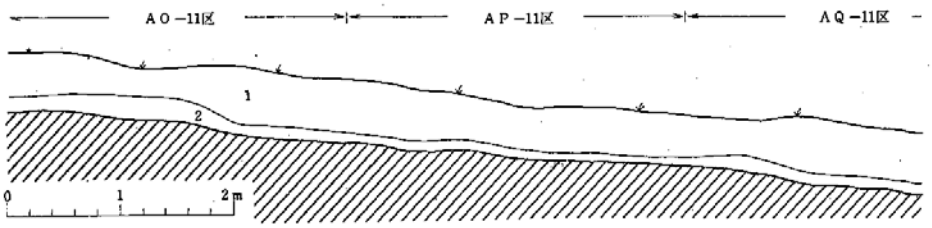
この地区は標高約23ｍでほぼ平坦であり、畑地として使用されている。しかし、この畑地は丘陵項部を削平して造成したもので、削平土は主に北側に移動されていることが現地形からも推定することができた。調査によっても同様の結果が得られ、平坦面南部では、表土下5㎝で地山に達し、北側では盛土層の下にさらに旧表土と考えられる層も残存していた。

出土遺物は全くない。

**〔北斜面〕**

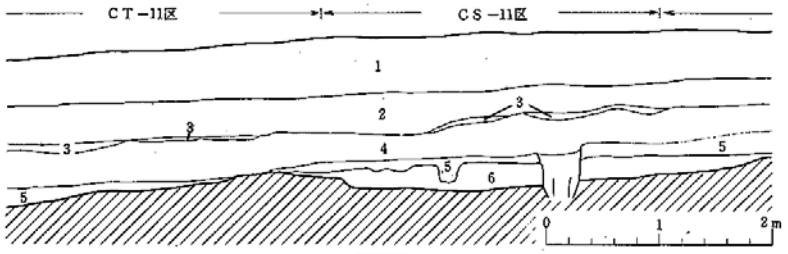
北斜面は標高19mから14mの間にゆるやかに傾斜する斜面である。調査区東側には小さな谷が入りこんでおり、調査区はこの谷に面した西側の小尾根部分である。したがって、調査区は斜面全体の傾斜に合わせて北側に傾斜し、また、谷に向かって東側に傾斜している。

調査区の微地形は、南北方向距離10mに対し約5mの落差を有する緩斜面であるが、その中央部の標高16m付近で傾斜はさらに緩くほぼ平坦な部分がみられる。この平坦部分を除き南北に堆積層が認められ、南側の堆積層は3層認められた。第1層は表土である。第2層は暗褐色粘土質シルト層で厚さ10～30㎝である。第2層は中央平坦部に近づくにつれて薄くなる。この



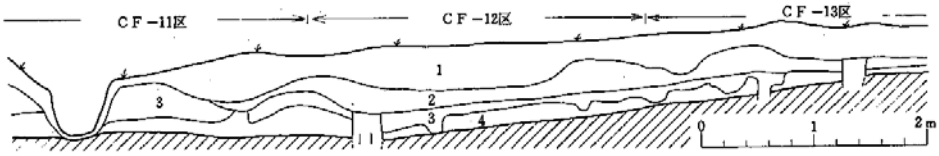

| 層No. | 土色 | 土性 | 備考 | 遺物とり上げ層位 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 暗茶褐色 | 粘土質シルト | 表土 | 1 |
| 2 | 暗褐色 | 〃 | | 2 |

第３図　南斜面断面図




| 層No. | 土色 | 土性 | 備考 | 遺物とり上げ層位 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 暗褐色 | シルト | 表土 | 1 |
| 2 | 〃 | 〃 | 1よりややくらく凝灰岩粒がまじる | |
| 3 | オリーブ褐色 | 〃 | 凝灰岩ブロックが多くまじる | 2 |
| 4 | 黒褐色 | 〃 | かたい、凝灰岩粒多くまじる | |
| 5 | 黒色 | 〃 | 木炭、凝灰岩粒まじる。旧表土 | |
| 6 | オリーブ褐色 | 〃 | 粘質がある | 3 |

第４図　北斜面断面図




| 層No. | 土色 | 土性 | 備考 | 遺物とり上げ層位 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 暗褐色 | シルト | 表土 | 1 |
| 2 | 〃 | 〃 | 粘質がありかたくしまる、凝灰岩粒がややまじる | 2 |
| 3 | 黒褐色 | 〃 | 旧表土 | 3 |
| 4 | 暗褐色 | 〃 | 地山漸移層 | 3 |

第５図　北斜面断面図

層には土師器、須恵器、陶器等の遺物を包含しているが、その出土状態は、第一次的な堆積状態を示しているものではない。第3層は黒褐色シルト層で厚さは約10cmである。第2層同様平坦部に近づくにつれて薄くなるが、第2層よりも更に北側まで延びている。遺物は土師器等が出土したが第5表にみるようにその量は極めて少ない。第3層以下は地山であるが、その間には漸移層が認められる。また第3層下面には、凹凸がみられ、また木根がとも思われる落ちこみも認められることから第3層はある時期の表土であったと考えられる。

この部分からは4棟の掘立柱建物跡を含むピット群が検出された。いずれも第3層上面において確認された。

北側部分は、斜面下部に向うにしたがって傾斜の度合を少くしているが、調査区北端では、土砂は厚く堆積しており、その厚さは約1.5mである。層もまた、下部では多くなるが基本的に南側部分と大差はない。最も層の多いＣＳ11区でみると、第1層は表土である。第2層は暗褐色土で厚さは20～30㎝前後である。第3層は、第2、4層間に薄くみられるもので、地山（凝灰岩）ブロックが多量にまじるオリーブ褐色土で、斜面下部に堆積している。第4層は黒褐色土である。地山粒が多量にまじっている。厚さ20～30㎝。第5層は黒色土で斜面下部に堆積している。部分的に途切れており明確ではないが、下面に落ちこみ等による乱れがあることや層の状況からみてある時期の表土であろうと推定された。第6層は、地山粒がややまじるオリーブ褐色土で地山の凹んだ部分に堆積したものである。

遺物は上記の各層から出土した。土師器、須恵器が多いが、ほとんど細片でそれらの出土の状態は不規則である。また以下の項で述べるように各時期のものが混在しており、堆積層は二次的なものであると考えられる。

遺構としては斜面下部において多くのピット群が認められた。これらは、堆積層の存在する部分では第5層上面で確認されている。

## 2　竪穴住居跡とその出土遺物

住居跡は南斜面の下部で検出された。斜面部分に存在するため、住居跡の南半は、後の浸蝕等によって失なわれている。

**〔遺構の確認〕**　地山面である。

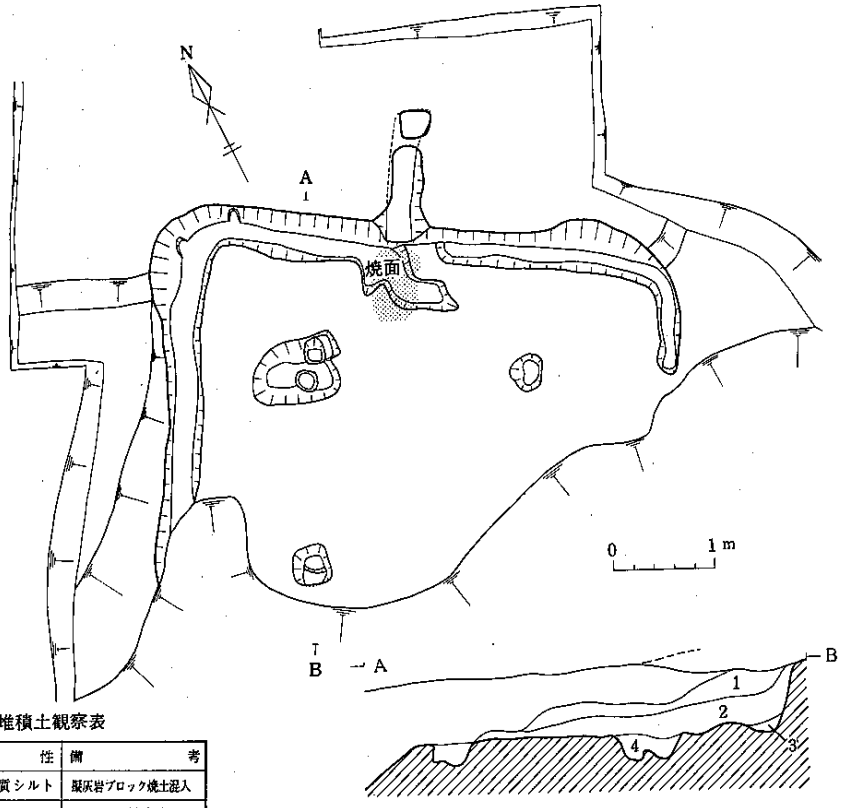
**〔平面形、規模〕**　北半部のみのため不明な点も多いが、隅丸方形を呈すると思われる。北辺長は約4.8mである。

**〔壁〕**　地山(岩盤〕を壁としており、かたくしっかりしている。かなり急角度に立ち上がり、最も良く残存している北壁で、その高さは約60㎝である。

**〔床〕**　地山を床としている。ほぼ平坦である。

**〔柱穴〕**　床面上からいくつかのピットが検出された。しかし、それらは、それぞれ形状、深さ等を異にしており、柱穴として組み合うかどうかは明らかにできなかった。また北東隅の住居壁を掘りこんで2個の小ピットが認められた。壁柱穴かとも考えられるが、他の部分には見られず、その性格は不明である。

**〔周溝〕**　住居の残存する範囲内においては、カマド部分を除いて認められる。断面形はU字形である。底面幅は10～20㎝で床面からの深さは5～9㎝前後であり浅い。北東側を巡る周溝




住居内堆積土観察表

| 層No. | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 凝灰岩ブロック焼土混入 |
| 2 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 凝灰岩細粒木炭混入 |
| 3 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 凝灰岩細粒多く入る |
| 4 | ピット埋土 | | |

第６図　竪穴住居跡

は壁に沿い、整然としたものであるが、北西部のそれは、カマド部分では不規則に住居内にのびている。この周溝の乱れについては、この部分がカマド燃焼部底面の焼面におおわれていたことから、後世の撹乱等によるものでないことは明らかであるが、その理由については不明である。

**〔カマド〕**　北辺中央よりやや西寄りに認められたが、燃焼部側壁・天井部がすでに崩壊しており、その規模等は明らかでない。ただし、床面上に底面と考えられる70cm×50cmの範囲の焼面が認められた。煙道部は地山を掘り抜いてつくられており、天井部の一部が残存している。底面幅は約25cm、長さは約110cmで、底面は先端に向うに従って高くなっており、そのまま煙出しピットに至る。なお、燃焼部と煙道部間は、住居壁に連続する高さ約10cmの段で区切られている。

**〔層位〕**　住居内の堆積土は3層認められた。第1層、第2層はともに暗褐色粘土質シルト層で混入物の相違によって区分される。いずれも北側から住居内に向って流入したもので、第2層は、広く床面上をおおっている。第3層は、地山粒が多くまじる暗褐色粘土質シルト層で壁

際に堆積している。壁の崩落土が主因となった堆積層と考えられる。

**〔出土遺物〕**（第7図）

床面上･周溝内･煙道内、煙出しピット及び堆積土中から出土しており、堆穫土出土のものが多い。しかし、いずれも小破片が多く、図示できるものは少い。したがって、以下は図示した遺物について述べ、他は第1表に示した。

**床面上出土の遺物**

丸底の土師器坏である（1）。外面中位に軽い段がある。磨滅が著しく器面調整については不明な点が多いが、外面段以上ではヨコナデのちヘラミガキ、段以下ではヘラケズリのちヘラミガキと思われる。内面はヘラミガキ･黒色処理が施されている。

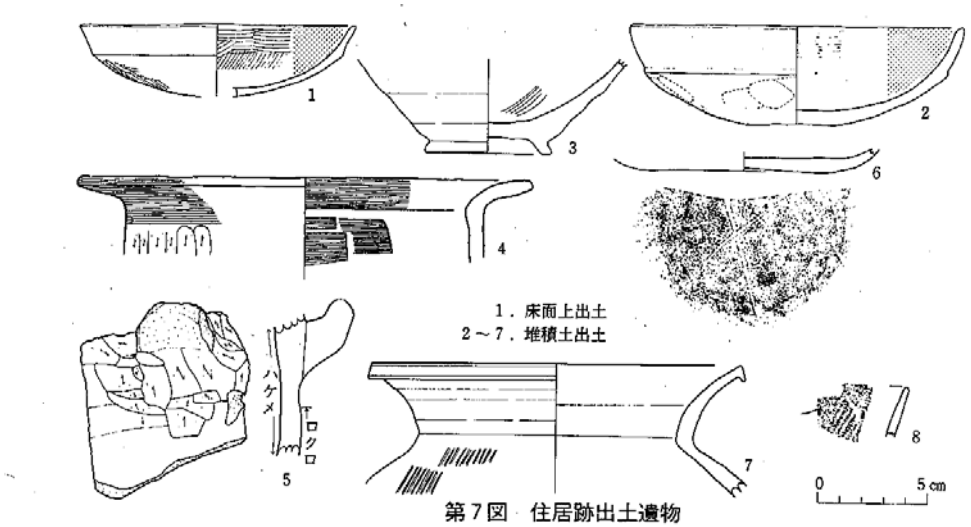
**堆積土出土の遺物**

弥生土器　口縁部が一点出土している（8）。小片のため器形は明らかでない。縄文（ＲＬ）が施文されており、器厚は端部に向うに従って薄くなる。

**土師器**

**坏**（2）丸底に近い平底の坏である。外面中位に段があり、段を境として上部に横ナデのちヘラミガキ、下部にヘラケズリのちヘラミガキが施されている。内面にはヘラミガキ･黒色処理が施されている。

**高台付坏**（3）製作に際しロクロを使用したものである。口縁部を欠く。体部は直線的に開く器形のもので付高台である。底部の切り離し技法は、高台部接合の際の調整によって消されている。坏部外面にはロクロ調整痕、内面にはヘラミガキが観察される。なお、この土器には再酸化を受けた痕跡が認められ、内面は本来黒色処理されていたものが脱色したものと考えられる。




第７図　住居跡出土遺物

**甕**（4）は頸部で強く屈折し、口縁部は水平に近い。長胴形の甕と思われる。小片のためロク
ロ使用の有無は確認できない。口縁部内外に横ナデ、体部外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

（5）は、把手のつけられた体部破片である。器外面にはロクロ使用痕が明瞭に認められ、内面には刷毛目が施されている。なお、この土器は甕として取り扱ったが、小片であり器形は不明である。甑の可能性もある。

須恵器

**坏**（6）底部のみの破片である。底全面に回転ヘラケズリが施されており切り離し技法は不明である。底面に「×」印のヘラ書きがある。

**甕**（7）体上半以上が現存する。小形の甕である。頸部はゆるく外反し、口縁端部は、下端がのびて断面三角形状を呈す。体部外面に平行タタキ目がみられる。

**第１表　住居跡出土土器破片集計表**

| 種別 | 器形 | 部位 | 調整 | 床 | 周溝 | 煙道 | 煙出 | 堆積土 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 坏 | 口縁部 | ロクロ | | | | | 2 | 2 |
| | | 体部 | ロクロ | | | | | 2 | 2 |
| | | 底部 | 回転ヘラケズリ | | | | | 2 | 2 |
| | 甕 | 口縁部 | | | | | | 1 | 1 |
| | | 体部 | 平行タタキ－平行タタキ | 2 | | | | 3 | 5 |
| | | | －青海波 | | | | | 4 | 4 |
| | | | －ナデ | | | | | 6 | 6 |
| | | | ケズリ－ナデ | 1 | | | | 5 | 6 |
| | | | ナデ－ナデ | | | | | 3 | 3 |
| | | | 不明－不明 | | | | | 2 | 2 |
| | | 底部 | ケズリ | | | | | 1 | 1 |
| 土師器 | 坏 | 口縁部 | ミガキ－内黒 | 2 | | | | 1 | 3 |
| | | | ミガキ－ミガキ(丹) | | | | | 1 | 1 |
| | | | ロクロ－内黒 | | | | | 1 | 1 |
| | | | 不明－内黒 | | | | | 7 | 7 |
| | | 体部 | 横ナデ(段)－内黒 | 2 | | | | 4 | 6 |
| | | | ミガキ－内黒 | 1 | | | | 3 | 4 |
| | | | ケズリ－内黒 | 1 | | | | 6 | 7 |
| | | | 不明－内黒 | 2 | | | | 8 | 10 |
| | | 底部 | 不明－内黒 | | | | | | |
| | 甕 | 口縁部 | 横ナデ－横ナデ | 3 | | | | 1 | 4 |
| | | | 横ナデ 横ナデ(ロクロ使用) | | | | | 6 | 6 |
| | | | 不明－不明 | | | | | 1 | 1 |
| | | 体部 | 刷毛目－刷毛目 | | | | | 6 | 6 |
| | | | ナデ | 2 | | | 1 | 8 | 10 |
| | | | ケズリ－刷毛目 | | | | | 2 | 2 |
| | | | ナデ | | | 1 | | 10 | 11 |
| | | | 内黒 | | | | | 2 | 2 |
| | | | 不明 | | | | | 5 | 5 |
| | | | ナデ－刷毛目 | | | | | 1 | 1 |
| | | | ナデ | 1 | | | 2 | 5 | 7 |
| | | | ミガキ－不明 | | | | | 1 | 1 |
| | | | タタキメ－ナデ | | | | | 1 | 1 |
| | | | 不明－ナデ | | | | | 7 | 7 |
| | | | 内黒 | | | | | 1 | 1 |
| | | | ミガキ | | | | | 1 | 1 |
| | | | 不明 | 27 | 4 | | 2 | 111 | 144 |
| | | 底部 | ケズリ | 2 | | | | 2 | 2 |
| | | | 木葉痕 | | | | | 2 | 2 |
| | | | 不明 | | | | | 4 | 4 |
| | 高坏 | 裾 | ミガキ－不明 | | | | | 1 | 1 |
| 計 | | | | 46 | 4 | 1 | 3 | 240 | |

## 3　掘立柱建物跡とその出土遺物

調査区北側斜面第3層上面より多くのピットが検出された。掘り方と柱穴痕の区別の有無、位置関係等を検討した結果、4棟分の建物跡を確認した。

### 第1号建物跡

斜面の最も南側に於いて確認された。南北3間約5m（北から1.5m＋1.9m＋1.6mと不ぞろいである。）、東西2間約2.9m（西から1.4m＋1.5mとやや不ぞろいである。）の総柱の建物跡である。掘り方は、一辺約30cmで方形を基調としており、深さは、深いところで確認面から約40cm、浅いところで約10cmのもので、全て柱痕跡が確認されている。柱痕跡は、直径約10～14cmの円形を呈している。各掘り方の堆積土中からの出土遺物はない。

### 第2号建物跡

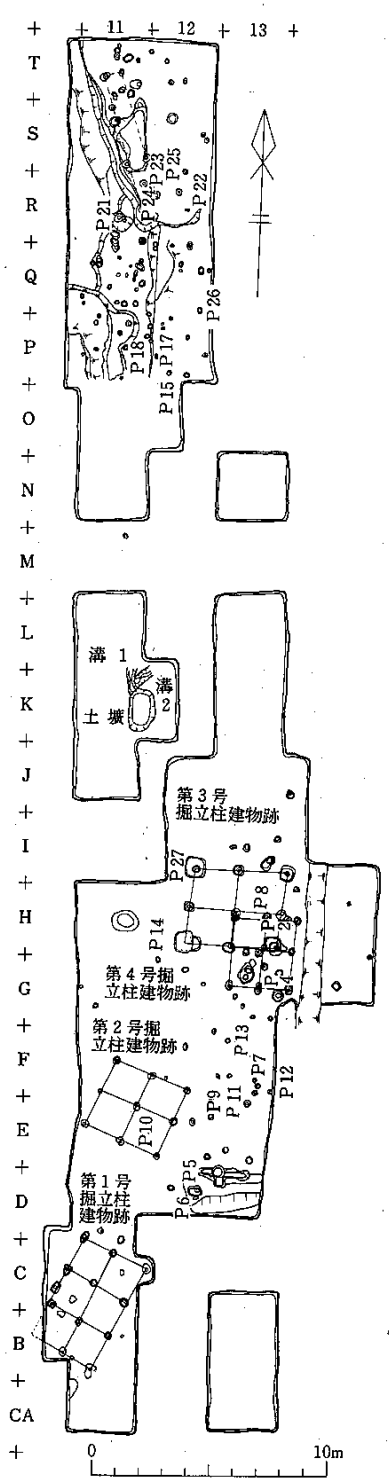
第1号建物跡の北側約4m離れたところで確認された。南北2間約3.1m（北から1.5m＋1.6mとやや不ぞろいである。）東西2間約3.3m（西から1.7m＋1.6mとやや不ぞろいである。）で総柱の建物跡である。

掘り方は、約20～30cmで方形を基調としており、深さは、約12～14cmのもので、全て柱痕跡が確認されている。柱痕跡は直径約10～20cmの円形を呈している。出土遺物として柱痕跡から土師器甕の体部破片が出土している。器面調整は外面が刷毛目、内面か不明のものが1点あり、他は細片のため不明なものである。

### 第3号建物跡

第2号建物跡の北東側、約5m離れたところで第4号建物跡と重複して確認された。第4号建物跡に切られており、それより古いものである。

南北2間約3.3m（北から1.8m＋1.5mと不ぞろいである。）、東西2間約3.9m（西から1.8m＋2.1mと不ぞろいである。）で総柱のある建物跡である。掘り方の大きさは




第８図　掘立柱建物跡

四隅のものと、その他のものとで違いがある。四隅にある掘り方は、いずれも一辺60～80cm、深さは約30cmの方形のもので全て柱痕跡が溜認められた。柱痕跡は直径約20cmの円形を呈している。その他の掘り方は、一辺約30cmで四隅のものより小さい。深さは約15～25cmの方形のもので第4号建物跡の掘り方と重複している掘り方以外、柱痕跡が認められた。痕跡は直径約20cmの円形を呈している。出土遺物としてピット2・4・27の掘り方の埋土中から土師器、坏の体部破片、甕の口縁部破片と体部破片が出土している。器面調整は、坏の体部破片は外面がヘラケズリ、内面はヘラミガキで黒色処理されているものである。甕の口縁部破片は外面が横ナデで内面が不明なもの、体部破片は外面がヘラケズリで内面が不明なものがある。他は内外面とも不明である。

## 第4号建物跡

第3号建物跡と重複して確認された。第3号建物跡を切っており、それより新しいものである。南北2間約3.2m（北から1.5m＋1.7mと不ぞろいである。）、東西2間約2.7m（西から1.4m掘り方は、一辺30cm、深さは約15～27cmの方形のもので、第3号建物跡と重複している二つの掘り方と東側の掘り方一つ以外で柱痕跡が認められた。柱痕跡は直径約10～20cmの円形を呈している。出土遺物としてピット8の掘り方の堆積土中から土師器甕の体部破片が出土した。
器面調整は内外面とも不明なものである。

**第２表　掘立柱建物跡出土土器破片集計表**

| | | | | 第１建物跡 | 第２建物跡 | 第３建物跡 | | | 第４建物跡 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | Pit10 | Pit 2 | Pit 4 | Pit27 | Pit 8 |
| 土師器 | 甕 | 口縁部 | 横ナデ―不明 | | | | | 1 | |
| | | 体部 | 刷毛目―不明 | | 1 | | | | |
| | | | ヘラケズリ―不明 | | | | | 3 | |
| | | | 不明―不明 | | 1 | | | | 1 |
| | | | 不明―ナデ | | | | 1 | | |
| | 坏 | 体部 | ヘラケズリ―ミガキ(黒) | | | 1 | | | |

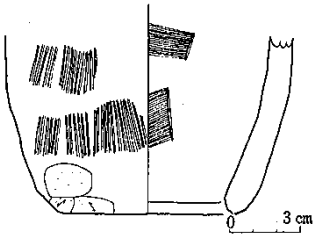
## 4　ピット群とその出土遺物

北斜面南側と、北側の低地部とで検出された。

**〔南側ピット群〕**　掘立柱建物跡として組み合うものを除いたものである。なお形態上木根によるものと考えられるものも含まれている。規模は、径20～50㎝と多様であり、深さについても同様である。遺物が出土したピットも少なく、その性格については明らかでない。ただし、中には、柱痕跡の確認できたものもある。したがって、すでに述べた4棟以外の建物跡に伴う可能性のあるものもあるが、組み合う他のピットは検出されず明確ではない。

**〔北側ピット群〕**

この地区は、北東部の低地に対して、地山が西側から傾斜しており、ピットはこの傾斜面に多く検出された。南側のピット群と同様その形態は多様であり、何らかのまとまりを有すると考えられるものは少い。ただし、西側から低地へ向う傾斜面の下部には柱痕跡が確認された、1群の柱穴群があり、東西に長い1間×4間の構築物ともみられる。さらに、この部分では、地山が整形されたかのように段状をなしており、また、周辺には同程度の規模をもつ柱穴もみとめられる。これらのことから、この部分には何らかの施設が存在していたと思われるが、その性格については明らかでない。南東の柱穴から土師器、須恵器が出土している。その他のピットにおいても、遺物の出土がみられたものがある。いずれも細片である。その内容は第3表に示した。



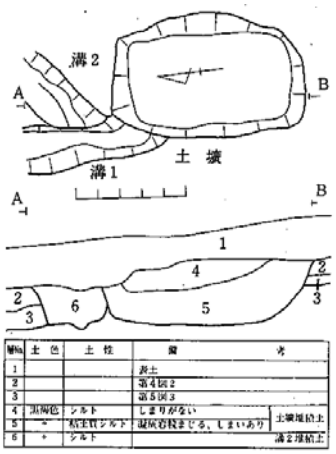

第９図　ピット７出土遺物

## 5　その他の遺構

その他の遺構として北斜面中位において検出された土壙、溝がある。

**土壙**

調査区北側斜面**ＣＪ・Ｋ**－11・12グリットの2層上面において確認された。溝と重複している。溝を切っており、それより新しいものである。平面形は、長軸約1.8m、短軸1.2mの楕円形を呈している。壁は、ゆるやかに立ち上がる。壁高は、約60～30㎝である。底面は、ほぼ平担である。堆積土は、2層あり、第1層：黒褐色（10ＹＲ2/3）シルト層で、しまりがない。第2層：黒褐色（10ＹＲ2/3）、土質シルト層で、岩盤




| 層No. | 土色 | 土性 | 備考 | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | | | 表土 | |
| 2 | | | 第4図2 | |
| 3 | | | 第5図3 | |
| 4 | 黒褐色 | シルト | しまりがない | 土壙堆積土 |
| 5 | 〃 | 粘土質シルト | 凝灰岩粒まじる、しまいあり | |
| 6 | 〃 | シルト | | 溝2堆積土 |

第10図　土壙溝

の粒子がブロック状に混入している。いずれも自然堆積土である。出土遺物は、堆積土中、底面上から土師器（坏・甕）須恵器（坏・甕・壺）の破片が出土している(第3表)。ほとんど層の傾斜に沿っており、自然に流入したものである。性格･年代については、不明であるが、確認面が2層上面で2層を掘り込んでつくられており、2層は、再堆積層であることから比較的新しい時期のものである。

## 溝

調査区北側斜面ＣＫ－11・12グリットの第2層上面において8本重複して確認された。溝2は溝1によって切られており、溝1のほうが新しい。また、溝2は土壙によって切られており、それより古いものである。2つの溝の長さは、調査区外にも延びており明らかでない。

**第３表　ピット・土壙・溝出土土器破片集計表**

| 種類 | 器形 | 部位 | 器面調整 | P5 | P6 | P7 | P9 | P11 柱穴 | P12 | P13 | P14 | P15 | P16 | P17 | P18 | P21 | P22 | P23 | P24 | P25 | P26 | 土壙 埋1 | 土壙 埋2 | 土壙 底面 | 溝1 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 坏 | 口縁部 | ロクロ－ミガキ(黒) | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 10 | | | |
| | | | 横ナデ－黒 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | | | 不明－黒 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| | | | 不明－不明 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | |
| | | 体部 | ロクロ－ミガキ(黒) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | |
| | | | ケズリ－ミガキ(黒) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | | | |
| | | | ミガキ－黒 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| | | | 黒一黒 | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | |
| | | | 不明－ミガキ(黒) | | 1 | | | 2 | | | | | | 1 | | | | | | | | 3 | | | |
| | | | 不明－不明(丹) | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | 不明－不明 | | 1 | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | 8 | | | |
| | | 底部 | 回転糸切り－ミガキ(黒) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | | | |
| | | | 回転糸切り | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | |
| | | | 不明－ミガキ(黒) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | | | |
| | | | 不明 | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | |
| | 甕 | 口縁部 | ロクロ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | |
| | | | 横ナデ－横ナデ | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | |
| | | | 横ナデ－不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| | | | 不明－不明 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| | | 体部 | ロクロ | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 8 | 2 | | |
| | | | ナデ－不明 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| | | | 刷毛目－不明 | | | 1 | | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | | 3 | 1 | | |
| | | | ケズリ－不明 | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | 7 | 1 | | |
| | | | ケズリ－ナデ | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | | | |
| | | | 不明－ナデ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| | | | 不明－ヘラナデ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| | | | 不明－刷毛目 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | |
| | | | 不明－不明 | 2 | | 5 | 1 | | 2 | | | 2 | 4 | 7 | 5 | 1 | 2 | 2 | 1 | | | 72 | 3 | 1 | 8 |
| 須恵器 | 坏 | 口縁部 | ロクロ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 14 | | 1 | |
| | | 体部 | ロクロ | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 2 | | | |
| | | 底部 | 回転糸切り | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 2 | | | |
| | | | 不明 | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | 1 | | | | | 4 | | | |
| | 甕 | 口縁部 | ロクロ | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | |
| | | 体部 | 平行タタキ－ヵサエ | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| | | | コウシー青 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| | | | 不明－ナデ | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | |
| | | | 平行タタキ－不明 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | |
| | | | 格子－不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| | | | ケズリ－不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | | | |
| | | | 波状－不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | | | 不明－青 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| | | | 不明－不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 6 | | 1 | |
| | 壺 | 口 | ロクロ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| 赤焼土器 | 坏 | 底 | 不明（台付） | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | |

**〔溝1〕**　上端での幅は、約44cm、下端での幅は約16cmで、壁はゆるやかに立ち上がり、壁高は約15cmある。堆積土は、1層のみで黒褐色(10ＹＲ3/2)シルト層である。

**〔溝2〕**　上端での幅は、約40cm、下端での幅は約10cmで、壁はゆるやかに立ち上がる所と急に立ち上がる所がある。壁高は高いところで約40cmである。

堆積土は1層のみであり、黒褐色（10ＹＲ3/2）シルト層で溝1より若干暗い。

出土遺物はいずれの溝の堆積土中から土師器の甕の破片が出土している。

性格･年代等については不明であるが、再堆積土の第2層を掘り込んでおり、比較的新しいものと考えられる。

## 6　遺構以外から出土した遺物

遺構以外からの出土遺物は、調査区南北斜面の表土を含む各堆積層から出土している。それらは既に前節で述べたようにその出土状況等からみて、二次的な堆積によるものと考えられるので一括して述べる。また、遺物のうち土器については、全容を知り得ない細片が多いため、図示したものを中心に取りあつかい、他は第5表に一括した。

**1）縄文土器**（第11図1）

体部破片1点出土している。文様な縄文部と磨削部によって構成されている。縄文部は沈線によって楕円形に区画されていると思われる。縄文原体は、磨滅のため明らかでない。

**2）弥生土器**（第11図2）

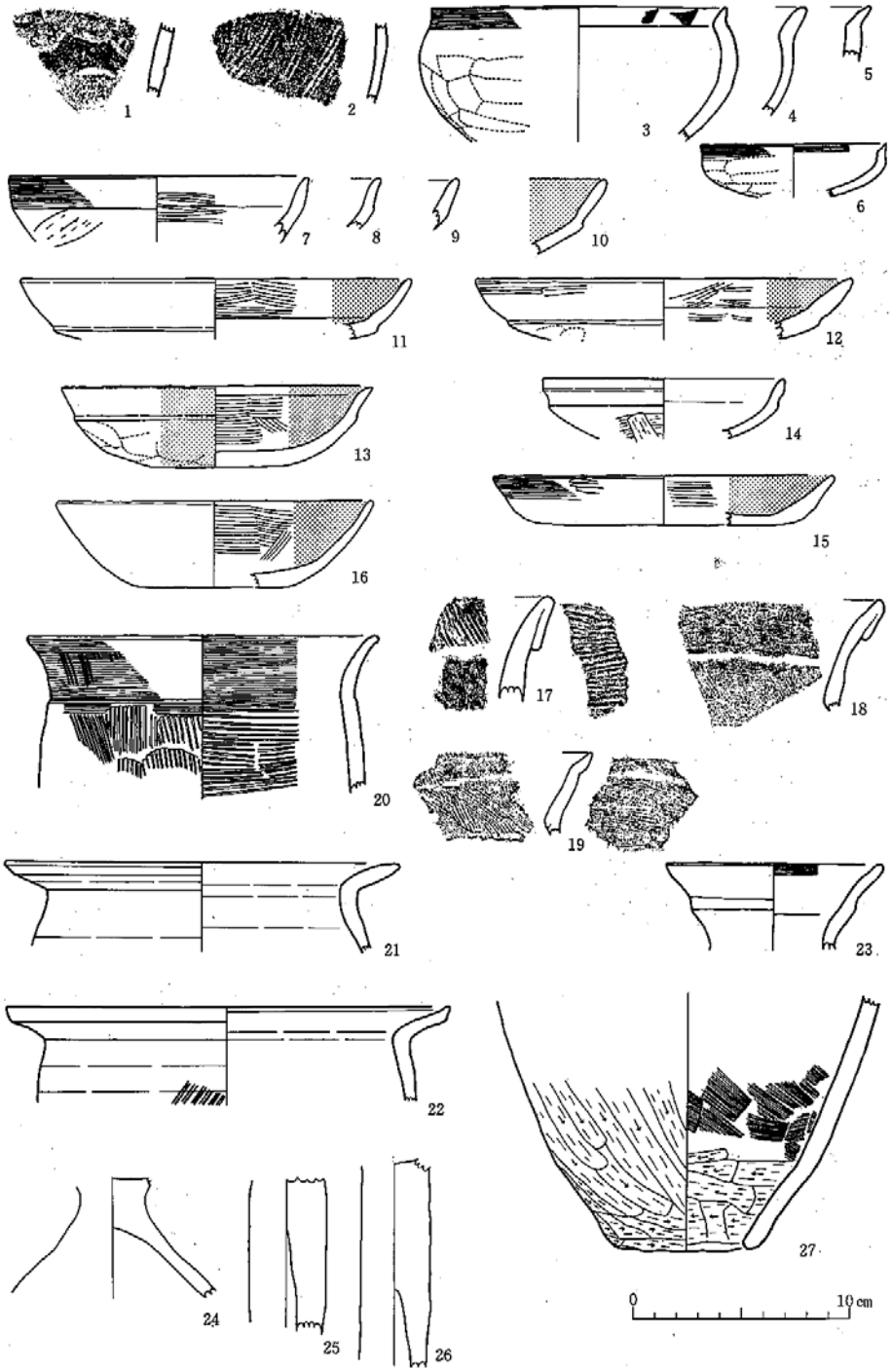
体部片が4点出土している。接合はしないが同一体と思われる。外面に縦位に撚糸文（Ｌ）が施文される。

**3）土師器**

**坏**　製作に際しロクロを使用していないものと使用するものとがある。ロクロを使用しないものでは、器形的に次の五者にわかれる。

Ⅰ（第11図3－6）口縁部内面に稜を形成するものである。口径に比して器高が大きく、比較的丈の高い器形のもので、端部でわずかにくびれて短い口縁部がつく。器面調整は口縁部内外構ナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデのものと、その後に内外面にヘラミガキが施されるものとがある。内面が丹塗のもの（3～5）とそうでないもの（6）とがあるが、後者は前者に比して小形のものであり、胎土は異なり、また焼成も堅緻で、本群では異質のものである。

Ⅱ（第11図7－9）器外面上位に稜を形成するものである。稜を境として口縁部と体部にわかれ、また、稜に対応して内面はややくびれる。器面調整は、口縁部外面は横ナデ、体部にはヘラケズリが施され、内面はナデ調整のもの（8・9）とヘラミガキが施されるもの（7）と




第11図　遺構以外の出土物（Ⅰ）

がある。

Ⅲ（第11図10）器外面中位に段を形成し、対応する内面にもくびれを有するものである。外面段以下には横ナデ、段以上にはヘラケズリが施される。内面はヘラミガキ、黒色処理である。

Ⅳ（第11図11～14）器外面中位に段が形成されるものである。器面調整は、外面段以上横ナデ、段以下ヘラズリで、その後全面にヘラミガキが施されるもの（11～13）と、そうでないもの（14）とがある。前者は内面はヘラミガキ・黒色処理が施され、後者はナデ調整である。
後者は器形も小形であり、また、胎土・調整等からみても本類では異質である。なお、前者には外面にも黒色処理を施すものがある。

Ⅴ（第11図15）体部に段・稜等が認められず低部からそのまま口縁部に至るものである。外面上半（口縁部）に横ナデ・下半にヘラケズリが施されたのち、ヘラミガキが施される。内面はヘラミガキ・黒色処理である。

整作に際しロクロを使用したものは、破片としては認められるが、図示できるものは少い。第11図16は、底面に手持ちヘラケズリの再調整が加えられているため切り離し技法の不明のものである。また、外面の調整も摩滅のため不明であるが、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

**甕**

甕にも製作に際しロクロを使用しないものと、使用したものとがある。いずれも小片のため全体の器形の明らかなものはないが、それぞれ口縁部の形態によって違いのあるものがある。ロクロを使用しないものには、複合口縁（第11図17～19）のものと単純口縁のもの（第11図）がある。前者は頸部以上の破片で、頸部内外面に細かな刷毛目が施されている。単純口縁のものは頸部に段があり、口縁部はやや外傾する。口縁部内外には横ナデ、体部内外には刷毛目が施されている。

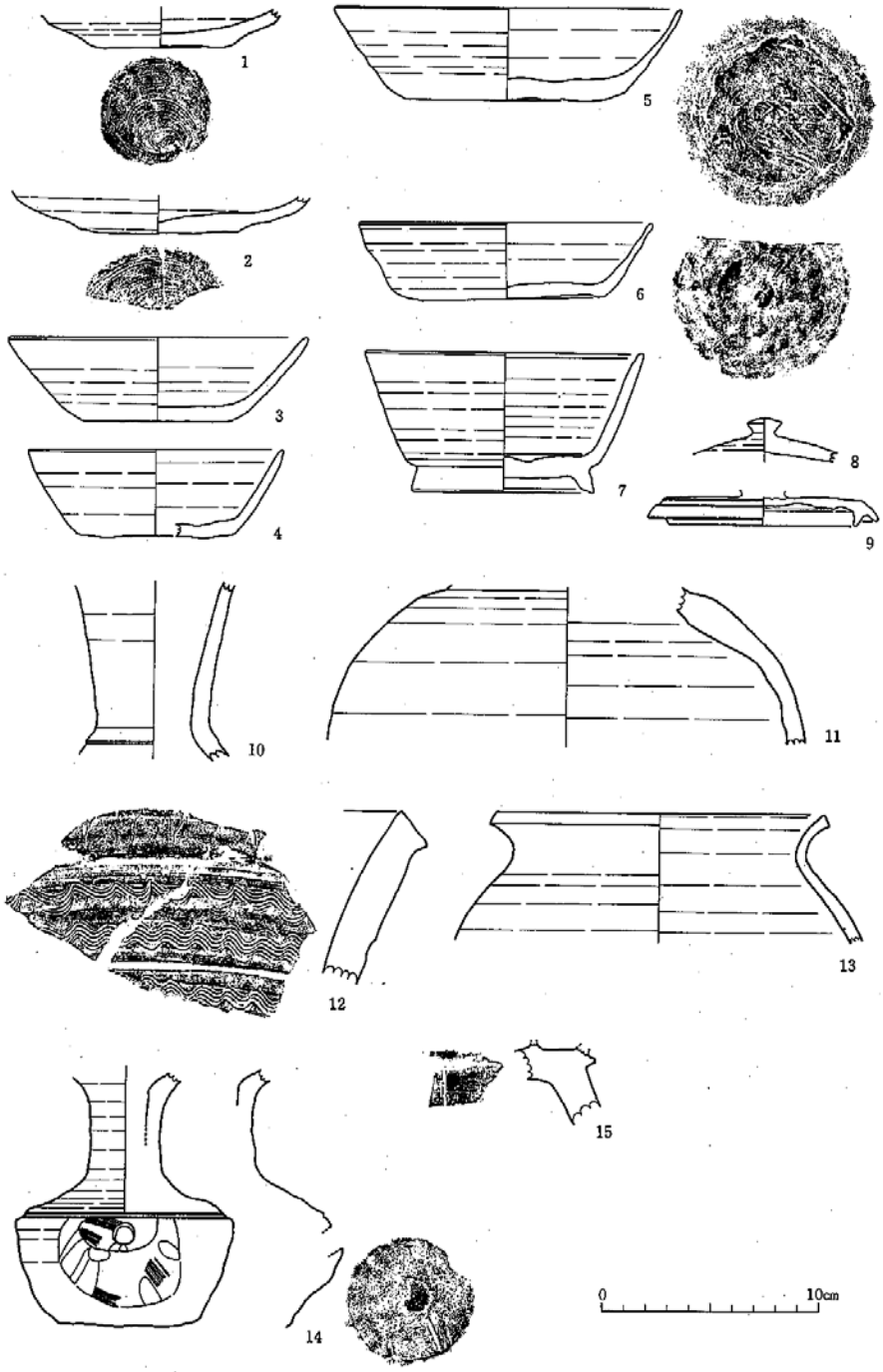
ロクロを使用したもの（第11図21、22）は、頸部で強く屈折し口縁部は直線的に外傾するもので、端部が丸くおさまるものと、上端がやや上方にのびるものとがある。いずれも内外面にロクロ調整痕が観察される。

**壺**（第11図23）

口縁部破片である。頸部でくびれ、口縁部は外傾する。口縁部中位に段が巡る。内外面ともに丹が塗られている（焼成前）。

**高坏**（第11図24～26）

いずれも脚部の破片である。下部が山形に開くもの（24）と、棒状をなすもの（25、26）とがある。内外面とも磨滅、剥落が著しく器面調整は明らかでない。




第12図　遺構以外の出土遺物（Ⅱ）

**甑**　(第11図27)

体下半部の破片であり、器形は明らかでない。無底式のもので、外面にはヘラケズリ、内面は体部にヘラナデ、底部近くにはヘラケズリが施されている。

**4）須恵器**

**坏**　底部の切り離し技法の違いにより、回転糸切技法のもの、ヘラ切り技法のもの、切り離し後の再調整（回転ヘラケズリ）のため切り離し技法の不明なものとがある。

糸切技法のもの（12図1･2）は、底部のみの破片であり、全体の器形は明らかでないが、残存する体･底部の状況から、かなり低平な器形のものと考えられう。また、外面底径よりも内面底径の方が大きいもの（2）がある。ロクロは右回転である。後二者（3～6）は、ほぼ直線的に外傾する体･口縁部を有するもので、再調整の施されているものは、その部位は底部全面である。

**高台付坏**（第12図7）

体部･口縁部が直線的に外傾し、口径に比して器高が割合に高いものである。付高台である。底部の切り離し技法は高台部接合に伴う調整のため不明である。高台はやや外方に開くもので端部は外方へ削がれている。

**蓋**(第12図8･9)

天井部･口縁部のみの破片と、つまみ部･天井部の破片である。前者は内面にカエリを有するもので天井部はほぼ水平に近く外面には回転ヘラケズリが施されている。後者は宝珠形のつまみをもつものである。天井部外面には回転ヘラケズリが施されている。

**壷**（第12図10･11）

頚部のみの破片のもの及び体部上半の破片のものとがある。いずれも内外面には鮮明なロクロ調整痕が観察される。

**甕**（第12図12･13）

頚部以上の破片、体部上半以上の破片がある。前者は大形の器形のもので、口縁端部は下方にひき出されている。頚部中央に一条の沈線が巡り、その上下に波状沈線が描かれている。後者小形のものであり、頚部で短い口縁部がつく。内外面ともロクロ調整である。

**鉢**（12図14）

ほぼ完形であるが、口縁端部を欠く。底印はへら切り技法によって切り離されたものである。

**5）陶硯**（第12図15）

須恵器質の円面硯の破片が1点出土している。小破片であるため全体の大きさは不明である。脚部と外周部端部の一部のみが残存しているものである。脚部にはヘラ暦きによる縦位の沈線がみられる。

### 6）石器

石器には、剥片石器、磨製石器、礫石器がある。

**剥片石器**

剥片石器は剥片を素材としたもので石鏃、石匙、石篦、不定形のものが出土している。

**石鏃**（第13図1～2）

2点出土している。1は、基部中央にえぐりを入れて凹状にしているもので長さ22㎜、厚さは最大で4㎜である。尖頭部側縁は、ほぼ直線的で基部に近い部分がわずかにふくらんでいる。2は、基部側縁にえぐりを入れて凸状の茎をつくり出しているもので基部は欠損しているが、現存長35㎜、厚さは最大で5㎜である。尖頭部側縁は直線的で、先端は鋭くなっている。いずれも剥片を素材として調整は入念に両面加工されている。

**石匙**（第13図3～6）

4点出土している。その内、完形品が3点、欠損品が1点である。刃部に対してつまみ部軸線がほぼ平行なもの（3,4）と刃部に対してつまみ西部軸線が斜方向で直角に近いもの（5,6）とがある。刃部は欠損品を除いていずれも3つの縁辺で構成されている。刃部先端は、ほぼ平坦で幅の狭いもの（4）と広いもの（3,6）とがある。5については不明である。刃部の調整は3,4では、両側辺先端が両面調整されている。6は、側辺の一辺が片面調整で他の一辺と先端が両面調整されている。5は刃部、つまみ部の一部が残存している欠損品である。残存している刃部をみると側辺の一辺が両面調整で、他は片面調整されている。使用痕については、3で刃部の調整剥離面に擦痕が斜方向に観察される。その他については不明である。

**石篦**（第13図7）

1点出土している。剥片を利用したもので、平面形は長方形を呈し、各側辺はややふくらんでいる。最大長は60㎜、最大幅33㎜、厚さは最大で16㎜である。縦・横断面とも上下両面、中央部がふくらみ、先端部は薄くなり鋭くなっている。刃部は4つの縁辺から構成されている。
調整は、側辺の一辺は片面調整で他は全て両面調整されている。

**不定形石器**（第13図8～16）

9点出土している。剥片の縁辺に調整剥離を加えて刃部をつくり出し削器として利用されたものである。8は縁辺全体に調整剥離が加えられており、他は全て、剥離の加えられない部分を残しているものである。
8は、平坦な打面が残り、b面にバルバースカーがみられるもので、両面の縁辺全体に調整剥離が加えられている。9は、ａ・ｂ両面の縁辺の一辺のみに調整剥離を加えたもので、刃部は、外弯刃を形成している。打面は残っていない。10は、平坦な打面が残り、ｂ面にバルバースカーがみられるものである。ａ面の縁辺の二辺のみに調整剥離を加えたもので、刃部は、外弯刃

を形成している。11は、調整打面が残り、b面にバルバースカーがみられるもので、先端部が欠損しているものである。a 面の基部から先端部にかけての右縁辺とb面の左縁辺に調整剥離が加えられている。12･13は、接合するもので、黒曜石の原石を打ち砕いたもので、自然面が残っているものである。縁辺にわずかに調整剥離が加えられている。14は、b面の縁辺の二辺にわずかに調整剥離が加えられているもので、打面は残っていない。15は、縦長のもので、縁辺の二辺の両面と先端部に調整剥離が加えられている。基部が若干欠損している。16は、平坦な打面が残り、b面にバルバースカーがみられるものである。縁辺の一辺に両面調整剥離が加えられている。先端部は欠損している。

**剥片**（第13図17）

剥離された後、調整が加えられていないものである。先端部が欠けている。平坦な打面が残っており、バルバースカーはみられない。

**磨製石器**

**磨製石斧**（第13図18）

1点出土している。刃部が破損しており現存長は50㎜、最大幅31㎜、最大の厚さは18㎜である。平面形は胴部上半より下半の幅が大きく、頭部は平坦で胴部側縁との境に明瞭な稜をもつ。

縦断面形は胴部でわずかにふくらむ。横断面形は胴部ではふくらみをもつ長方形で隅が角張る。胴部には擦痕や研磨面が認められる。使用痕は刃部が欠損しており観察することができない。

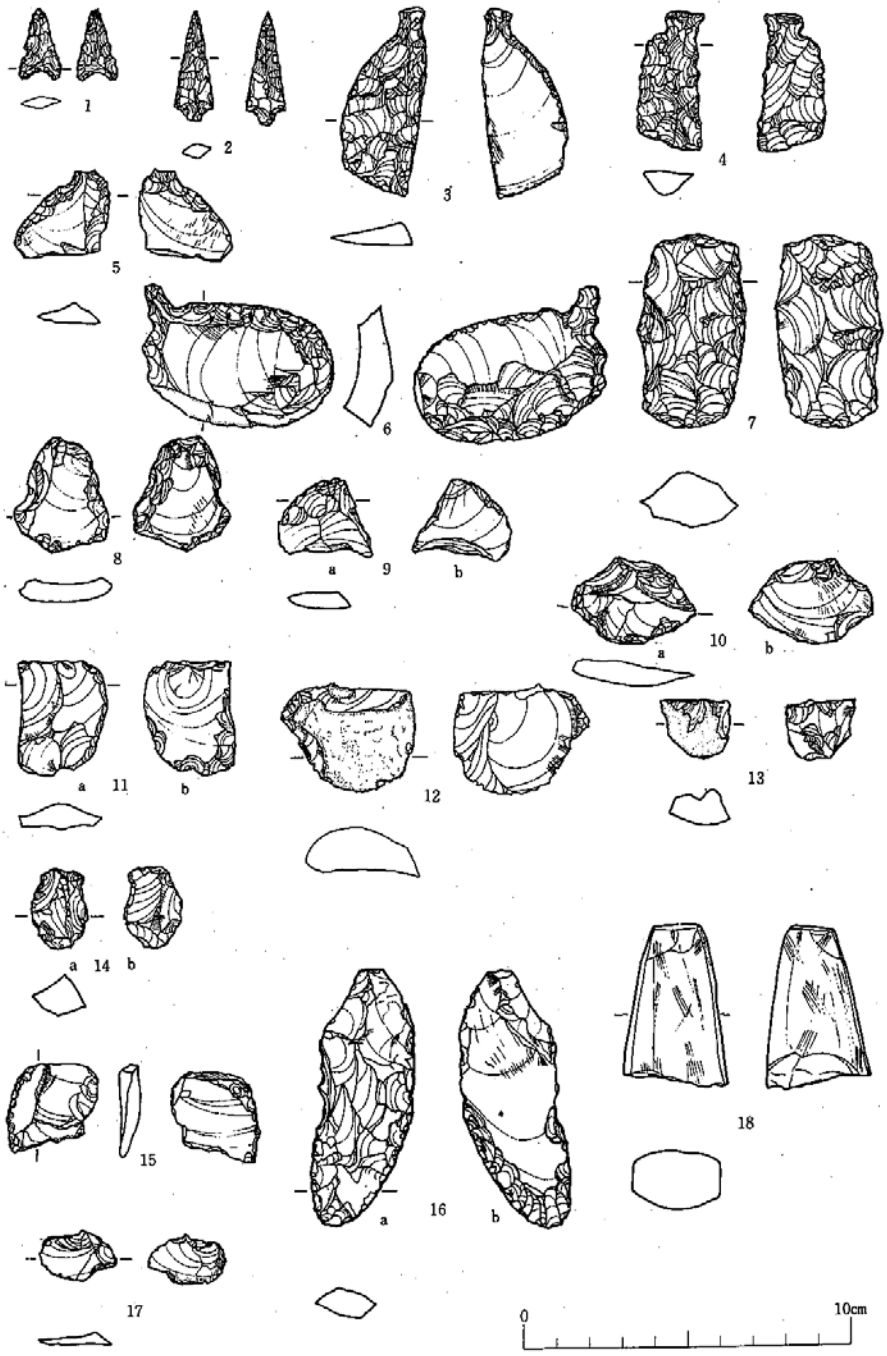
**礫石器**

**凹石**（第14図1）

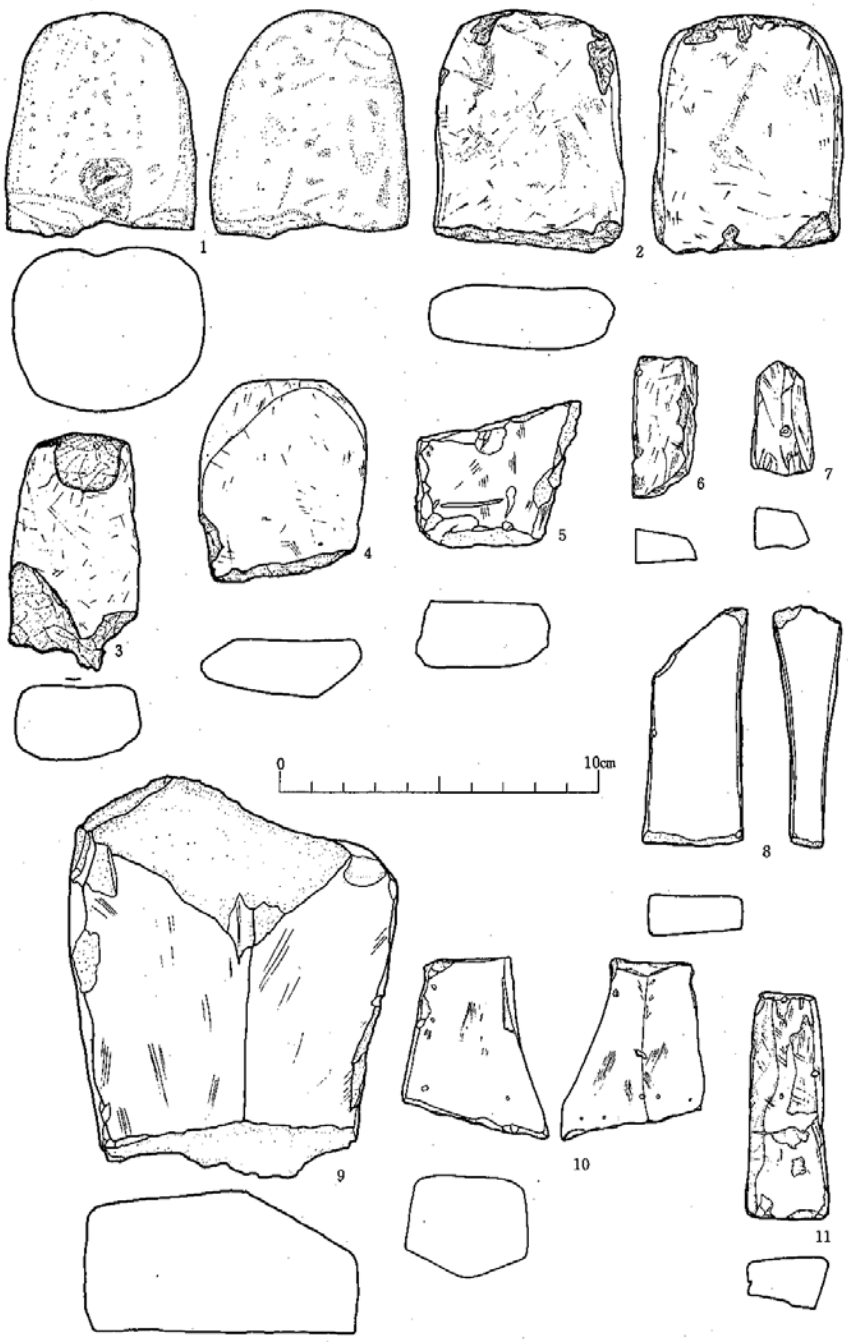
1点出土している。欠損品であり、現存する最大長軸は70㎜、最大短軸は60㎜であるが、、平面形は、楕円形を呈すると思われる。断面形も楕円形を呈している。凹部は、残存部で片面にのみある。2個あり、いずれも浅く、断面はU字状のものである。製作痕や使用痕を示す敲釘痕や磨面等は不明である。

**7）砥石**（第14図2～11）

10点出土している。自然礫を素材としているもの(2･3･4)と素材を加工して使用しているもの(5･6･7･8･9･10･11)とがある。各砥石の使用面には10を除いて擦痕を伴う研磨面が認められる。2は使用面が上下2面であり、ほぼ平坦である。3･4は、上下両面と両側面を使用しており、上面はややくぼんでいる。5は欠損品であるが、上面と一側面を使用面としている。上面には、擦痕を伴う研磨面とともにせまい研磨溝が認められる。10の使用面は、上下両面、両側面であり、上面はさらに加工して2つの面をつくり出しており、5面である。11の使用面は、上面と一側面の2面である。6は、使用面が上下両面と両側の4面である。




第13図　遺構以外の出土遺物（Ⅲ）




第14図　遺構以外の出土遺物（Ⅳ）

各使用面は平年である。7は、使用面が上面と両側面の3面である。8は、使用面が上下両面と両側面の4面である。上下両面の使用面は、ややくぼんでいる。各使用面には擦痕が認められず、研磨面だけが認められる9は、使用面が上面と両側面で、上面にはさらに加工され、2つの面をつくり出しており、4面である。

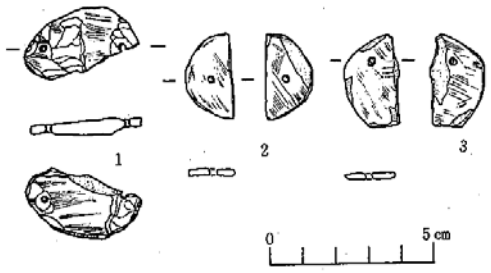
**8）石製模造品**（15図1～3）

3点出土している。いずれも有孔円板で半欠品である。

1は、半分欠損しており、形は不明である。厚さは5㎜である。孔は、残存部分で2ヶ所に穿たれている。両面には、擦痕が認められており研磨されている。

2は、半分欠損しているが、不整円形を呈している。厚さは25㎜である。孔は、中央部よりずれた所に1孔穿たれている。孔は一方向から穿たれている。両面には、擦痕が認められており研磨されている。

3は、半分欠損しているが、円形を呈すると思われる。厚さは2㎜である。中央部に1孔が穿たれている。孔は、一方向から穿たれている。両面には、擦痕が認められており、研磨されている。




第15図　遺構以外の出土遺物（Ⅴ）

## 第4表　石器・石製品計測表（　）は欠損品

| 図面番号 | 種別 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重さ (g) | 石材 | 出土地区 | 層 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13図－1 | 石鏃 | 22 | 13 | 4.0 | 0.55 | 珪質頁岩 | CB—13 | 2 |
| －2 | 石鏃 | 35 | 13 | 5.0 | 1.5 | 珪質頁岩 | CD—13 | 3 |
| －3 | 石匙 | 57 | 23.4 | 7.2 | 9.8 | 珪質頁岩 | CK—12溝内 | |
| －4 | 石匙 | 41.3 | 19.3 | 7.0 | 5.75 | 珪質頁岩 | CK—12 | 1 |
| －5 | 石匙 | (33.2) | (22.3) | ( 5.7) | ( 4.2 ) | 石英安山岩質凝灰岩 | CS—12 | 2 |
| －6 | 石匙 | 59.3 | 37.1 | 13.0 | 33.5 | 珪質頁岩 | CD—13 | 2 |
| －7 | 石篦 | 57.9 | 31.7 | 17.8 | 34.0 | 珪質頁岩 | CL—13 | 1・2 |
| －8 | 剝片石器 | 34.0 | 28.9 | 10.0 | 9.3 | 珪質頁岩 | CH—11 | 1 |
| －9 | 剝片石器 | 29.8 | 28.0 | 5.7 | 3.5 | 玉ずい | CS—11 | 2 |
| －10 | 剝片石器 | 25.1 | 37.7 | 9.0 | 8.7 | 玉ずい | CF—11 | 2 |
| －11 | 剝片石器 | (34.5) | (25.8) | ( 7.1) | ( 9.2 ) | 玉ずい | CC—11 | 2 |
| －12 | 剝片石器 | 46.0 | 32.0 | 20.9 | 23.8 | 黒曜石 | CL—11 | 2 |
| －13 | 剝片石器 | 23.0 | 19.4 | 9.5 | 4.2 | 黒曜石 | CB—11 | 2 |
| －14 | 剝片石器 | 24.0 | 11.8 | 12.0 | 4.2 | 玉ずい | CP—12 | 2 |
| －15 | 剝片石器 | 34.1 | 26.2 | 5.8 | 5.1 | 黒色頁岩 | 地点不明 | |
| －16 | 剝片石器 | (79.0) | (28.6) | (11.2) | (27.8 ) | 珪質頁岩 | CS—11 | 2 |
| －17 | 剝片 | 22.8 | 15.2 | 3.2 | 3.4 | 黒色頁岩 | CS—11 | 2 |
| －18 | 磨製石斧 | (47.6) | (31.0) | (17.3) | 43.0 ) | 石英安山岩質凝灰岩 | CF—12 | 2・3 |
| 14図－1 | 凹石 | (68.2) | (58.0) | (50.8) | | 凝灰岩質頁岩 | CD—13 | 2 |
| －2 | 砥石 | (73.0) | (53.2) | (19.0) | (151.0 ) | 凝灰岩質頁岩 | CH—11 | 2 |
| －3 | 砥石 | (73.3) | (40.5) | (25.4) | (116.0 ) | 石英安山岩 | CD—11 | 2 |
| －4 | 砥石 | (62.0) | (51.0) | (19.4) | (80.0 ) | 石英安山岩 | CB—11 | 2 |
| －5 | 砥石 | (47.2) | (42.3) | (21.0) | | | CE—12 | 1 |
| －6 | 砥石 | 43.2 | 22.0 | 14.4 | 14.8 | 石英安山岩質凝灰岩 | CE—11 | 2 |
| －7 | 砥石 | 35.4 | 19.7 | 12.3 | 10.0 | 砂質凝灰岩 | CO—11 | 2 |
| －8 | 砥石 | 74.9 | 33.0 | 13.2 | | | CT—12 | 3 |
| －9 | 砥石 | 123.8 | 100.3 | 45.0 | | | AK—12 | 2 |
| －10 | 砥石 | 56.4 | 46.9 | 37.7 | 89.7 | 石英安山岩質凝灰岩 | CF—11 | 1 |
| －11 | 砥石 | 70.5 | 26.2 | 20.0 | 38.1 | 石英安山岩質凝灰岩 | CE—11 | 1 |
| 15図－1 | 有孔円板 | | | ( 5.2) | | 黒色頁岩 or 粘板岩 | CD—13 | 2 |
| －2 | 有孔円板 | | | ( 2.0) | | 〃 | CC—10 | 2 |
| －3 | 有孔円板 | | | ( 2.1) | | 〃 | CE—11 | 2 |

# Ⅳ 考 察

## 1 出土遺物の年代

出土した遺物の種類は、前各節で述べた。それらはわずかに遺構に伴うと考えられるものもあるが、旧表土や二次堆積層から出土したものが大半であり、その間に何らかの共伴関係や組み合せ関係が存在するものはほとんどない。したがって以下では、これまでの研究成果をもとに、遺物の種類毎に若干の年代的な考察を行う事とする。

**縄文土器**：縄文土器は、胴部破片1点のみ出土している。文様構成から縄文時代中期後葉の頃のものと思われる。

**弥生土器**：弥生土器は、住居跡堆積土および北斜面堆積から出土した。いずれも細片でありまた、文様も地文のみであり、より以上の時期決定は困難である。

**土師器**：今回の調査において最も多量に出土した。坏･甕･高台付坏･高坏・甑の別がある。坏については、諸特徴により次のように類別することができる。

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ | ロクロ不使用 | 口縁内側に稜 |
| Ⅱ | | 外面上位に稜 |
| Ⅲ | | 外面中位に段、内面にくびれ |
| Ⅳ | | 外面中位に段、くびれなし |
| Ⅴ | | 稜・段なし |
| Ⅵ | ロクロ使用 | |

次にこれらの年代についてみると

Ⅰは、仙台市岩切鴻巣遺跡（宮城県教委:1974）などに類例があり、古墳時代南小泉式に属すると考えられる。

Ⅱは、これまで県内にあまり類例のなかったものである。小牛田町山前遺跡第23号住居跡（小牛田町教委:1976）に類例があり古墳時代住社式に属するものと考えられている。

Ⅲは、蔵王町塩沢北遺跡（県教委：1971）に類例があり、古墳時代栗囲式に属すると考えられる。

Ⅳ・Ⅴは、志波姫町糠塚遺跡（県教委：1978）からまとまって出土しており、奈良時代国分寺下層式に属すると考えられる。なお、住居跡床面から出土した坏（第7図）はⅣに類別される。

ロクロ使用の坏は、県内各地に多くの類例があり平安時代表杉ノ入式に属すると考えられる。甕についても下表のように類別される。

| | | |
|---|---|---|
| ロクロ不使用 | Ⅰ | 複合口縁 |
| | Ⅱ | 単純口縁 |
| ロクロ使用 | | |

Ⅰは、蔵王町大橋遺跡（宮教委:1971）名取市西野田遺跡（県教委:1972）等に類別があり、古墳時代前期塩釜式に属すると考えられるものである。

Ⅱについては、南小泉式期以降各時期に類例がみられるものであり、時期を特定することはできない。

ロクロ使用の甕については、土師器の製作にロクロ技術が導入されるのは表杉ノ入式期と考えられていることから同期に属すると考えられる。

他の器種については、数量が少く類別できない。高台付坏は、ロクロ技術が導入されていることから表杉ノ入式期に属するものと考えられる。また、壺は岩切鴻ノ巣遺跡に類例があり、南小泉式に属するものであろう。甑については、器形も不明であり、時期を特定できない。

**須恵器**

須恵器には、高台付坏･甕･壺･蓋がある。

坏については下表のように類別できる。

| | |
|---|---|
| Ⅰ | 回転糸切り |
| Ⅱ | ヘラ切り |
| Ⅲ | 切り離し不明 |

他のものについては量的に少く、また細片のため類別できない。

宮城県における須恵器の年代については、現在その研究が進められている段階であり、徐々にその成果が示されつつある。それらは、土師器との共伴関係をもとにした編年、技法の観察検討による編年､城柵･官衙出土の瓦との共伴関係による絶対年代の確定および編年などを軸としたものである。しかしそれらは須恵器編年の全容をおおうものでなく、また地域性や遺跡の性格の相違などの諸点においてそれぞれ若干のくい違いを生じている部分もある。

今回出土した須恵器についても、本遺跡内において土師器等地の遺物との共伴関係の明らかなものはほとんどなく、年代を推定し得る根拠をもつものではない。したがって、その年代についての考察を行うことは困難であるが、個々の器形についてみると、本遺跡出土の坏は、国分寺下層式以降の土師器に共伴することが知られており、またカエリを有する蓋は栗囲式土師器に共伴する場合が多い。他の器形についても検討を加えることができる類例は少いが、大まかに古墳時代後期以降の年代を与えることができると思われる、

その他の遺物（石器･石製品等）については、伴出土器が明らかでなく、また、各々の形態的特徴からからもその年代を決定することはできないが大まかに剥片石器･磨製石器･礫石器は

弥生時代以前に、石製模造品は古墳時代に、円面硯は奈良、平安時代に属するものと考えられるものである。

## 2　堆積層の年代

堆積層は調査区南斜面北斜面南側、同北側に認められた。なお調査区全域には第1層（表土）が存在するが、この層は耕作による擾乱層である。

南斜面第2層は、再堆積層と考えられるものである。土師器･須恵器･砥石が出土している。そのうち最も新しい時期に属すると考えられるものは、ロクロを使用した甕の破片（ＡＫ－12区）である。したがってこの層の形成は表杉ノ入式期以降と考えることができる。

北斜面南側では表土下に2枚（第2･第3層）の堆積層が認められた。第2層は再堆積層･第3層は旧表土と考えられたものである。第2層からは弥生時代以降各時期の遺物が出土しが、近代以降に属すると思われる瓦や陶器も含まれていることから、かなり新しい時期に堆積したものと考えられる。第3層からはロクロを使用せず外面にヘラミガキの施された内黒土師器坏（Ⅳ又はⅤ類）や須恵器が出土しており、少くとも国分寺下層式期には存在していた層である。

この第3層はある時期の表土とみられるものであり､木根によると思われる乱れ等もみとめられ、かなり長い間に形成されたと考えられるものであるが、掘立柱建物跡はこの層を掘りこんで構築されていることから、第3層の年代の下限は建物跡構築以前とみることができる。

北斜面北側では、最も多いところで表土下に5枚の堆積層がみられた。しかし上部3層（第234層）は再堆積層であり、第5層は旧表土と考えられるものであるから基本的には、南側部分との差異はない。なお第6層は地山の凹みに堆積したものである。遺物は各層から各種の遺物が出土しているが、上部3層には近代以降の陶器片も含まれており、再堆積の時期はかなり新しいものと思われる。旧表土にはロクロ使用の土師器が含まれており、その土器が層中で最も新しい時期の遺物である。さらに、柱穴はこの層を切って掘りこまれており、柱穴から出土した土器は国分寺下層式または表杉ノ入式に属すると考えられるものであるから、旧表土（第5層）の形成の下限は表杉の入式期とすることができる.。

なお、旧表土の年代と、再堆積層の年代とでは前者が表杉ノ入式（平安時代）であり、後者が近代以降であることから、両者の間に間隙が生ずることになるが、その間の堆積層は、何らかの理由で削平されたものと思われる。

## 3　遺構の年代

発見された遺構は、竪穴住居跡･掘立柱建物跡･土壙･溝･ピット群である。

竪穴住居跡に伴うと考えられる遺物は、床面上・周溝内・煙道内から出土した土器であり、その中に、国分寺下層式に属する土師器坏が含まれている。したがって住居跡の年代もその時期と考えられる。

掘立柱建物跡は、北斜面南側において4棟確認された。いずれも総柱の建物跡である。柱穴の規模から、四隅に大きな掘り方の注穴が配されるもの（第3号建物跡）と各柱穴がほぼ同程度の掘り方のもの（1・2・4号）との別がある。第3号建物跡と第4号建物跡には重複関係があり、第3号建物跡が古い。したがって少くとも2時期に亘る建物跡群であるといえる。なお、1・2・4号の各建物跡については、その規模や方向、柱穴の形状等からみてほぼ同時期の建物跡とも考えられる。このように、時期差をもつ建物跡群であるが、ともに第3層を切って構築されており、さほど大きく時代を違えたものではないと思われる。

建物跡の年代推定の資料となるものには、2号建物跡の柱穴跡から出土した土師器甕の破片があげられる。甕は破片のため時期を特定できないが、国分寺下層式または表杉の入式かのいずれかに属するものであり、建物跡の年代もその時期と考えられる。建物跡を除いたピット群もまた旧表土を切って掘りこまれたものでありほぼ同時期と考えられる。

北斜面北側でも、規模・性格は不明であるが何らかの構築物の存在が想定された。この構築物も、表杉の入式土師器を含む旧表土を切って構築されたものである。また周辺の柱穴からも奈良・平安期いずれかに属する土器が出土している。このことから、この地点には、平安時代に何らかの施設が存在したと考えられる。

上記のような建物跡の性格については、総柱であるということから倉庫風の建物跡であると考えられるが、そのもつ意味等については、それを推定し得る資料はほとんどない。ただし、時期的には奈良または平安期に属するものであるが各々の柱間寸法はそれぞれ不均等であり官衙等に伴うものとは考え難いこと、またそれらは丘陵斜面にある時期には群として存在した可能性があり、低地に接した斜面下部には何らかの構築物が存在した時期もあることなど、これまで県内で発見された該期の集落跡とも様様を異にしている。今後の類例の増加をまちたい。

その他の土壙・溝についてはすでに各節で触れたように、堆積土および確認面の観察からごく新しい時期（近世以降）の遺構と考えられる。

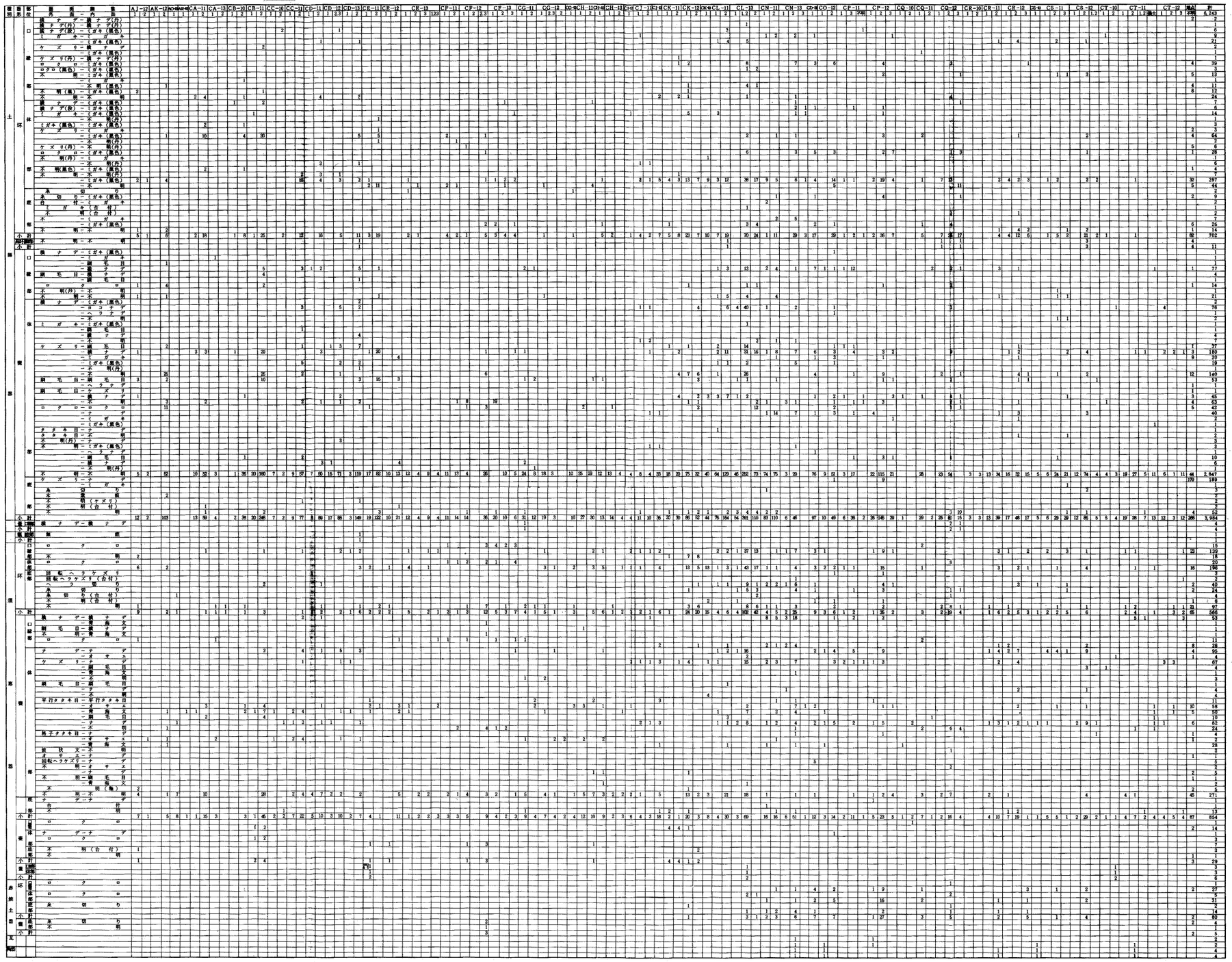
# Ⅴ　ま　と　め

1. 今回の発掘調査の結果、発見された遺構は奈良時代の住居跡1軒、奈良・平安時代に含まれる掘立柱建物跡4棟などである。
   また、発見された遺物には上記の時期のものの他に、縄文時代・弥生時代・古墳時代前・中・後期のものがある。これらの時期の遺構は発見されなかったが、その理由は後世の削平等によって失なわれたためであると考えられる。
2. 建物跡は倉庫風のものと考えられるものであり、それがある程度のまとまりをもって存在した可能性があるという状況は、これまであまり類例のみられなかったものである。今後類例の増加をまって更に性格の検討を行う必要がある。
3. 遺跡の立地する地形や、遺物の散布状況から明らかであるが、遺跡の範囲はさらに東西の丘陵部にのびており、遺構の配置状況もそれを裏づけている。

**引用・参考文献**

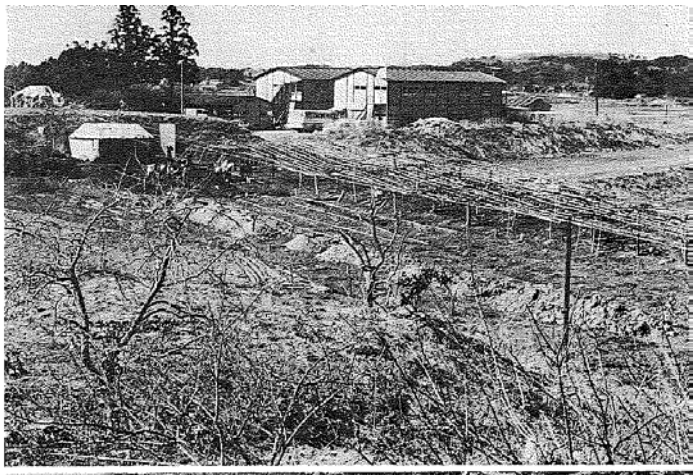
小牛田町教育委員会（1976）：『山前遺跡』
宮城県教育委員会（1971）：『東北自動車関係遺跡発掘調査概報－塩沢北遺跡』
「宮城県文化財調査報告書第24集」
（1974）：『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ－岩切鴻ノ巣遺跡・西野田遺跡』
「宮城県文化財調査報告書35集」
（1978）：『宮城県文化財発掘調査略報－糠塚遺跡』
「宮城県文化財調査報告書53集」

第5表　破片集計表



# 図　　版

北側斜面発掘前



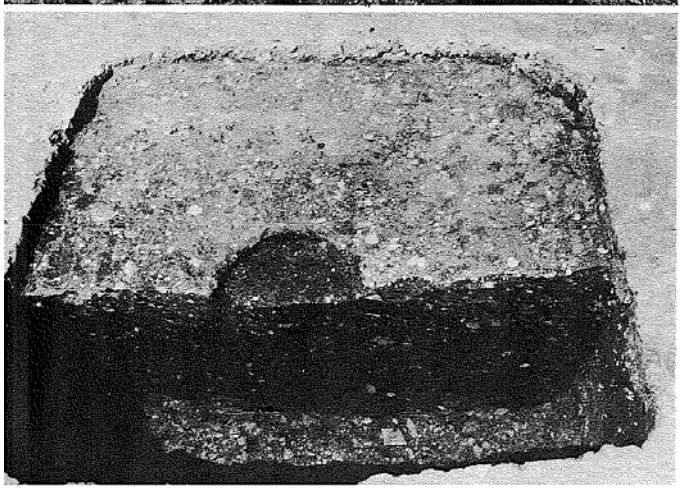
北側斜面作業風景

北側斜面掘立柱建物跡

図版 1

第 2 号掘立柱建物跡

第 3 号、 4 号掘立柱建物跡

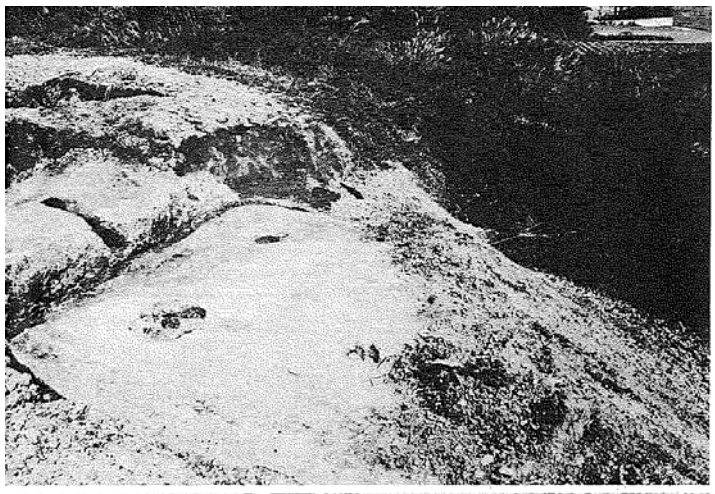


第 3 号掘立柱建物跡
柱穴断面

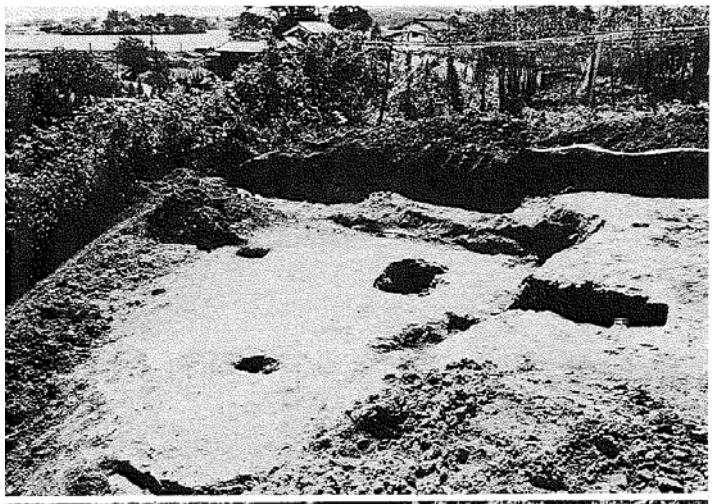
図版 2

北斜面ピット群

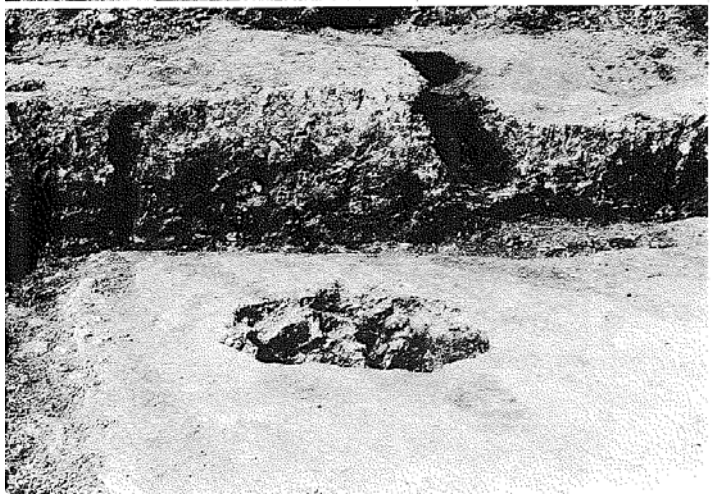
図版 3



住居跡（西から）



住居跡（東から）



カマド付近

図版 4

1：第7図8
2：第11図2
3：〃 17
4：〃 18
5：〃 19
6：〃 3
7：〃 4
8：〃 5
9：〃 8
10：〃 9
11：〃 13
12：第7図2
13：第11図6
14：第7図5
15：第12図6
16：第12図3
17：〃 7
18：〃 14

（縮尺不同）

図版5

1：第13図2　8：第14図1
2：〃　1　9：第15図2
3：〃　6　10：〃　3
4：〃　4　11：第14図8
5：〃　3　12：〃　10
6：〃　7
7：〃　18

（縮尺不同）

図版6

# (7) 熊谷（くまや）遺跡

# 目　　次

Ⅰ　位置と環境……265
Ⅱ　調査の経過……267
Ⅲ　調査結果……267
Ⅳ　まとめ……269

## 調査要項

**遺　跡　明**：熊谷遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号49010）

**遺跡番号**：ＣＫ

**所　在　地**：宮城県栗原郡志波姫町熊谷

**調査対象期間**：約2,700$m^2$（発掘面積750$m^2$）

**調査期間**：昭和52年10月11日～10月25日

**調　査　員**：宮城県教育庁文化財保護課

技術主査　早坂春一　技術　真山悟　佐藤好一　阿部博志

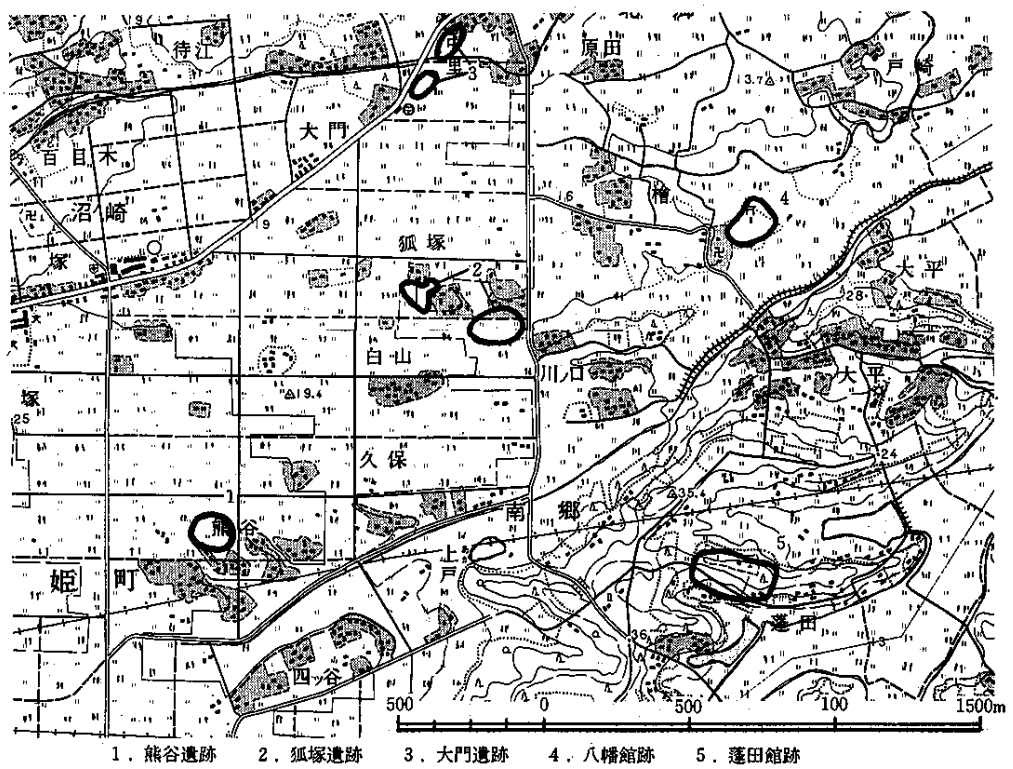
# Ⅰ　位置と環境

熊谷遺跡は栗原郡志波姫町字熊谷にある。町役場から南へ約1.1㎞の地点である。

志波姫町の南部は、奥羽山脈から派生した築館丘陵の一部にあたる標高40m前後の小丘陵が東にのびている。北部は遠く栗駒山に源を発する一追川が東流し、本町の北境をなしており、その南には標高23～12mの沖積地が広がっている。町の中央部一帯は、築館町から若柳町まで広がる標高25～13mのなだらかな台地となっている。台地の縁辺は南側において小丘陵の北麓と接しておりその境を熊谷川が流れている。東側においてはいくつかに枝分れして高度を減じながら沖積地に没している。

本遺跡は、この台地上に立地しており南辺のほぼ中央に位置している。付近は熊谷川沿いに開けた沢をはじめ、いくつかの小さな沢によって樹枝状の地形が形成されており沢に面した部分はゆるやかな斜面となっている。遺跡は台地の平坦部から熊谷川北岸の斜面にかけて広がっている。標高は18～20mで現在水田、畑地、宅地などに利用されている。

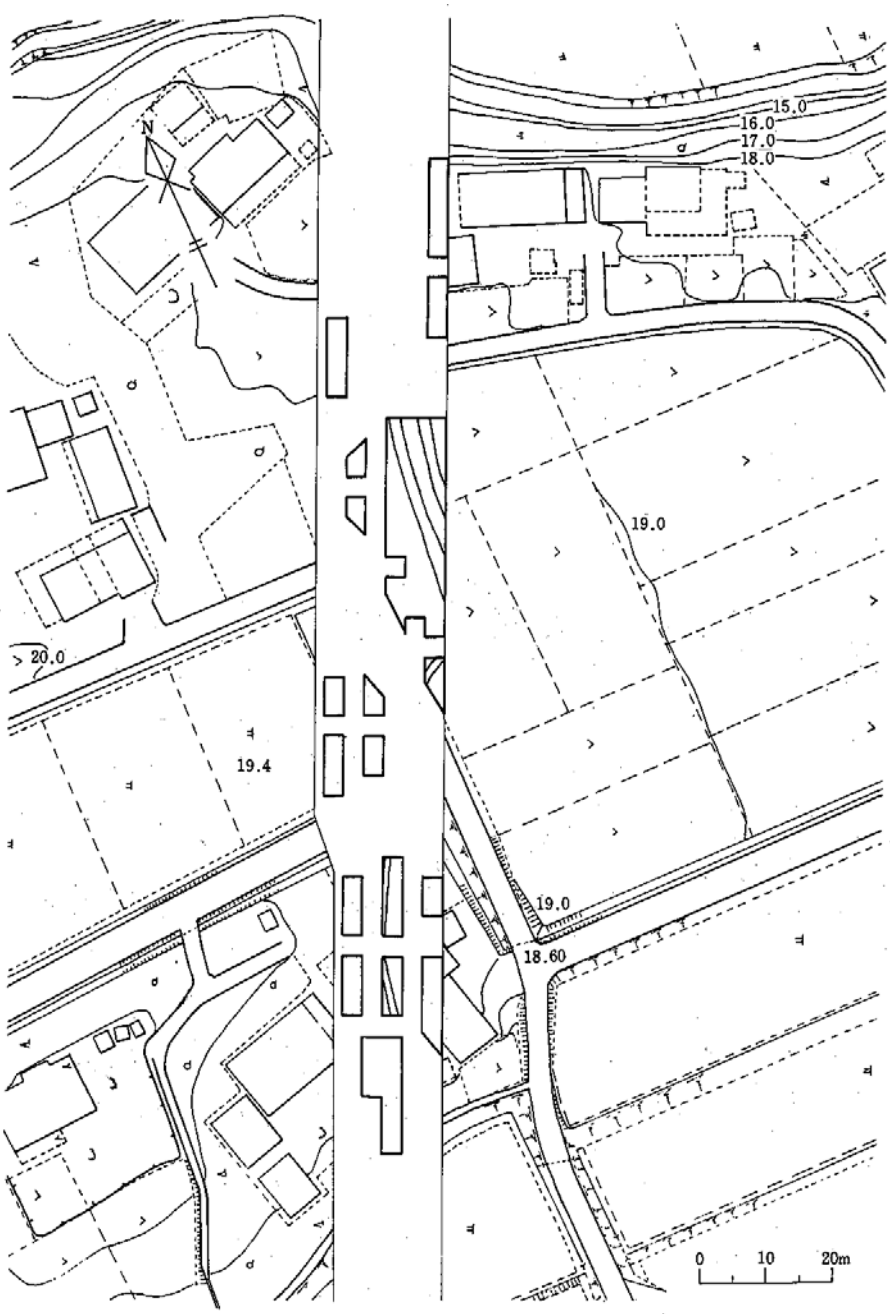
周辺には、本遺跡のほかに奈良から平安時代にかけての集落跡である糖塚遺跡、大門遺跡、




1．熊谷遺跡　2．狐塚遺跡　3．大門遺跡　4．八幡館跡　5．蓬田館跡

**第1図　遺跡の位置**

また同時代の須恵器の窯跡である狐塚遺跡などがあり、この台地上では、古くから集落が開けていたことが知られる（宮城県教育委員会：1976・1978）。




第２図　熊谷遺跡路線敷図

## Ⅱ　調査の経過

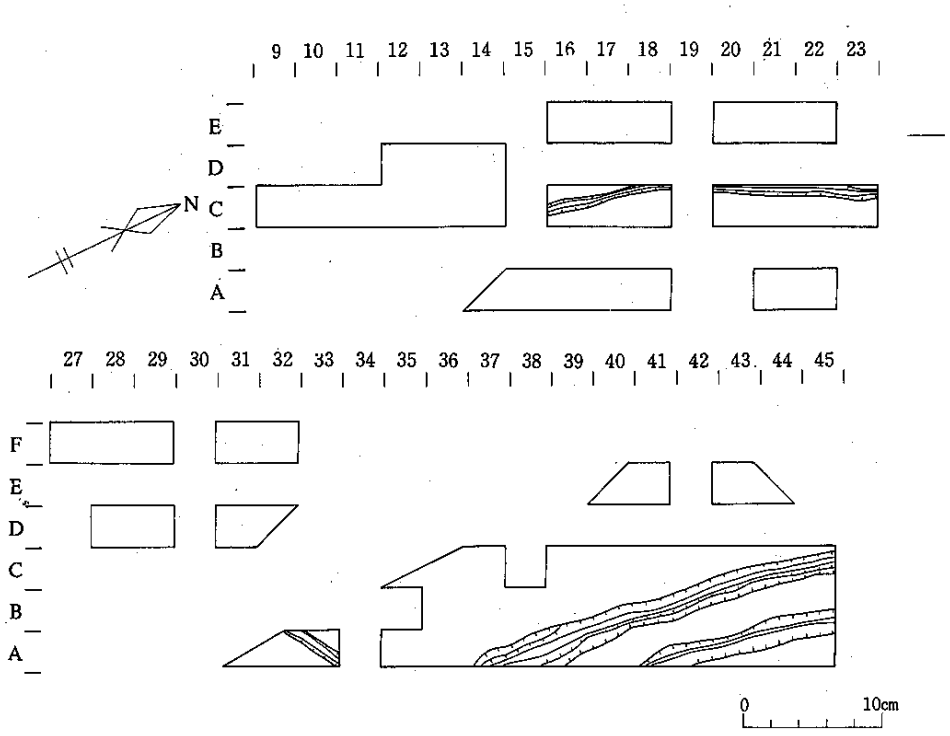
調査は、10月11日から10月25日にかけて行なわれた。調査対象地区は、遺跡内の新幹線路線敷にかかる部分、約2700m²で、そのうちの750㎡を発掘した。

発掘に際しては、路線敷の中心杭を基準に3m四方を1単位とするグリットを設定して実施した。掘り下げた結果、旧地形がすでに削平されているのが明らかになった。わずかに発掘区南端の斜面に旧表土が残っているのみである。遺構は、調査区の中央から南部にかけて溝が3本検出された。遺物は、表土から縄文土器、石器、土師器、須恵器が少量出土している。

## Ⅲ　調査結果

**遺構**　溝が3本発見されている。

溝(第3図)調査区中央部で2本、南側で1本、計3本の溝が検出された。確認面はいずれも地山面である。中央部の2本は幅1.5～2.0m、深さ0.4～0.7mの規模を持ち、並行してほぼ南




**第3図　遺構配図**

北に走る。南側の溝は幅約1.0m、深さ約0.4mと、前者に比しやや小規模で北東から南西方向にのびている。各溝とも堆積土から遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

**遺物**　表土から縄文土器1点、石器7点、土師器1点、須恵器1点出土している。土器はすべて小破片である。

1. 縄文土器:（第4図1）体部破片であるが器形は不明である。外面に原体ＬＲの斜行縄文が施されている。時期は明らかでない。

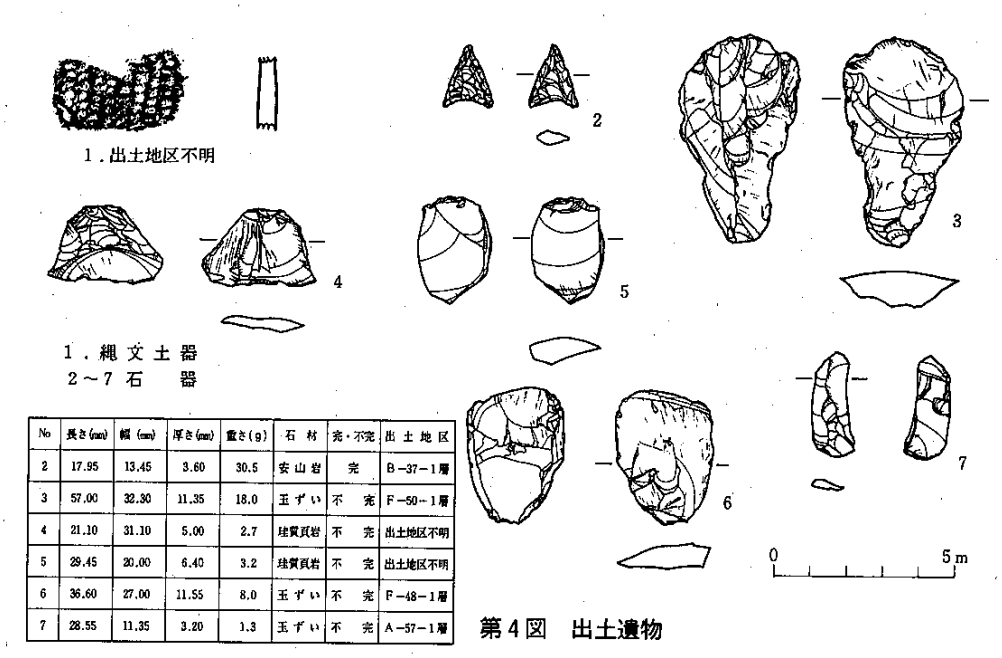
2. 石器

石鏃1点、剥片5点ある。いずれも縄文土器に伴うものと考えられる。

石鏃（第4図2）無茎の石鏃で基部がくぼんでいる。側縁部は両面とも入念な調整剥離が加えられている。先端と基部の両端がわずかに破損している。

剥片（第4図3～7）3、4、6、はバルブを残す剥片である。調整によるものかどうかは不明であるが、部分的に剥離痕がみられるものもある。

3. 土師器、須恵器:土師器は坏の体部破片、須恵器は甕の体部破片である。ともに磨滅が激しい。土師器の内面にヘラミガキ、黒色処理、須恵器の外面に平行タタキ目が観察されたが、これらの特徴から奈良、平安時代のものかと思われる




| No | 長さ(mm) | 幅 (mm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | 石 材 | 完・不完 | 出 土 地 区 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 17.95 | 13.45 | 3.60 | 30.5 | 安山岩 | 完 | B－37－1層 |
| 3 | 57.00 | 32.30 | 11.35 | 18.0 | 玉ずい | 不　完 | F－50－1層 |
| 4 | 21.10 | 31.10 | 5.00 | 2.7 | 珪質頁岩 | 不　完 | 出土地区不明 |
| 5 | 29.45 | 20.00 | 6.40 | 3.2 | 珪質頁岩 | 不　完 | 出土地区不明 |
| 6 | 36.60 | 27.00 | 11.55 | 8.0 | 玉ずい | 不　完 | F－48－1層 |
| 7 | 28.55 | 11.35 | 3.20 | 1.3 | 玉ずい | 不　完 | A－57－1層 |

第４図　出土遺物

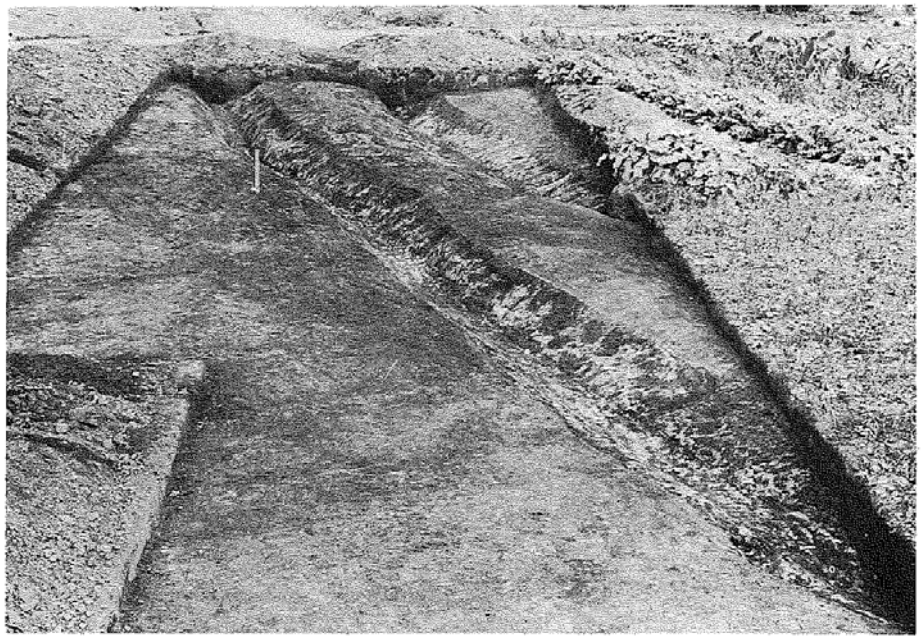
# Ⅳ　まとめ

熊谷遺跡はこれまで縄文時代の遺跡として考えられていたが（宮城県教育委員会:1976）、今回の調査では旧地形が変貌していたこともあって、発掘当初予想された遺構は発見されなかった。しかしながら、縄文時代や奈良、平安時代の遺物が少量ではあるが出土しており、また周辺の地形状況も良好なことから、付近にこれらの遺物に関連する遺構が存在するものと考えられる。

## 引用・参考文献

宮城県教育委員会（1976）「宮城県遺跡地名表」
宮城県文化財調査報告書第46集
〃　（1978）「宮城県文化財調査略報－糖塚遺跡・大門遺跡－」
宮城県文化財調査報告書第53集

# 図　　版



図版1　上：発掘区中央より南を眺む
下：溝

1：4図2

2：4図4

3：4図5

4：4図3

5：4図6

図版2　上：発掘参加者
下：出土遺物

# (8) 大門（だいもん） 遺　跡

# 目　　次

Ⅰ　位置と環境……275
Ⅱ　調査の方法と経過……277
Ⅲ　発見された遺構と遺物……279
1　大門地区……279
(1) 墓壙……279
(2) 溝……279
(3) 土壙……279
2　中里地区……282
(1) 基本層位……283
(2) 竪穴住居跡……284
(3) 井戸……292
(4) 溝……293
(5) 土壙……293
(6) 遺構に伴わない出土遺物……293
Ⅳ　考察……295
1　大門地区……295
(1) 遺構……295
(2) 遺物……295
2　中里地区……295
(1) 住居跡の構造……295
(2) 出土土器の分類……296
(3) 出土土器の組み合せと年代……297
(4) 住居跡の年代……299
(5) 住居跡における問題点……299
(6) その他の遺構の年代……300
Ⅴ　まとめ……300

## 調査要項

**遺　跡　名**：大門遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：49011）

**遺跡記号**：ＣＬ（大門地区）ＥＱ（中里地区）

**所　在　地**：宮城県栗原群志波姫町郷中里、大門

**調査対象面積**：約4,500m$^2$（発掘面積2,100m$^2$）

**調査期間**：昭和52年9月5日～10月10日

**調　査　員**：宮城県教育庁文化財保護課

技術主査　早坂春一　技師　丹羽茂　　真山悟　佐藤好一　阿部博志

# Ⅰ　位置と環境

大門遺跡は栗原郡志波姫町北郷字中里および大門に所在する。町役場から直線距離にして東へ約0.5㎞、町内を横断する県道志津川ー湯沢線の南沿いに位置している。

栗原郡の地形を概観すると、奥羽山地から派生して箆岳丘陵の西端に至る築館丘陵が東南にのびている。この丘陵の北半は一迫川、二迫川、三迫川の3河川によって開析され、数多く分岐した丘陵群となっている。また開析された結果、これらの河川の流域には、丘陵群に入り込んだ谷底低地をはじめ多くの沖積低地が形成されており、これらは一括して迫川上流低地と呼ばれている。さらに河川沿いには、丘陵の末端部に接するように、台地、段丘群が分布している。

ここで郡内の北東に位置する志波姫町の地形についてみると、北部は町の北境を東流する一迫川の南岸に広がった沖積地となっている（迫川上流低地）。標高12～23mで大半が水田として利用されている。また川沿いには自然堤防が発達しており、刈敷地区の民家が散在している。町の中央部および南部はほぼ平坦な台地となっている。この台地は築館町から志波姫町にかけて、のびており西部の高い部分で標高25m、東の低い部分で標高13mとゆるやかに北東に傾斜している。台地の北および東端は各所で舌状になり沖積地と接しており、南端は町の南境を東にのびる標高40m以下の小丘陵の麓に接している。この台地は、大半が水田となっている。

大門遺跡は、この台地上に立地する。台地のほぼ中央、北寄りにあり、志波姫町ではほぼ中央部にあたる。現状は水田、畑地、宅地などになっており、付近の畑地からは土師器片の散布がみられる。標高は17～19mで、北部に広がる沖積地との比高は約5mとなっている。

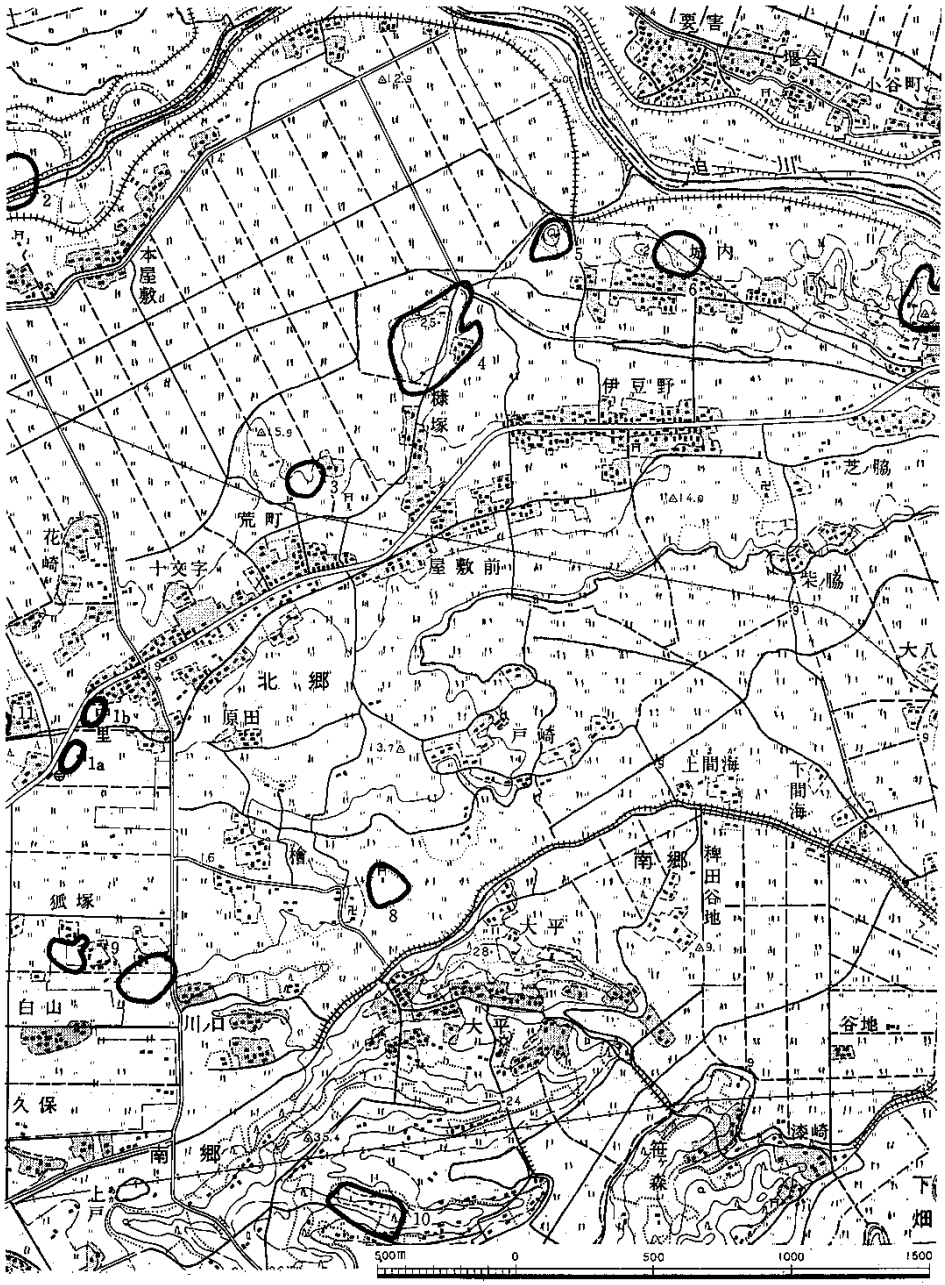
周辺には、本遺跡のほかいくつかの遺跡が存在している。刈敷治郎遺跡、竹の内遺跡、熊谷遺跡など縄文時代の遺跡が知られている。

弥生時代の遺跡は･現在のところ数が少ないが、昭和53年の発掘により字南遺跡から、同時代の甕棺が出土している。（宮城県教育委員会:1979）。

古墳時代の遺跡としては御馳堂遺跡、鶴の丸遺跡、宇南遺跡がある。これらの遺跡からは多くの竪穴住居跡が発見された。これは、県北では数少ない古墳時代の集落の形態を知る上で貴重な遺跡として注目されるものである。（宮城県教育委員会:1978、1979）。

奈良･平安時代の遺跡として糠塚遺跡、荒町遺跡、狐塚遺跡などがある。糠塚遺跡は昭和47年に発掘調査が行なわれており、30軒の竪穴住居跡が発見された（宮城県教育委員会:1978）。また狐塚遺跡は、須恵器を生産した窯跡であることが知られている。

この他、中世の城館跡である鶴の丸館跡、宇南館跡、八幡館跡があり、こういった城館跡の存在は同時に、中世の集落の存在を予想させるものであろう。




1．大門遺跡　a－大門・b－中里）　2．刈敷治郎遺跡　3．荒町遺跡　4．糠塚遺跡
5．山王館跡　6．城内古墳　7．新井山館跡　8．八幡館跡　9．狐塚遺跡
10．蓬田館跡　11．竹ノ内遺跡　　（7の若柳町を除きいずれも志波姫町）

第1図　遺跡の位置

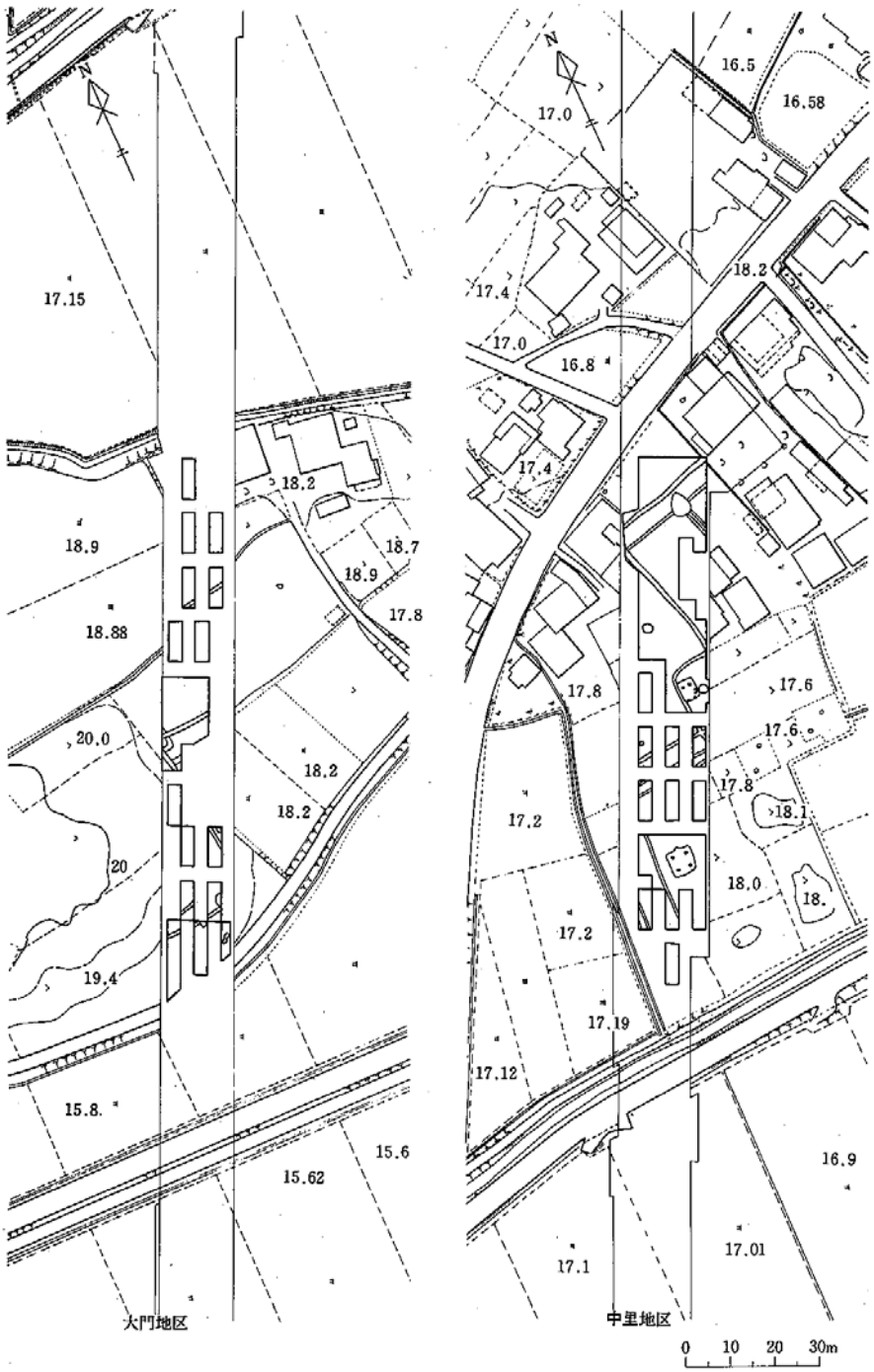
# Ⅱ　調査の方法と経過

東北新幹線は、大門遺跡を南北に横断して通るため、遺跡の路線敷にかかる部分を対象に発掘調査を行なった。調査区は中央部が水田となっており、重機によって掘り下げた結果、路線敷を横断するように、東に傾斜する沢がのびているのが確認された。そこで調査では、これを境にして南北2つの地区に分け、小字名から南側を大門地区（ＣＬ）、北側を中里地区（ＥＱ）とした。調査では両地区とも路線敷のセンター杭を中心に、3mを単位とするグリッドを設定しており、東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で示し、グリッド名とした（第3図）。

9月5日、調査はまず大門地区の粗掘り作業から始まった。同地区の現状は畑地となっており、全体に東にゆるやかに傾斜している。発掘の結果、耕作土の下はすぐ地山となっており、調査区全域が地山まで撹乱されていたのが認められた。遺構としては土壙7基、溝8本、墓壙1基が検出されたほか、耕作土中から少量の土師器、須恵器、中世陶器の破片と、石器が出土している。同地区の遺構についてはすべて1/100で平面図を作成し、さらに各トレンチの地表面と地山面のレベル測定を行なった。

大門調査の調査終了後、9月14日から中里村区の調査に入った。同地区は、畑地、宅地となっており、全体に平坦な地形である。精査の結果Ｂ－12区及びＢ－24区から竪穴住居跡2軒が発見され、また調査区の北側を中心に溝、井戸、土壙が検出された。9月28日、まず住居跡から掘り始め、さらにこれと併行して、溝、井戸、土壙の精査を行なった。住居跡については、十文字にあぜを残す四分法で発掘を行ない、1/20の断面図を作成し、堆積土の状況を記録した。また平面図は、遣り方による1/20の実測図を作成した。他の遺構については、平板による1/20の平面図を作成した。各遺構についてはレベルを測定し、写真撮影を行なった。ほぼ遺構の全様が明らかになった10月15日、地元住民を対象に現地説明会を催し、遺跡の公開を図った。

以上の経過をへて発掘調査の終了したのは10月10日である。最終的に掘り上げた面積は、両地区併せて2100m$^2$である。その結果発見された遺構は、大門地区で墓壙1基、溝7本、土壙6基、中里地区で竪穴住居跡2軒、井戸2基、溝11本、土壙1基である。




**第２図　大門遺跡路線敷図**

# Ⅲ　発見された遺構と遺物

本遺跡は大門地区と中里地区に分れることはすでに前述した。したがってここでは、遺構および遺物について、地区別に説明する。

## 1　大門地区

遺構：墓壙1基、溝7本、土壙6基が検出された。確認面は各遺構とも地山面である。

**(1) 墓壙**　Ｃ－6 区で確認された。隅丸方形の平面形をもつ、長軸は 1.4m、短軸は 1.2mで深さは約 50cm となっている。1 号溝を切っていることから、それより新しいものと削る。堆積土は、一様に地山ブロックを多量に含んでおり、人為的に埋め戻した痕跡を示している。埋土中からは、人骨、キセル、寛永通宝が出土している。[注)]

**(2) 溝**　いずれも巾70～100cm、深さは深いもので40cm、浅いもので10cmの規模をもつ。溝の方向は東西、及び南北にのびている。直交する部分もあるが、堆積土がいずれも黒褐色土で類似していたため新旧関係は不明であった。全て直交あるいは平行の関係にあるのであるいは同時期のものかも知れない。このうち1号溝は墓壙によって切られている。また1号溝の堆積土中からは、土師器片1点、須恵器片2点出土しているが、出土状況から流れ込んだ可能性が強い。

**(3) 土壙**　いずれも円形に近い平面をもつ。大きいもので長軸が約3m、小さいもので1m、深さはいずれも50cm以下である。堆積土中からの遺物はない。

出土遺物：土師器3点、須恵器33点、中世陶器1点、石器1点出土しており、大半が表土出土のものである。このうち土師器、須恵器は全て破片で図示できるものはなく、ここでは破片集計で示した(第1表)。

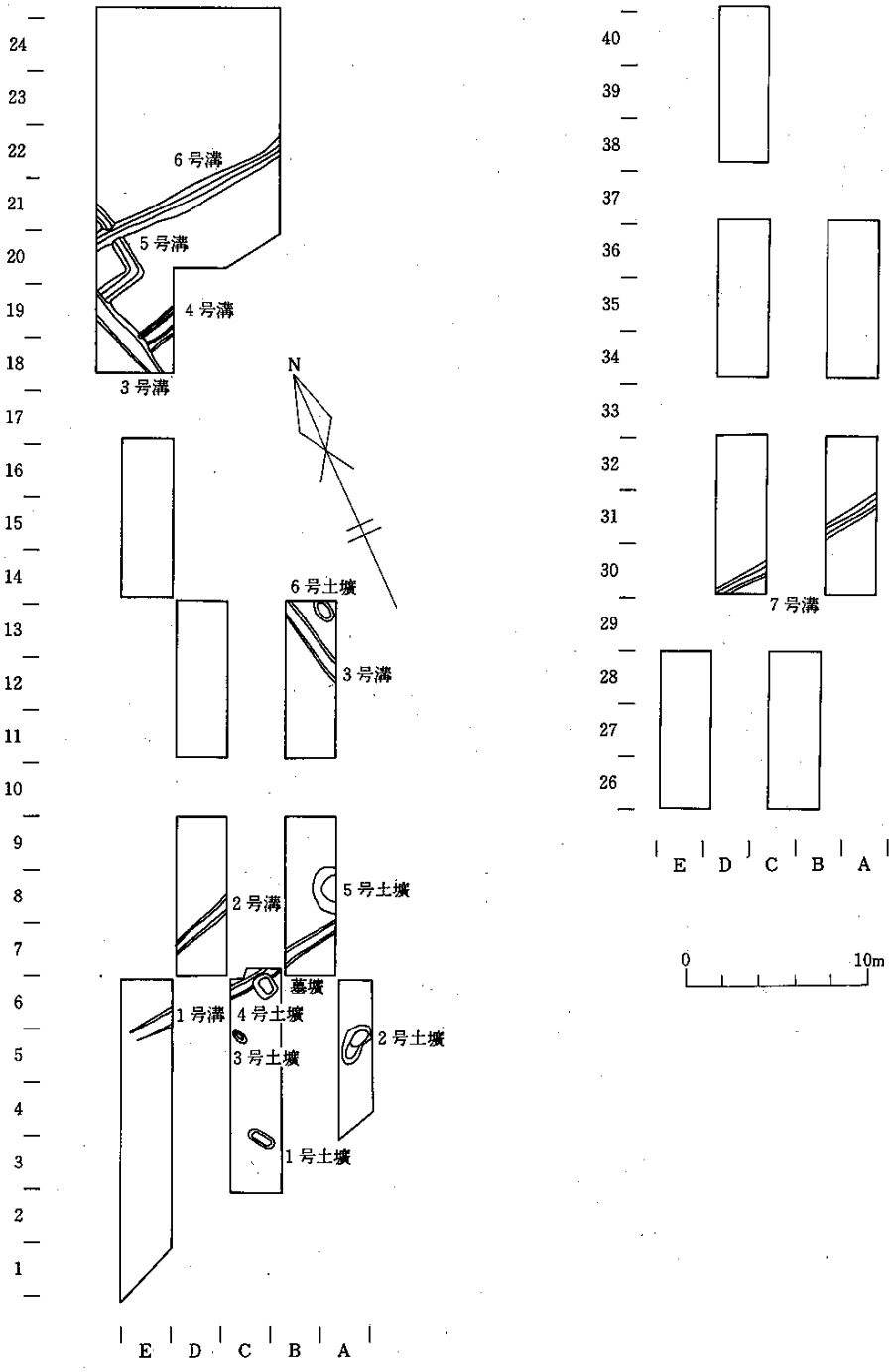
石器（第4図2）

縦長の剥片を素材としている不定形石器である。下端部が欠損しており、その形状は把握できない。背面に大きく自然面を残している。背面の右縁辺部を調整剥離して刃部を形成しているが、調整は荒く、刃部の各所が破損している。

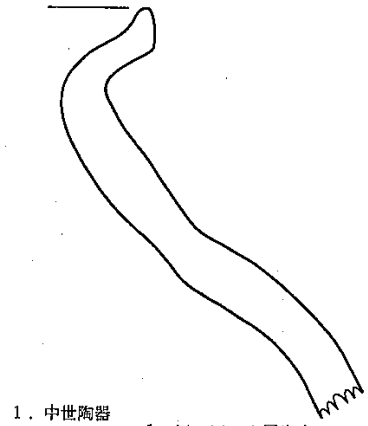
中世陶器(第4図1)

壺の口縁部破片である。口縁端部の内側にわずかに段があり、軽い受口状のものである。全体に調整があらく凹凸がめだつ。色調は赤褐色で頚部から肩部にかけて黄褐色の自然釉がかかる。胎土は黒っぽい灰色で砂を含んでおりかたい。

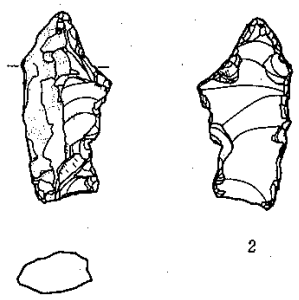
注）墓壙　遺物については他の場所に再埋葬した。




第３図　大門地区遺構配図



1．中世陶器
2．石　　器　　1．×－×－1層出土



2

| No | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重さ (g) | 石　材 | 完・不完 | 出土地区 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 54.90 | 26.45 | 9.75 | 13.2 | 玉ずい | 不　完 | E-18-1層 |

0　5　10cm

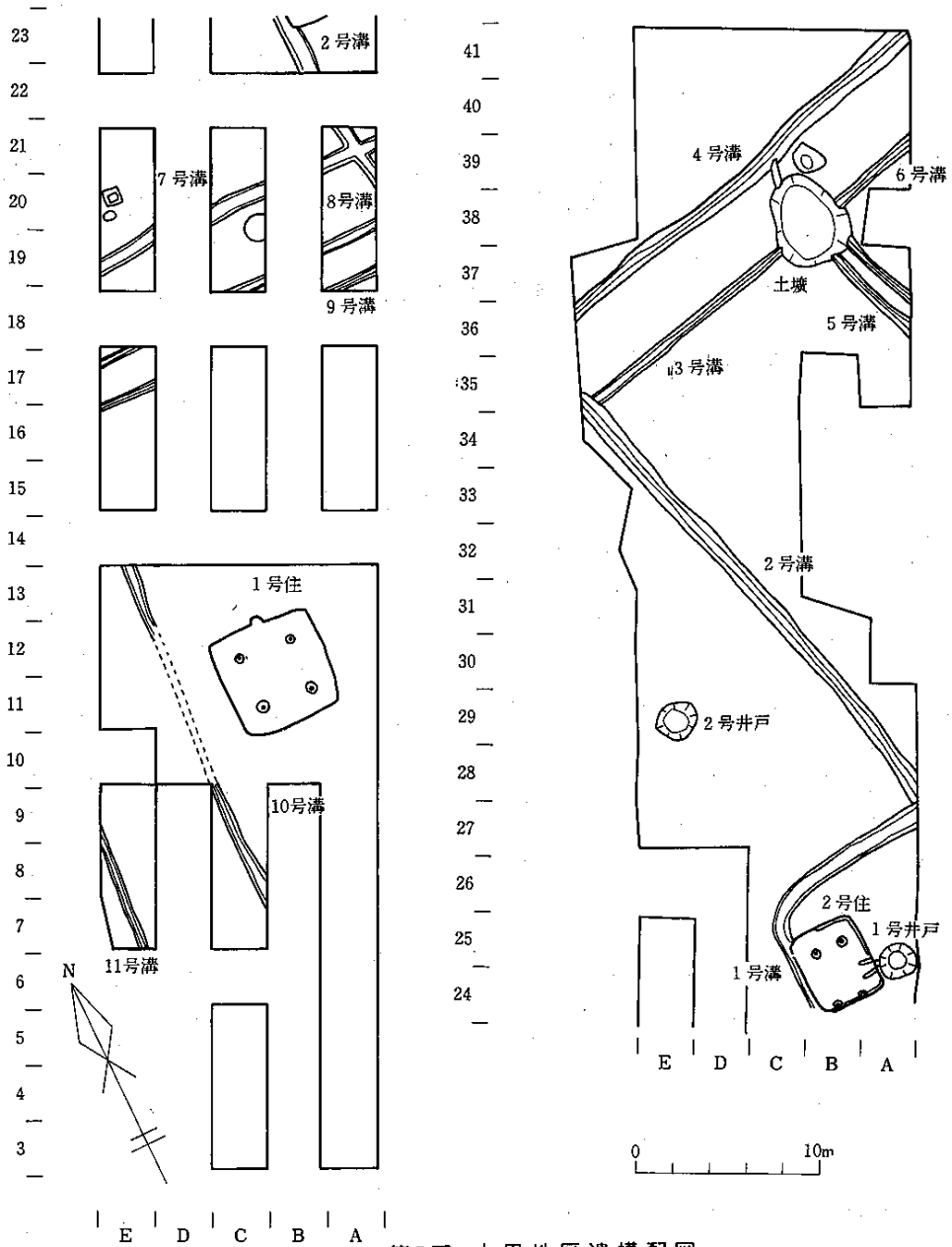
第4図　大門地区出土遺物

## 第1表　大門地区破片集計表

| 種別 | 器形 | 部位 | 器面調整 外面 | 器面調整 内面 | 1溝 | A－1 | A－3 | A－5 | B－7 | B－9 | B－11 | C－3 | C－4 | C－5 | C－17 | E－2 | E－3 | E－4 | E－19 | 不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 坏 | 底部 | ロクロ | ミガキ（黒） | | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| | 甕 | 口縁部 | ナデ | ナデ | 1 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 体部 | 不明 | 不明 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| 須恵器 | 坏 | 台部 | ロクロ | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| | 瓶 | 体部 | ロクロ | ナデ | | | | 1 | | 1 | 2 | 2 | | | | 1 | | | | |
| | | | ロクロ | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| | | | ナデ | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| | | | | ナデ | | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 | | | | |
| | | | ケズリ | | 1 | | | | | | | | | | | 2 | | | | |
| | | | ケズリ | ナデ | | | | | | | | 1 | 1 | | | 2 | | | | |
| | | | タタキ（平行） | ナデ | 1 | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | |
| | | | タタキ（平行） | 青海波 | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| | | | タタキ（平行） | オサエ | | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | | |
| | 蓋 | 口縁部 | ロクロ | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| | | 体部 | ロクロ | ナデ | | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| | 蓋 | 口縁部 | ロクロ | ナデ | | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 中世陶器 | 甕 | 体部 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |

## 2　中里地区

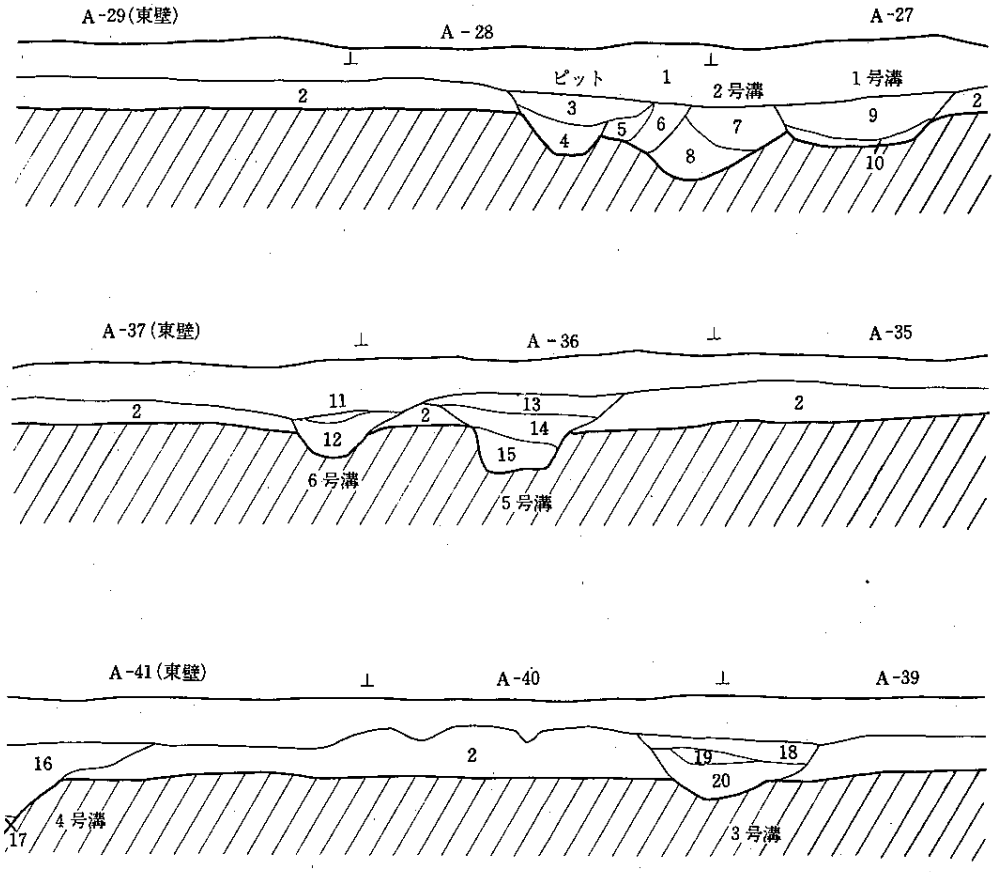
同地区からは、竪穴住居跡2軒、溝11本、井戸跡2基、土壙1基発見されている。遺構の説明の前にまず層位について若干ふれておきたい。




第5図　中里地区遺構配図

## (1) 基本層位

2枚の層からなっており、両層とも発掘区全面に広がう。第1層は厚さ20～40cmの暗褐色シルト層である。耕作により全体に撹乱されている。須恵器の破片3点および中世陶器の片1点出土したほかは遺物はほとんど含まない。第2層は厚さ20～30cmの黒色シルト層である。草木根が多量に混入しており部分的に木炭を含んでいる。腐植性が強い。層中からは土師器、須恵器の破片がごく少量出土している。




| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ピット | 1 | 褐暗褐色 (7.5YR3/3) | シルト | 耕作土 | 6号溝 | 11 | No6層と同一 | シルト | |
| | 2 | 黒色 (10YR2/1) | シルト | 炭化物草根含む | | 12 | No7層と同一 | シルト | |
| | 3 | 黒褐色 (10YR3/2) | シルト | | 5号溝 | 13 | No7層と同一 | シルト | |
| | 4 | 黒褐色 (7.5YR3/2) | シルト | | | 14 | 黒褐色 (5YR2/1) | シルト | |
| 2号溝 | 5 | 黒褐色 (7.5YR3/2) | シルト | 地山ブロック含む | | 15 | 黒褐色 (7.5YR3/1) | シルト | 地山の小粒含む |
| | 6 | 黒色 (7.5YR2/1) | シルト | 地山の小粒含む | 4号溝 | 16 | 黒褐色 (7.5YR3/2) | シルト | 地山の小粒含む |
| | 7 | 黒褐色 (7.5YR3/2) | シルト | | | 17 | 黒褐色 (10YR3/2) | シルト | 地山の小粒含む |
| | 8 | 黒褐色 (10YR3/2) | シルト | 〃 | 3号溝 | 18 | 黒褐色 (10YR2/2) | シルト | |
| 1号溝 | 9 | 黒色 (7.5YR2/1) | シルト | 〃 | | 19 | 黒褐色 (7.5YR3/2) | シルト | 地山の小粒含む |
| | 10 | ( 〃 ) | シルト | 地山の小粒含む | | 20 | 黒色 (7.5YR2/1) | シルト | 地山の小粒含む |

0 1 2m

第6図　基本層位・
第1・2・3・5・6号溝セクション図

### (2) 竪穴住居跡

#### 第1号住居跡

**〔遺構の確認〕** Ｂ－12区において地山面から確認された。

**〔平面形・規模〕** 平面形は長方形で、その規模は長軸6.5m、短軸5.5mである。

**〔堆積土〕** 8枚に分かれたが、基本的には4層に大別される。第1層は粘性の強い黒褐色シルト層で住居跡の中央部に堆積している。第2層はにぶい黄橙色シルトで分布が広くほぼ住居跡全域に及んでいる。第3層は褐色のシルト層で、床面上に堆積している。壁際を除きほぼ全域に広がる第4層は黒褐色のシルト層で壁沿いに堆積している。

**〔壁〕** 地山を壁としており、床面から垂直に立ち上がる。残存壁高は西辺がやや低く12～15cmで他の辺は約20cmとなっている。

**〔床〕** 床はほぼ平坦である。中央部は地山を床としており、かたくしまっている。周縁部は壁の内側にそって巡る巾約40cmの掘り方が認められ、その埋土の上面を床としている。

**〔柱穴〕** 床面には8個のピットが検出されている。このうちピット1、2、3、4、はいずれも柱痕跡をもっており、深さも他に比して深いことなどから柱穴と考えられる。これらは四隅を結んだ対角線上に位置している。

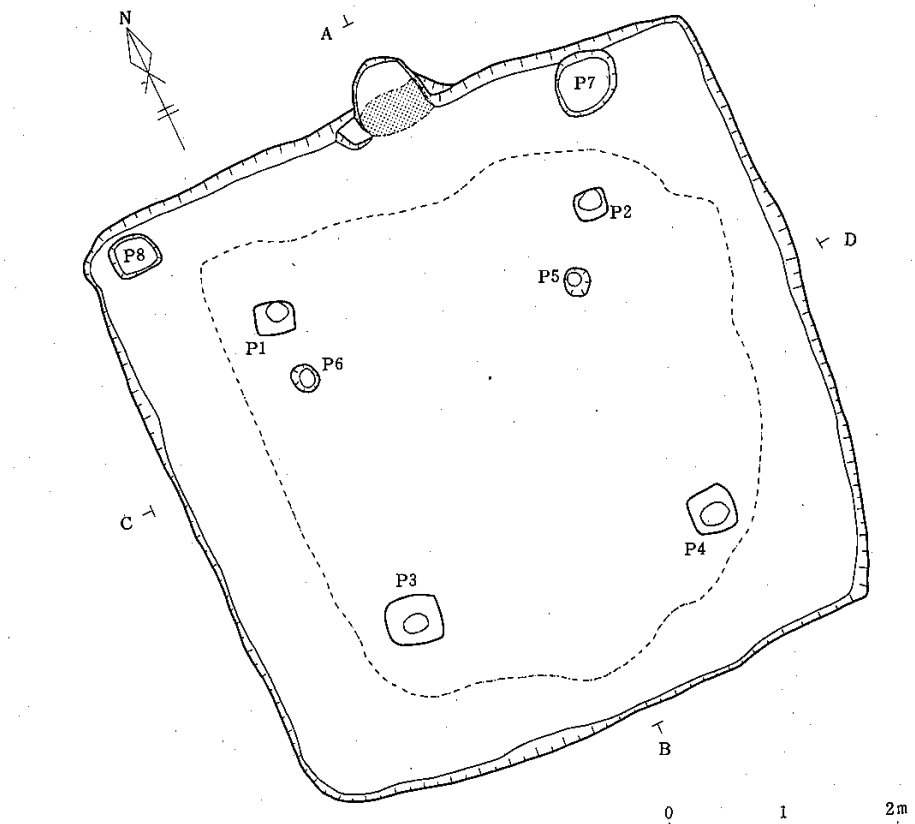
**〔カマド〕** 北壁のほぼ中央に位置している。壁の外に40cmほど地山を掘り込んで燃焼部を構築している。両側壁および底面の中央から手前にかけて焼け面がみられる。カマド天井は残存していないが内部の堆積土に多量の白色粘土が混入しており、天井の崩壊土と考えられる。燃焼部の左手前に側壁と思われる横幅15cm長さ25cm高さ10cmほどの張り出しがみられる。これは内側が赤く焼けてかたくなっていることから、燃焼部側壁の一部と考えられる。これに対し燃焼で、その崩壊土と推定される。燃焼部の奥壁は20約cmの高さでほぼ40°の角度に立ち上ったままで煙道、煙出しと思われるものは確認されなかった。カマドの軸方向はN－4°－Wとなっている。

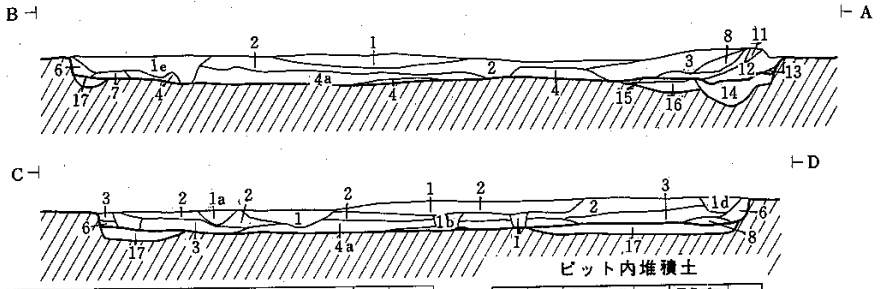
**〔出土遺物〕** 床、カマド内、住居内堆積土から出土している。

**床面出土遺物**

**土師器**

坏 (1) 体部下半から底部にかけて欠損しているため全体の器形は明らかでないが、埦形のものと思われる。体部から口縁部にかけて内弯ぎみに立ち上がる。最大径が口唇部よりやや下った位置にある。器面調整は、外面では口縁部にヘラミガキ、体部にヘラケズリののちヘラミガキが施されており、内面ではヘラミガキ、黒色処理されている。



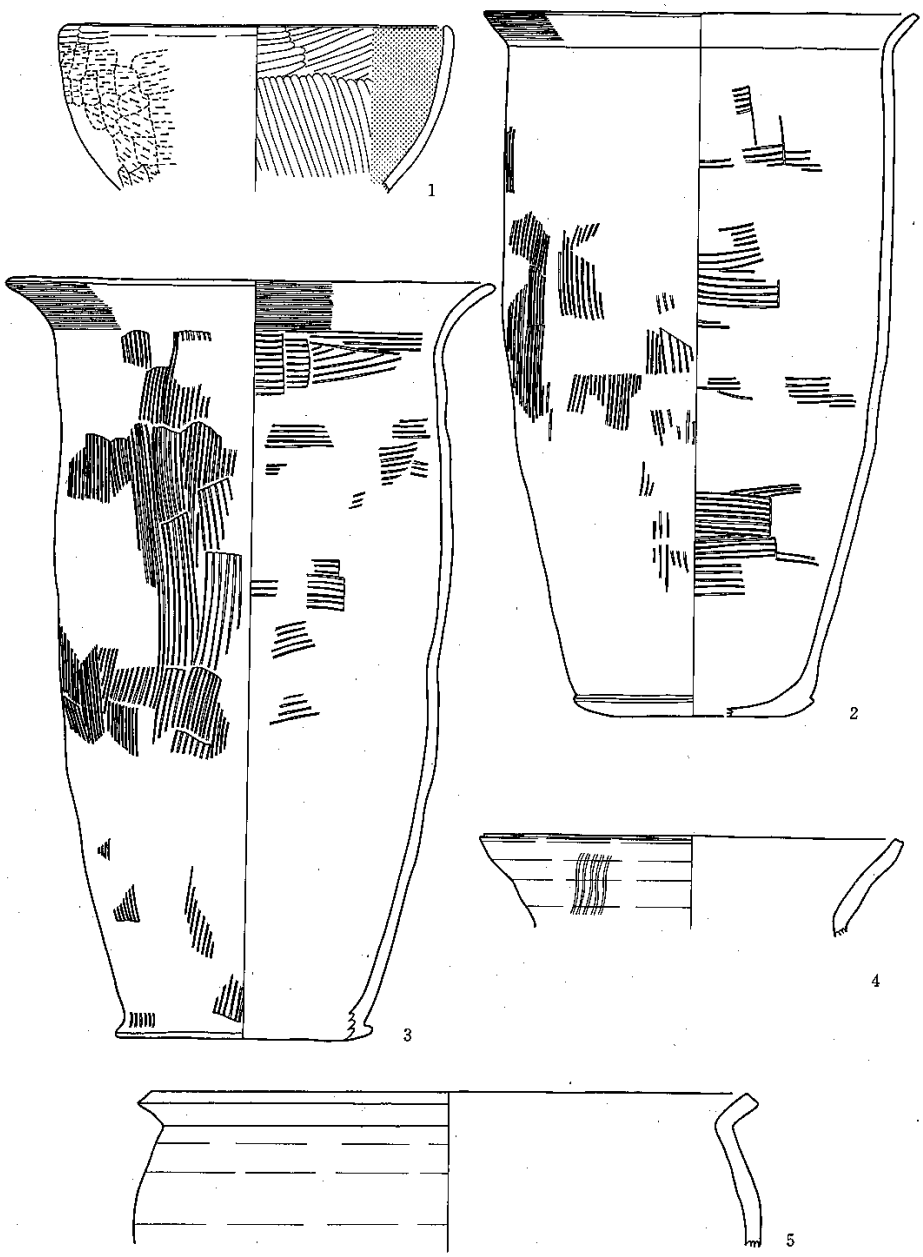




| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1層 | 1 | 黒 褐 色(10 YR3/1) | シルト | 粘性強し |
| | 1a | 黒 色(10 YR3/1) | ＊ | |
| | 1b | 黒 色(10 YR3/1) | ＊ | |
| | 1c | 黒 色(10 YR3/1) | ＊ | 地山ブロックを含む |
| | 1d | 黒 褐 色(10 YR3/1) | ＊ | ぼそぼそしている。 |
| | 1e | 黒 褐 色(10 YR3/1) | ＊ | ＊ |
| 2層 | 2 | にぶい黄橙色(10 YR7/4) | ＊ | |
| 3層 | 3 | 暗 褐 色(10 YR3/4) | ＊ | |
| | 4 | 褐 色(10 YR4/4) | ＊ | |
| 4層 | 5 | 褐 色(10 YR4/4) | ＊ | |
| 4'層 | 6 | 黒 褐 色(10 YR3/1) | ＊ | 地山を帯状に含む |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 4'層 | 7 | 黒 色(10 YR3/1) | シルト | |
| | 8 | 暗 褐 色(7.5YR3/4) | ＊ | 地山を帯状に含む |
| カマド崩壊土 | 9 | 暗 褐 色(10 YR3/4) | ＊ | |
| | 10 | 黒 褐 色(10 YR3/2) | ＊ | |
| | 11 | 黒 褐 色(10 YR3/1) | ＊ | |
| | 12 | 暗 褐 色(10 YR3/4) | ＊ | |
| | 13 | 浅 黄 色(2.5Y 7/4) | ＊ | |
| 掘り方埋土 | 14 | 黒 色(10 YR3/1) | ＊ | |
| | 15 | 黒 褐 色(10 YR3/2) | ＊ | 地山ブロックを含む |
| | 16 | 黒 褐 色(10 YR3/1) | ＊ | ＊ |
| | 17 | 黒 褐 色(10 YR3/1) | ＊ | |

| Pit 1 | 掘り方 | | シルト | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 柱痕跡 | 暗 褐 色(10 YR3/4) | ＊ | 黒色ブロック含む しまりがない | 31cm (深さ) |
| 2 | 〃 | 黄 褐 色(10 YR5/6) | 〃 | | 80cm |
| | 〃 | 暗 褐 色(10 YR3/4) | 〃 | しまりがない | |
| 3 | 〃 | 褐 色(10 YR4/4) | 〃 | 黒色ブロック含む | 55cm |
| | 〃 | 暗 褐 色(10 YR3/4) | 〃 | しまりがない | |
| 4 | 〃 | 褐 色(10 YR4/4) | 〃 | 黒色ブロック含む | 55cm |
| | 〃 | 暗 褐 色(10 YR3/4) | 〃 | しまりがない | |
| 5 | | 黒 褐 色(10 YR3/2) | 〃 | | 23cm |
| 6 | | 暗 褐 色(10 YR3/4) | 〃 | | 14cm |
| 7 | | 暗 褐 色(10YR3/4) | 〃 | | 13cm |
| 8 | | 暗 褐 色(7.5YR3/4) | 〃 | | 7 cm |

第7図　第1号住居跡




1．土師器坏
2～4．土師器甕
5．須恵器甕

第８図　第１号住居跡出土遺物

**甕**（3）口縁部に最大形をもつ長胴形をなすもので口縁部が強く外反する。器面調整は口縁部内外面とも横ナデが行われ、体部は内外面とも刷毛目が施されている。

**カマド内出土遺物**

**土師器**

**甕**（2）最大径が口縁部にある長胴形のもので口縁部が外反する。器面調整は口縁部外面がヨコナデで内面は不明、体部は内外面とも刷毛目が施されている。底部に木葉痕がみられる。

**堆積土出土遺物**

**土師器**

**甕**（4）口縁部のみの資料である。製作に際しロクロを使用したもので、内外面にロクロ調整痕が見られる。

**須恵器**

**甕**（5）体部下半が欠損している。体部上半はやや丸味をもちながら内弯し、口縁部は頚部から急角度で外傾する。磨滅が激しく調整は不明である。

## 第2号住居跡

**〔遺構確認〕**Ｂ－24区において基本層序第Ⅱ層中から確認された。

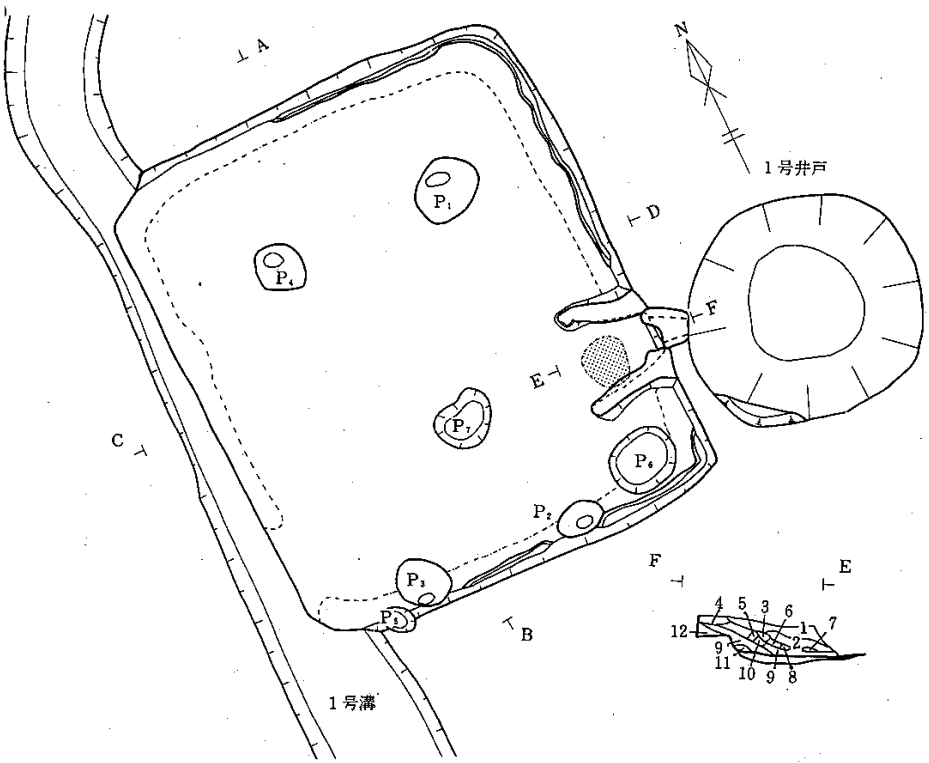
**〔平面形･規模〕**住居跡の西辺が1号溝によって切られており、壁、床がこわされていたが掘り方が残存している。平面形は長方形で規模は長軸4.7m、短軸3.85mである。

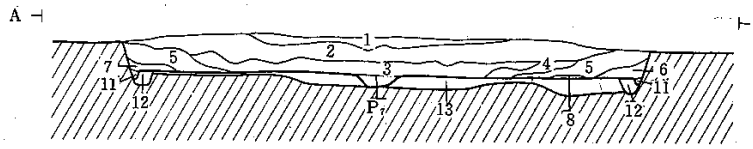
**〔堆積土〕**12枚に細分されたが、基本的には3層に大別された。第1層は黒色のシルト層で住居跡の中央に厚く堆積し、周縁ほど薄くなる。第2層は黒褐色がち黒色のシルト層で、中央部床面上に堆積している。第3層は周縁部に堆積した層で、黒色シルト層からなっている。

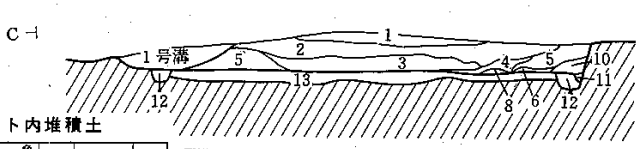
**〔壁〕**西辺をのぞく3辺が残存している。上端近くは基本層序第2層それ以下は地山が壁となっている。残存壁高は20～25cmとほぼ一様でほぼ直角に立ち上がる。

**〔床〕**全面が、掘り方に地山ブロックを含む土を敷いて平坦にした貼り床となっている。周縁部に比して中央部がかたくなっている。

**〔柱穴〕**床面からピットが7個検出された。このうち、ピット1･2･3･4は掘り方のなかに柱痕跡が認められた。これらは形態、規模がほぼ一致しており柱穴と考えられる。このうちピット2、3は壁際に掘り込まれている。






ピット内堆積土

| Pit 1 | 掘り方 | 黒 (10 YR3/1) 色 | シルト | 地山の小粒含む | 52cm (深さ) |
|---|---|---|---|---|---|
| | 柱痕跡 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | | |
| 2 | 〃 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | 〃 | 45cm |
| | 〃 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | | |
| 3 | 〃 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | 〃 | 49cm |
| | 〃 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | | |
| 4 | 〃 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | 〃 | 45cm |
| | 〃 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | | |
| 5 | | 黒 (7.5YR3/1) 色 | 〃 | | 10cm |
| 6 | | にぶい黄橙色 (10YR 7/3) | 粘土 | 焼土・炭化物含む | 14cm |
| 7 | | にぶい黄橙色 (10 YR7/3) | 〃 | 〃 | 10cm |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | 黒 (10 YR3/1) 色 | シルト | 地山ブロック含む | 1 | 黒 褐 色 (10 YR3/2) | シルト | 焼土の小粒含む |
| 層 | 2 | 黒 (7.5YR3/1) 色 | 〃 | 地山の小粒含む | 2 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | 〃 |
| 2層 | 3 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | 〃 | 3 | にぶい黄褐色 (10 YR5/3) | 粘 土 | 〃 |
| | 4 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | 地山ブロック含む | 4 | にぶい黄褐色 (10 YR5/3) | 〃 | 〃 |
| 3 | 5 | 黒 (7.5YR3/1) 色 | 〃 | 地山の小粒含む | 5 | 褐 (10 YR5/3) 色 | 〃 | 〃 |
| | 6 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | 〃 | 6 | 暗 褐 (10 YR3/3) 色 | 〃 | 焼土含む |
| | 7 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | 〃 | 7 | にぶい黄褐色 (10 YR5/3) | 〃 | 焼土の小粒含む |
| | 8 | 黒 (7.5YR3/1) 色 | 〃 | 〃 | 8 | 暗 赤 褐 色 (2.5YR3/3) | シルト | 焼土を多量含む |
| 層 | 9 | 暗 褐 色 (7.5YR3/3) | 〃 | 地山の小粒含む | 9 | 明 赤 褐 色 (5 YR5/6) | 〃 | 〃 |
| | 10 | 黒 (7.5YR3/1) 色 | 〃 | 焼土ブロック含む | 10 | 明 赤 褐 色 (5 YR5/6) | 〃 | 地山ブロック含む |
| 溝埋土 | 11 | 黒 (7.5YR3/1) 色 | 〃 | 〃 | 11 | 明 赤 褐 色 (5 YR5/6) | 〃 | 〃 |
| 溝埋土 | 12 | 黒 (7.5YR3/1) 色 | 〃 | 地山ブロック含む | 12 | 黒 褐 色 (7.5YR3/2) | 〃 | 〃 |
| 粘床 | 13 | 黒 (10 YR3/1) 色 | 〃 | 〃 | 13 | 褐 (10 YR4/4) 色 | 〃 | 地山ブロック含む |

第９図　第２号住居跡

**〔周溝〕**南辺と東辺のカマドを除く部分、それに北辺の東半に巡る。上端幅約10㎝、下端幅約5㎝､床からの深さは6～8㎝である｡断面はU字形を示し､なかに黒色シルト層が堆積している。また､周溝の外側に､周溝の上端と平行して走る掘り方が認められた｡規模は上端幅20～25㎝､下端幅約15㎝､深さ約15㎝である。貼り床を切って掘られており、周溝の下に及んでいる。断面形は周溝と同じくU字形で、堆積土は地山ブロックを多量に含んでおり、人為的な埋り方をしている。周溝をやや広く深くしたような状態で巡る（図版4上）。

**〔カマド〕**東辺の南寄りにとりつけられている｡燃焼部側壁は黄褐色の粘土で構築されている。左側壁の先端の近くには須恵器甕の破片が側壁を補強するような状況で埋め込んであった。両側壁とも内側が赤変してかたくなっている。燃焼部の内側には、黄褐色の粘土や焼土ブロックが堆積しており、天井部の崩壊したものと考えられる。燃焼部底面には40×45㎝の範囲で焼け面がみられる。燃焼部の奥壁が14㎝ほど立ち上がった部分から煙道がのびているが、先端は後崩壊したものと思われる。カマドの軸方向はN－91°－Eである。

**〔貯蔵穴状ピット〕**カマドの右隣りで検出されたもの（ピット6）と床面の中央部で検出されたもの(ピット7)がある。前者は径約60㎝、深さ約10Ccmとやや浅いもので、なかに木炭や焼さ約10㎝と浅く、同様に本炭、焼土の堆積がみられる。出土遺物はない。

**〔出土遺物〕**床、カマド内、貯蔵穴状ピット、住居内堆積土から出土している。ここでは主に実測図の作成できたものをとりあげた。

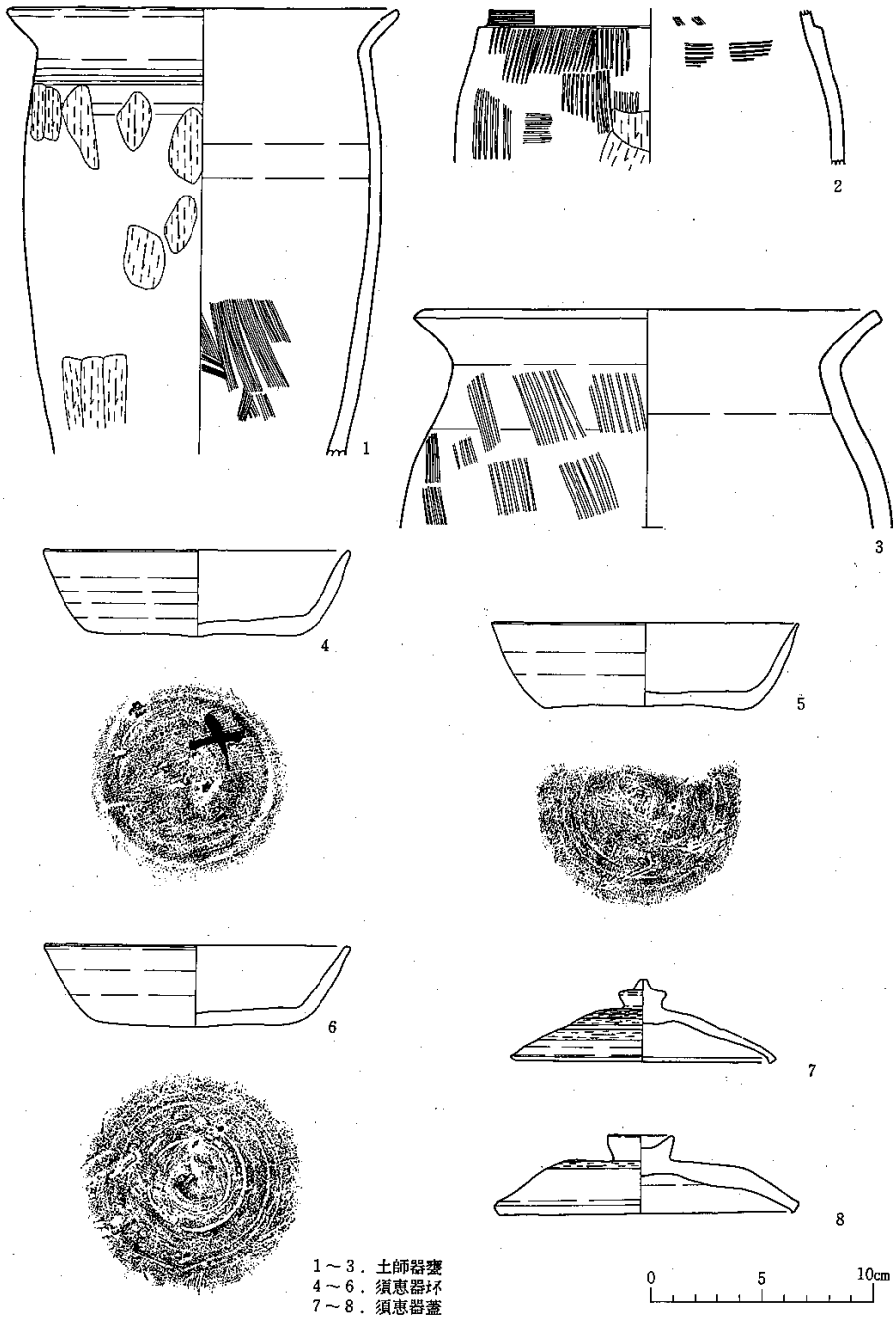
**床面出土遺物**

**土師器**

**坏**　床面から口縁部破片が1点出土しているが、小破片のため図化できなかった。ロクロを使用しているもので、内面にヘラミガキが施され黒色処理されている。

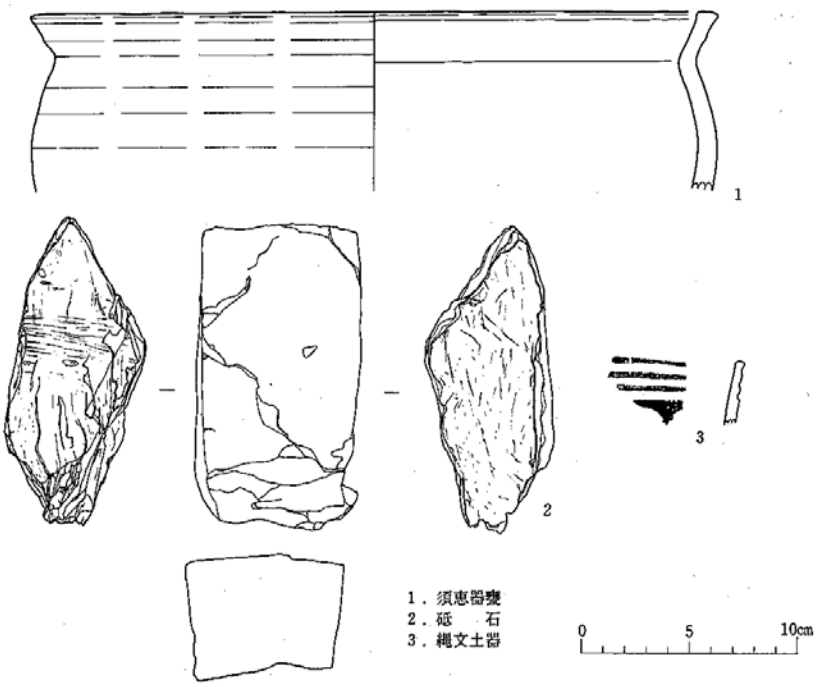
**甕**（第10図1）体部下半が欠損している。口縁部に最大径をもつ長胴形をなすもので、口縁部は外傾している。製作に際しロクロを使用している。器面調整は体部外面ではヘラケズリが行なわれており内面は体部下端に縦方向のナデがみられる。

**竹製品**（図版4下）床面に粘りついた状態で出土したものである。半さいした細い竹を束ねたと思われる製品であるが、遺存状況が悪く形体、性格とも不明である。




1～3．土師器甕
4～6．須恵器坏
7～8．須恵器蓋

第10図　第２号住居跡出土遺物




第11図　第２号住居跡出土遺物

**カマド内出土遺物**

**土師器**

**甕**　製作に際し、ロクロを使用したもの(第10図3)と、そうでないもの(第10図2)とがある。前者は体部下半が欠損している。頚部は曲線的に外反し、口縁部は外傾する。器面調整は、体部外面にタタキのちロクロ調整、内面はロクロ調整となっている。後者は、口縁部上半と体部下半が欠損しており全体の形状は把握できない。器面調整は、外面では口縁部が横ナデ、体部が刷毛目となっており、内面は部分的に刷毛目、横ナデが観察される。また体外部面には一部ヘラケズリが見られるが、刷毛目との前後関係は明らかでない。

**須恵器**

**甕**（図版5・ｈ）カマドの左側壁内面のおさえに用いられたもので、体部破片のみである。焼けひずみのため、全体がゆがんでいる。内面に自然釉がみられる。

**蓋**(第10図7)宝珠形のつまみをもつもので、口縁端部が幾分下方に折り曲げられている。天井部外面に回転ヘラケズりが施されている。

**堆積土出土遺物**

**須恵器**

**坏**(第10図4･5･6)3点とも床面に近い部分から出土している。いずれも、底部切り離し技法がヘラ切りによるもので、体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に外傾している。なお第10図4は底部底面に「メ」(?)の墨書がみられる。

**甕**(第11図1)体部下半が欠損している。口縁部は外反し、端部は平担である。

**蓋**（第10図9）リング状のつまみをもつもので口縁端部がわずかに下方につまみ出されている。

天井部外面には回転ヘラケズリがみられる。

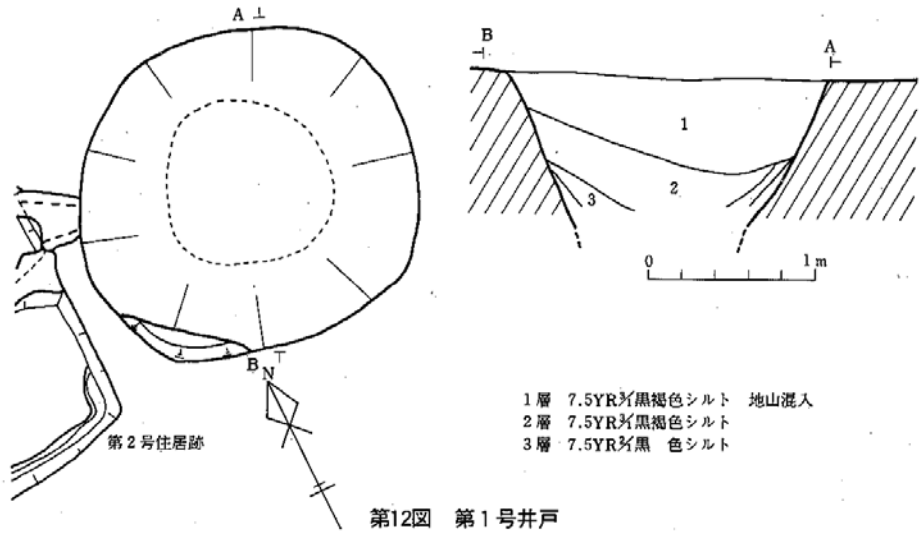
**砥石**(第11図2)砥面は表裏の2面認められる。裏面に比し表面はかなり使用されており、周縁がやや丸味をおびている。両側面は自然面となっている。

**縄文土器**(第11図3)鉢形土器の口縁部破片である。口縁部外面に3本の横位沈線が走る。沈線より下は欠損しているが磨消縄文が配されると思われる。内面はミガキ調整されている。あるいは弥生土器かも知れない。

### (3) 井戸

**第1号井戸**(第12図)第2号住居跡の東側で確認された。同住居跡の煙道を切っている。湧水が激しいため、深さ約80cmまでしか掘り下げることはできなかった。

平面形は円形で、直径は約2mである。断面は掘り下げた地点まででは逆台形を呈している。堆積土は4層に分かれ、第2層以下は中央がくぼんだ状態で堆積している。第1、第2層は層




第12図　第１号井戸

中に多くの地山ブロックを含んでおり、人為的な埋り方を示している。遺物は出土していない。

**第2号井戸**（第5図）Ｅ－29区において確認された。平面形は円形である。上端径約2.2ｍ下端径約150㎝、深さ約2ｍで断面形は逆台形をしている。堆積土の状況は、湧水のため泥土化しており図化することはできなかった。遺物は出土していない。

### (4) 溝

全体で11本検出された。すべて第2層上面から掘り込まれている。幅は80～130㎝で東西および南北の2つの方角にのびており、方向に統一性が認められる。堆積土は黒色および黒褐色シルトが主体である。各溝はいくつかの部分で切り合っていたが、土性、土色が類似しており、新旧の判別は困難であった。そのなかで、第6号溝が第7号溝を切っているのが確認されている。また第6号溝は、第2号住居跡を切っている。各溝とも出土遺物はない。

### (5) 土壙

平面形は長軸2.5m、短軸2ｍの楕円形を示し、深さは30㎝である。堆積土中から鉄滓が出土している。地元住民の話では、つい最近まで同地に鍛冶場があったらしく、鍛冶場跡と思われる。

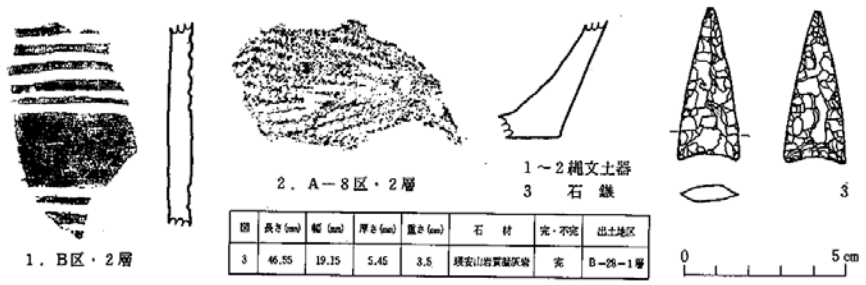
### (6) 遺構に伴わない出土遺物

表土および第2層から土器、石器が出土している。土器はすべて小破片である。

**縄文土器**（第13図1・2）

1は鉢形土器の体部破片と思われる。外面には数条の沈線が横走する。内外面ともミガキ調整されている。2は鉢形土器の体部から底部にかけての破片と思われる。体部外面に縄文が施されており、内面はミガキ調整されている。

石器（第13図3）無茎の石鏃である。風化のためやや磨滅しているが、入念に調整剥離を加えた跡が全面に観察される。先端部と基部の一部がわずかに破損している。残存の長さ46.5㎜、




| 図 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | 石材 | 完・不完 | 出土地区 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 46.55 | 19.15 | 5.45 | 3.5 | 頁岩質凝灰岩 | 完 | B－28－1層 |

第13図　遺構に伴なわない遺物

幅19.1㎜と大形のものである。

その他、土師器、須恵器、中世陶器等が少量出土しているが、すべて破片のため詳細は不明である。これらについては、破片集計表で示すにとどめた（第2表）。

**第2表　中里地区破片集計表**

| 種別 | 器形 | 部位 | 器面調整 外面 | 器面調整 内面 | 1住 カマド | 2住 床 | 2住 カマド | 2住 貯蔵穴(ピット6) | 遺構外出土 A－11 | A－16 | A－17 | A－21 | A－33 | C－39 | 不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 坏 | 口縁部 | ロクロ | ミガキ（黒） | | 1 | | | | | | | | | |
| | | 体部 | ケズリ→ミガキ | ミガキ（黒） | | | | | | | | 1(II層) | | | |
| | 甕 | 体部 | ロクロ | 不明 | | 1 | | | | | | | | | |
| | | | ロクロ（タタキ） | 不明 | | | | 1 | | | | | | | |
| | | | ケズリ | 刷毛目 | | 2 | | | | | | | | | |
| | | | 不明 | 不明 | | | 2 | 1 | | | | 1(II層) | | | |
| 須恵器 | 坏 | 口縁部 | ナデ | ナデ | | | | | | 1(II層) | | | | | |
| | 甕 | 体部 | タタキ | 不明 | | | | | | | | | | | 1 |
| | | | 不明 | 青海波 | | | | | | | | | | 1(I層) | |
| | | | 不明 | ロクロ | | | | | | | 1(II層) | | | | |
| | | 底部 | ロクロ | 不明 | 1 | | | | | 1(II層) | | | | | |
| 中世陶器 | 甕 | 体部 | | | | | | | | | | 1(II層) | | | |
| | 不明 | 底部 | | | | | | | | | | | 1(I層) | | |

# Ⅳ　考察

## 1　大門地区

同地区からは墓壙･溝･土壙が検出されたが、これらの遺構については時期、性格など不明な点が多い。また、遺物はすべて破片であり、時期の判明したものは、きわめて少ない。

### (1) 遺構

墓壙からは、人骨のほかキセル、寛永通宝などの副葬品が出土していることから、近世の墓であることが判明した。

溝については、7本のいずれも規模･堆積土･走る方向などに共通性が見られることから、あるいは同時期のものかと思われる。このうち、第1号溝は、近世の墓によって切られてあり少なくとも近世以前のものと考えられる。しかし、時期を推定しうる遺物が出土しておらず、正確な年代は不明である。

土壙については、遺物もなく、時期･性格とも明らかでない。

### (2) 遺物

土師器･須恵器･中世陶器･石器がある。土師器･須恵器については、すべて破片であったが、その数量、器面調整についてはすでに第1表で示した。このうち、土師器坏の体部破片で、外面がロクロ調整､内面がヘラミガキ･黒色処理の器面調整が見るれるものがある｡これについては、その特徴から平安時代に属するものと考えられる。

中世陶器は2点出土したが、ともに破片である。このうち、壺の口縁部破片については、生産地は不明であるが、軽い受口状の口縁形態から、白石市の東北窯跡出土のものと類以しているとも考えられる（藤沼邦彦；1977）。

石器は縄文時代のものと思われるが、詳細は不明である。

## 2　中里地区

### (1) 住居跡の構造

住居跡の具体的な構造についてはすでに述べた。その結果、カマドの形態、周溝の有無など各施設において異なる点が認められた。したがって、ここでは二つの住居跡を各施設ごとに比較検討してみる。

〔床〕第1号住居(以下、第1号住を1住、第2号住を2住とする)は中央部が地山で周縁部は貼り床となっているのに対し、2住は全面に貼り床となっている。

**〔柱穴〕**両者とも方形に4個配されているが、1住はほぼ4隅を結ぶ対角線上にあるのに対し、2住は北側の2個（ピット1、4）が対角線上で南側の2個（ピット2、3）は壁際に位置している。

**〔周溝〕**2住には周溝が確認されたが、1住には見られなかった。

**〔カマド〕**カマドの位置、構造、構築方法に違いが認められる。

位置:1住が北辺に位置するのに対し、2住は東辺に位置する。

構造:カマドは多くの場合、燃焼部、煙道部、煙り出し部から構成されている。1住の場合、燃焼部は認められたが、焼道部、煙り出し部については不明であった。2住は燃焼部と煙道部が確認されており、煙り出しと推定される部分は第1号井戸によって切られていた。なお、2住の燃焼部左側壁にオサエのために須恵器甕が使用されている。

構築方法:1住は地山を掘り込み、さらに粘土を貼りつけて燃焼部を造り上げたのに対し、2住は壁を削らず、壁に粘土を貼りつけて燃焼部を構築している。また、2住の煙道部はなかに粘土の堆積土がみられることから、粘土を用いて天井を構築したものと考えられる。

**〔貯蔵穴状ピット〕**2住から、木炭や焼土が堆積しているピットが2個認められた(ピット6･7)。ピット6からは土師器、須恵器が出土しており、位置、堆積物などから貯蔵穴と考えられた。ピット7は堆積物はピット6とほぼ同様であるが、貯蔵穴としてみた場合、床の中央に位置する例はなく性格は不明である。1住には、貯蔵穴と考えられる施設は認められない。

**第３表　住居跡の構造**

| 項目 / 住居No | 位　置 | 平面形 | 床面積 | 床面状況 | 柱　穴 | 周　溝 | カ　マ　ド | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 位置・方向 | 構　造 | 構築方法 |
| 第１号住居跡 | B—12 | 隅丸長方形 | 30.31㎡ | 周縁部が貼床 | 対角線上に４個 | 無 | 北　辺 N-4°-W | 燃焼部のみ煙道，煙り出しは不明 | 掘り抜きと粘土貼りつけによる |
| 第２号住跡居 | B—24 | 隅丸長方形 | 16.69㎡ | 全　面が貼床 | 対角線上に２個壁際に２個 | 有（掘り方を有す） | 東　辺 N-91°-E | 燃焼部，煙道部，煙り出し部（推定）からなる | 粘土貼りつけによる |

以上の点に違いが認められた。このほか第2住居跡では周溝に沿って掘り方が検出されているが、このことについては後に述べる。

## (2) 出土土器の分類

出土土器には、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器がある。縄文土器は2点、中世陶器は1点出土したが明確な時期は不明のものである。ここでは土師器、須恵器について分類する。

分類に際しては、図示したものを中心に行い、図示できなかったものについては破片集計表で

一括した。

**〈土師器〉**坏と甕がある。

**坏**：2点あり、これらは製作の段階でロクロを使用しないもの(Ⅰ類)と、、使用したもの(Ⅱ類)とに分類することができる。

Ⅰ類は、庭部が欠損しており、その形状は明らかでないが埦形に近いものと考えられる。外面は体部にヘラケズリが行なわれ、その後口縁部から体部にかけてヘラミガキが施されており、内面はヘラミガキ、黒色処理されているものである。

Ⅱ類は、口縁部破片のみで図示できなかったが、外面にロクロ調整痕があり、内面は、ヘラミガキ、黒色処理が行なわれている。

**甕**：実測できたものは6点である。坏と同じように、ロクロを使用しないもの（Ⅰ類）とロクロを使用したもの（Ⅱ類）とに分類された。

I類は頚部に段を持つもの(Ⅰa類)と持たないもの(Ⅰb類)に分かれる。Ⅰa類は長胴形を示すもので、口縁部は外反し内外面に横ナデがみられ、体部は内面が刷毛目、外面は腋毛目、ヘラケズリが施されている。Ⅰb類は、口縁端部と体部下半を欠いているが体部の形態から、同様に長胴形をなすものと推定される。口縁部は内外面に横ナデ、体部は内面が刷毛目、外面は刷毛目、ヘラケズリ調整されている。

Ⅱ類は最大形が口縁部にあるもの（Ⅱa類）と体部にあるもの(Ⅱb類)とに細分される。Ⅱa類は長胴形をなすもので、体部外面にヘラケズリがみられる。Ⅰb類は外面にタタキが施されている。

**〈須恵器〉**坏、甕、蓋がある。

**坏**：3点ある。いずれも体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、体部と底部の境がやや丸味をもつ。底部はヘラ切り技法によって切り離されたものである。切り離し後の調整はない。

**甕**：図示できたのは2点である。両者とも体部上半から口縁部にかけてのもので、体部は丸味をもち口縁部が外傾するものである。

**蓋**：2点ある。つまみの脹態により二つに分類される。Ⅰ類は宝珠形のつまみを有し、Ⅱ類はリング状のつまみを有する。ともに天井部外面に回転ヘラケズリによる再調整が加えられている。

### (3) 出土土器の組み合せと年代

出土土器は以上のように分類された。土器と分類記号との対照は第4表になる。これらの各類のいくつかは住居内において共伴する。

住居跡では床面、カマド内、住居内堆積土から遺物が出土している。床面およびカマド内、貯蔵穴内の遺物は、住居が廃絶された時点で住居内に残されたものと考えられ、一般に住居年代決定の遺物とされている。一方住居内堆積土出土のものについては、堆積層が住居廃絶後流入したものであり（いずれも自然堆積と考えられた）住居廃絶時のものではない。したがってこれらの土器は、床面、カマド内等の土器と共伴するとはいえない。

このことから土器の共伴関係をみると、第1号住居跡では土師器坏Ⅰ類、甕Ⅰb類（1群）、第2号住居跡では土師器坏Ⅱ類・甕Ⅰa・Ⅱa・Ⅱb類・須恵器蓋Ⅰ類（2群）という組合せになる。

**第4表　図示遺物分類表**

| 図版番号 | 出土地点 | 種　別 | 器　形 | 分　類 | 図版番号 | 出土地点 | 種　別 | 器　形 | 分　類 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第8図1 | 1住　床 | 土師器 | 坏 | Ⅰ | 第10図3 | 2住カマド | 土師器 | 甕 | Ⅱa |
| 2 | カマド | 土師器 | 甕 | Ⅰb | 4 | 堆積土 | 須恵器 | 坏 | |
| 3 | 床 | 土師器 | 甕 | Ⅰb | 5 | 堆積土 | 須恵器 | 坏 | |
| 4 | 堆積土 | 土師器 | 甕 | | 6 | 堆積土 | 須恵器 | 坏 | |
| 5 | 堆積土 | 須恵器 | 甕 | | 7 | 貯蔵穴 | 須恵器 | 蓋 | Ⅰ |
| 第10図1 | 2住　床 | 土師器 | 甕 | Ⅱa | 8 | 堆積土 | 須恵器 | 蓋 | Ⅱ |
| 2 | カマド | 土師器 | 甕 | Ⅰa | 第11図 | 堆積土 | 須恵器 | 甕 | |
| 1　群 | 第8図1．2．3． | | | | 2　群 | 第10図1.2.3.8.(坏Ⅱ類は図示せず) | | | |

次に土器の年代について検討してみると、土師器坏Ⅰ類のような特徴をもった土器は、迫町対馬遺跡（小井川和夫・高橋守克：1977）、志波姫町糠塚遺跡（宮城県教委:1978）、田尻町天狗堂遺跡（宮城県教委:1978）などから出土しており、これらはいずれも国分寺下層式(氏家和典:1967)とされている。土師器坏Ⅱ類は口縁部破片のみで比較するのに厳密とはいえないが、ロクロを使用している点で、塩釜市表杉ノ入貝塚出土の土師器(加藤孝:1954)を標式とする表杉ノ入式(氏家:1957)と類似しており、これは同型式に属するものと考えられる。また、共伴関係から、土師器Ⅰaは国分寺下層式、土師器Ⅰb，Ⅱa，Ⅱb類は表杉ノ入式に位置づけられ、須恵器坏Ⅰ類についても、表杉ノ入式期と同時期に属するということができる。

須恵器坏は体部と底部との境がやや丸味をもち幾分丸底状を呈し、底部切り離し技法はヘラ切りによって行なわれ再調整がみられない。こういった特徴をもつ坏は、岡田、桑原の分類によって6a類とされ8c後半から9c初頭に位置づけられている(岡田茂弘・桑原滋郎：1974)。
このほか築館町伊治城跡で国分寺下層式の土器との共伴例がみられる（氏家はか:1978）。

須恵器甕については口縁部のみの資料のため器形を窺い知ることはできないため、遺物の紹介のみにとどめる。須恵器蓋Ⅰ類はつまみの特徴が糠塚遺跡で国分寺下層式期の住居跡に伴って出土したものに類似している。口縁端部の形態は幾分異っているが、恐らく同時期に近い年代のものと思われる。

なお、カマドのおさえに使用された須恵器甕は、体部破片のため分類できなかったが、焼きひずみがみられることから、近くに須恵器の窯跡の存在が予想された。付近の窯跡として狐塚遺跡があり、あるいは同遺跡からの供給が考えられる。

### (4) 住居跡の年代

以上のような土器の年代から第1号住居跡は国分寺下層式期、第2住居跡は表杉ノ入式期に属するものと考えられる。

ところで第2住居跡の堆積土からほぼ完形の須恵器坏3点出土しており、これらはいずれも8ｃ後半から9ｃ初頭の年代が与えられている。第2号住居跡は表杉ノ入式期に属するものであるが表杉ノ入式期は一般には9ｃ以降から始まるとされており、これに従えば坏の下限年代とわずかに一致する。一方これらの坏は前にも述べたとおり、住居跡が埋まる過程のうちに入り込んだものと考えられるが、床面に近い部分から出土していることから、住居跡が埋まり始めてさほど長い時期を経ないうちに包含されたのだろうと推定される。

この観点に立つならば、第2号住居跡は表杉ノ入式期のものとしながらも、かなり初期に近いものと考えられよう。

### (5) 住居跡における問題点

県内では、奈良および平安時代の住居跡は数多く発見されているが、その形態は各施設においてかなりまちまちで、現在のところ時期的にも、地域的にも類型化したものは見い出されていない。したがって、本遺跡の住居跡については、奈良、平安時代の具体例の一つとして紹介するにとどめておきたい。

さて、第2号住居跡において、周溝に沿って周縁部を巡る掘り方が検出されている。堆積土には一様に、地山の小ブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻したものと推定される。一方、周溝はこの掘り方の埋土の上面で、黒褐色シルトの堆積した溝として明瞭に検出されている。

こういった状況からこの掘り方は周溝に関連するものと考えられる。しかし現在、他の遺跡から検出され明示された例をみないため、具体的なことは明らかにすることはできないが、以上述べたような事実から、例えば壁に立てられた壁板のような施設などが想定される。いずれにしても周溝の機能を考える上で注目すべきものと思われ、今後こういった類例が発見されるのを待ちたい。

### (6) その他の遺構の年代

住居跡のほか井戸2基、溝11本検出されているが、これらはいずれも出土遺物がなく年代を明らかにすることはできない。ただし、第1号井戸および第1号溝は第2号住居跡を切っており、これより新しい時期に掘られたものであることが判明している。

## V まとめ

1. 本遺跡は調査の結果、中央に沢をはさみ北の中里地区、南の大門地区に分かれることが判明した。
2. 中里地区から国分寺下層式期と表杉ノ入式期の竪穴住居跡が2軒、および時期不明の井戸2基、溝11本が発見されれこのうち表杉ノ入式期の住居跡はその初期に属する可能性がある。大門地区からは近世の墓壙1基、時期不明の土壙6基、溝7本が発見されている。
3. 土師器、須恵器のほかに僅かではあるが、縄文土器、石器、中世陶器が出土しており、発掘区外で、これらの遺物に関係する遺構の存在も予想される。
4. 本遺跡は、付近の地形状況から、東西にさらに広がることが考えられる。

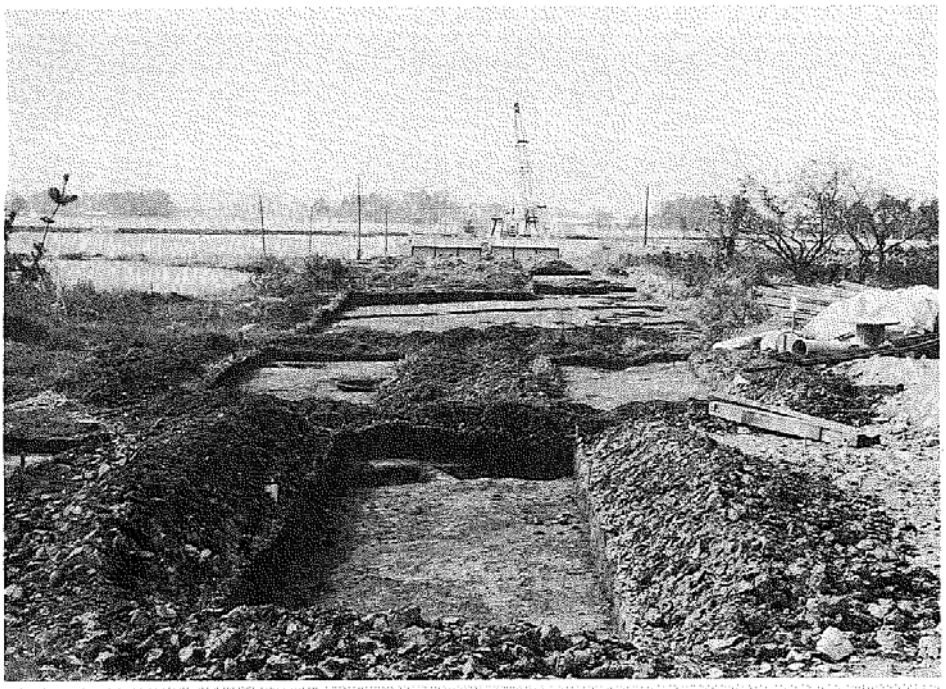
引用・参考文献

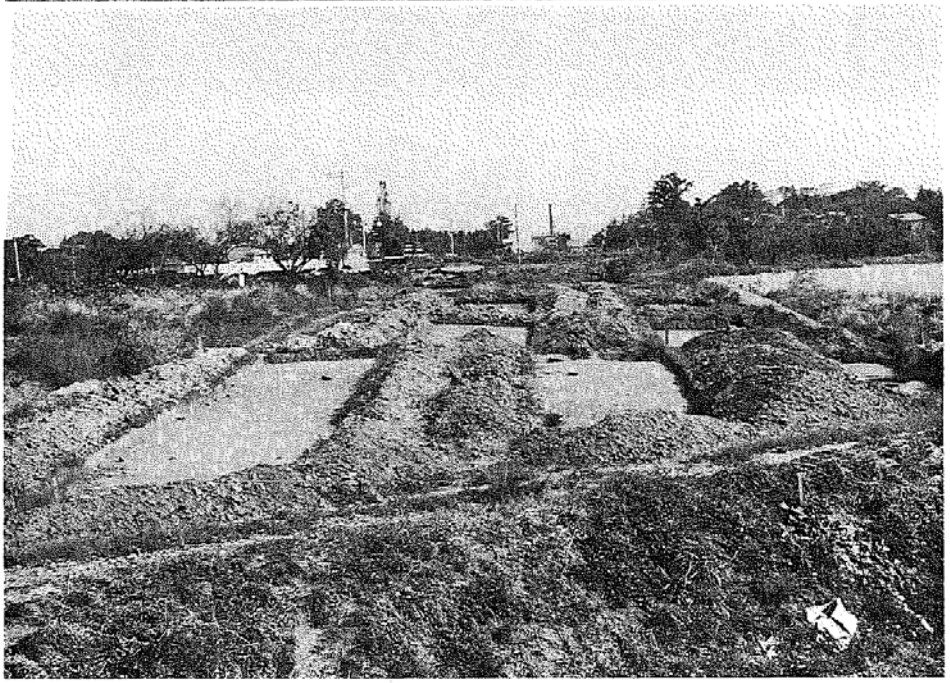

宮城県教育委員会（1978）：「宮城県文化財調査略報－鶴ノ丸遺跡・糖塚遺跡－」宮城県文化財調査報告書第53集
（1979）：「宮城県文化財調査略報－御駒堂遺跡・宇南遺跡－」宮城県文化財調査報告書第57集
田尻町教育委員会（1978）：「田尻町文化財調査略報－天狗堂遺跡－」田尻町文化財調査報告書第1集

小井川和夫
高橋　守克（1978）：「宮城県対馬遺跡出土の土器」宮城史学5号

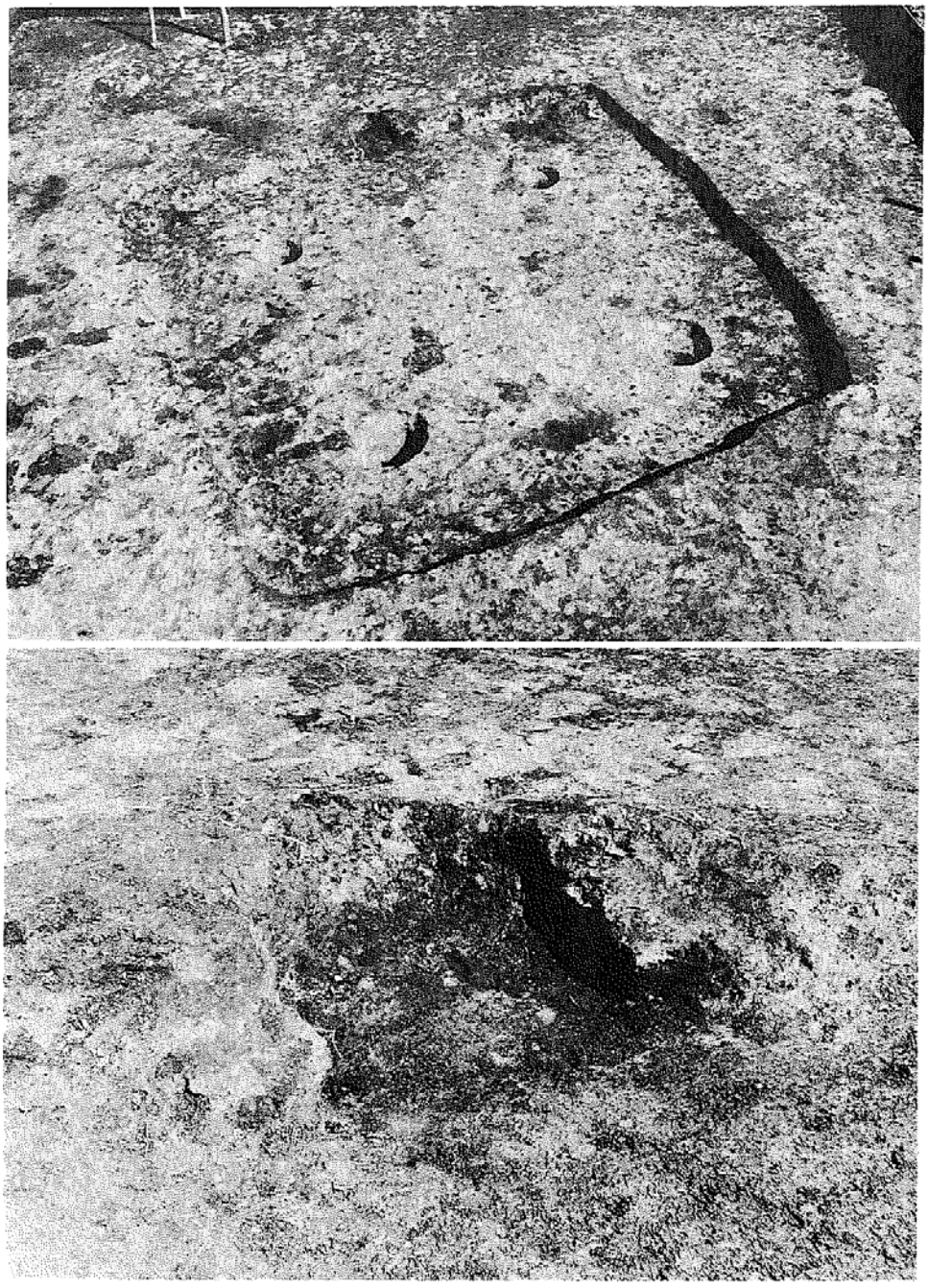
加藤　孝（1954）：「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論文集Ⅴ
氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯
（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題－」柏倉亮吉教授還環暦記念論文集
岡田　茂弘
桑原　滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所
氏家　和典ほか（1978）：「伊治城跡」Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所
藤沼　邦彦（1977）：「宮城県出土の中世陶器について」東北歴史資料館研究紀要第3巻

# 図　　版

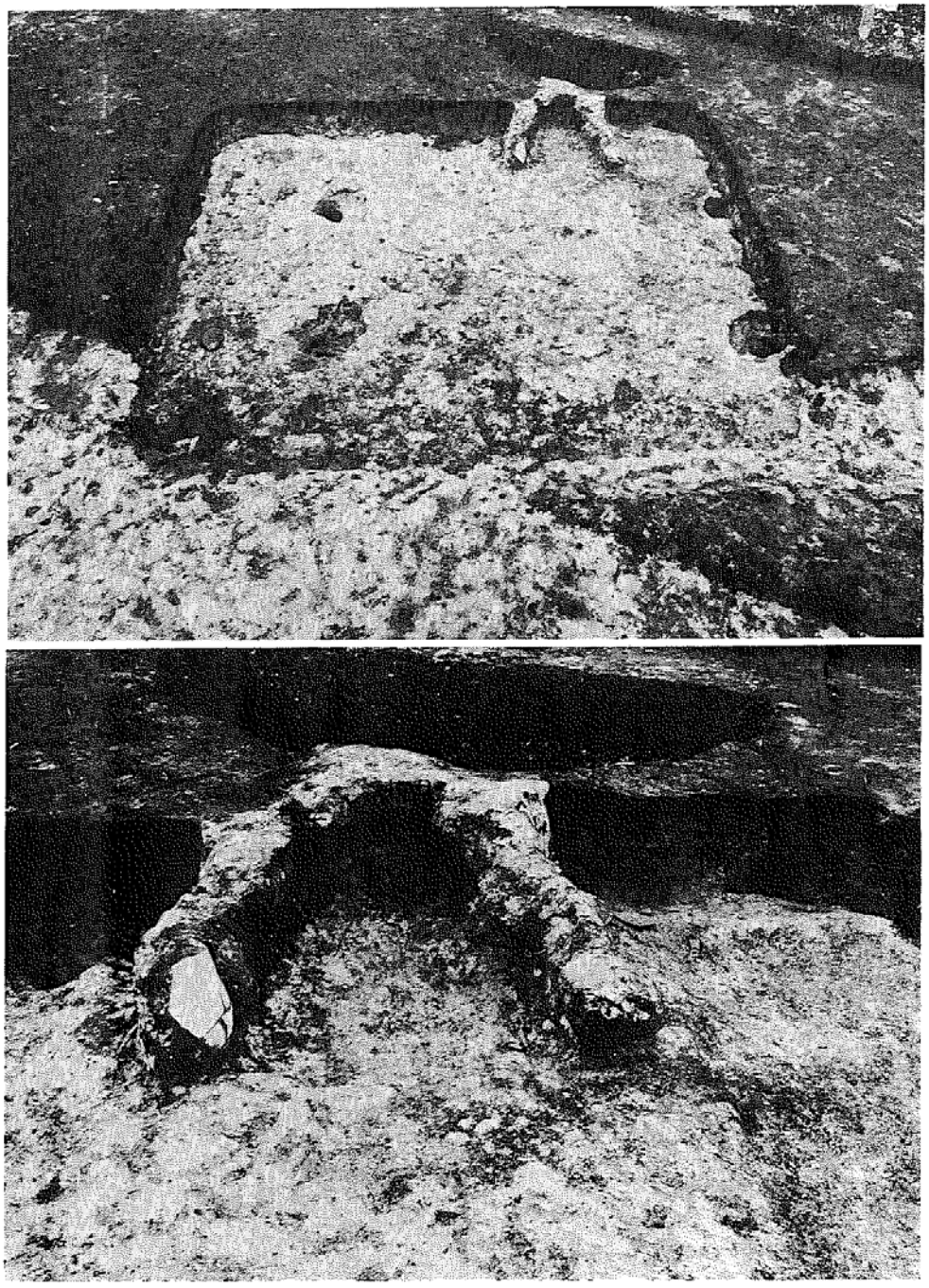




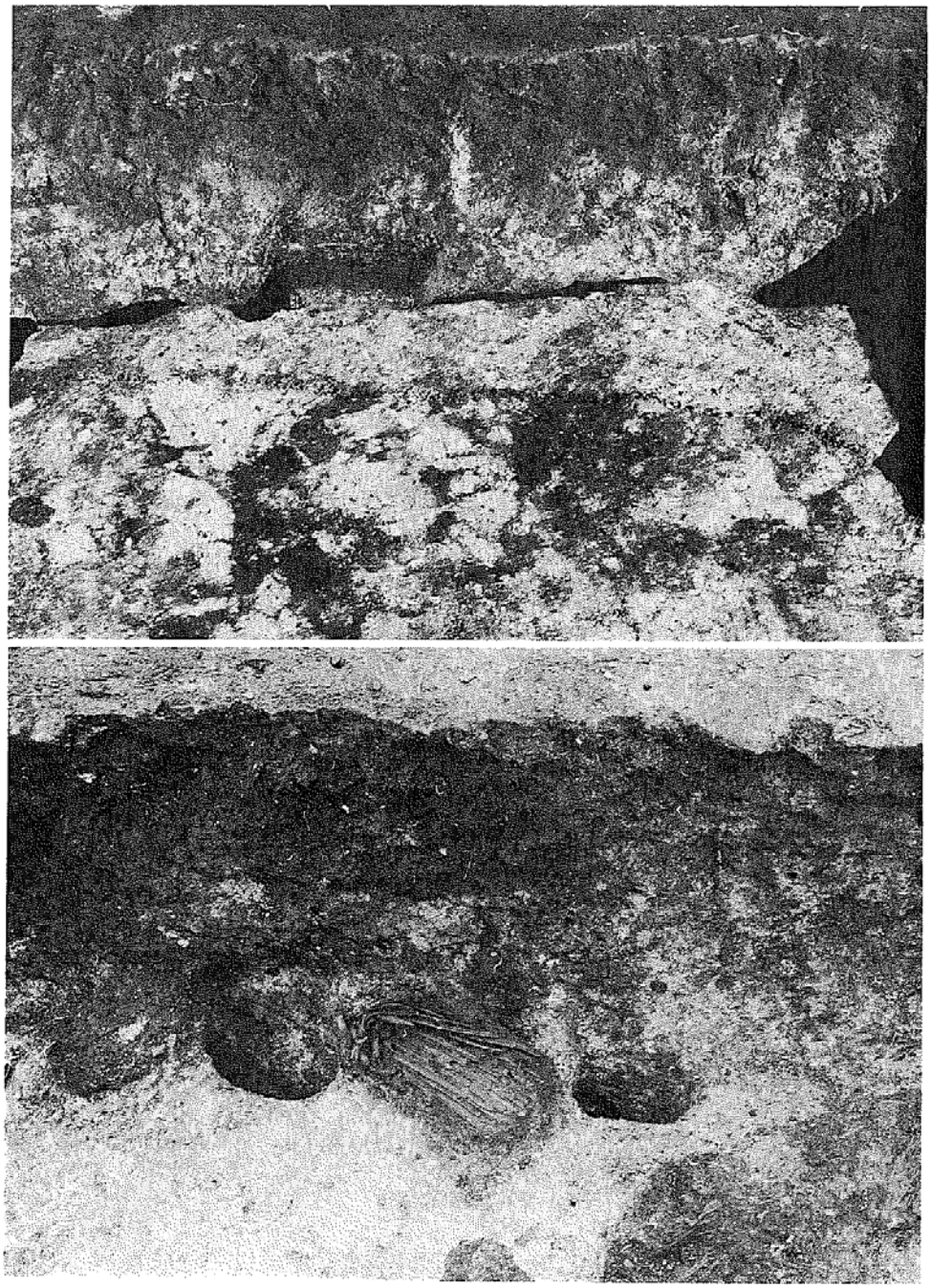
図版１　上：大門地区全景
下：中里地区全景



図版２　上：第１号住居跡
　　下：同カマド



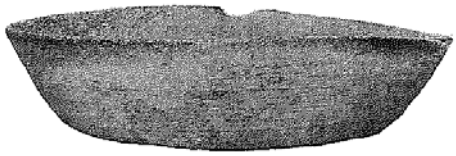
図版3　上：第2号住居跡
　　下：同カマド



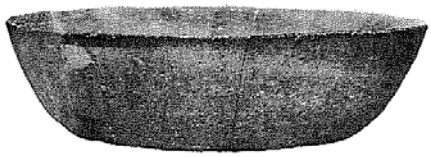
図版 4　上：周溝とその掘り方
　　下：竹製品出土状態

1：10図1

2：8図1

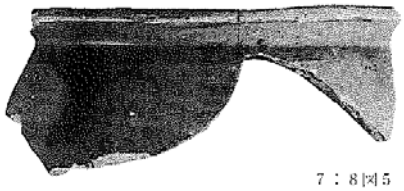


4：10図6



3：10図5

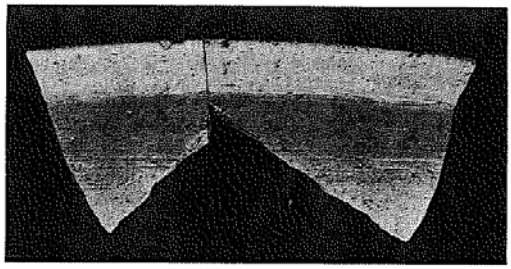
5：10図7



7：8図5

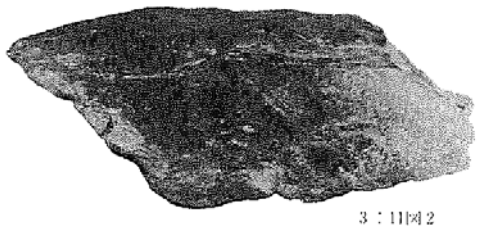
6：10図8

8



9：11図1

図版5　出土遺物

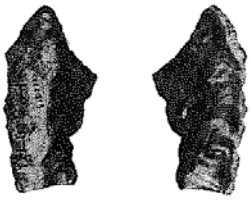


3：11図2

1：11図3

2：13図1

4：13図3



5：4図2

図版6　出土遺物